522
55

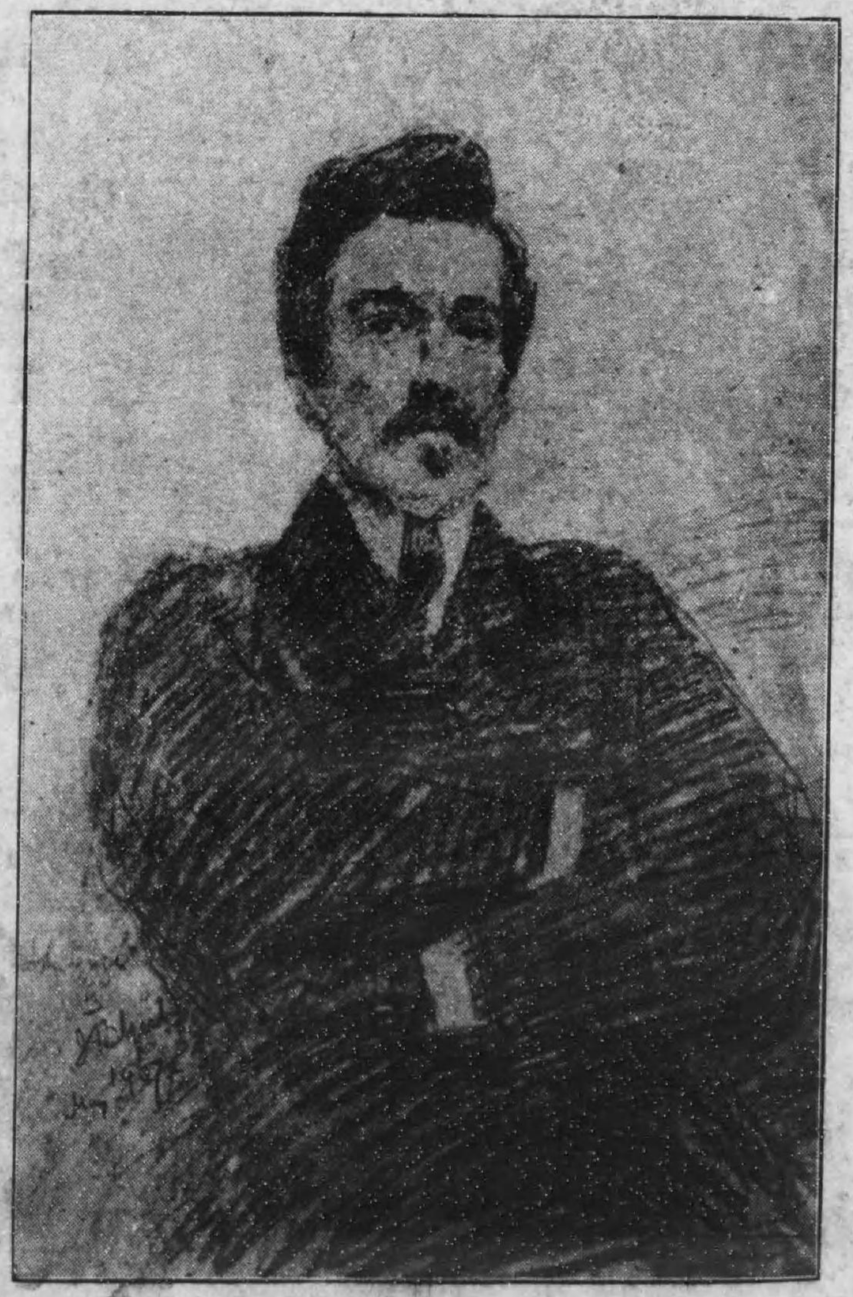
522-55

シング戯曲全集

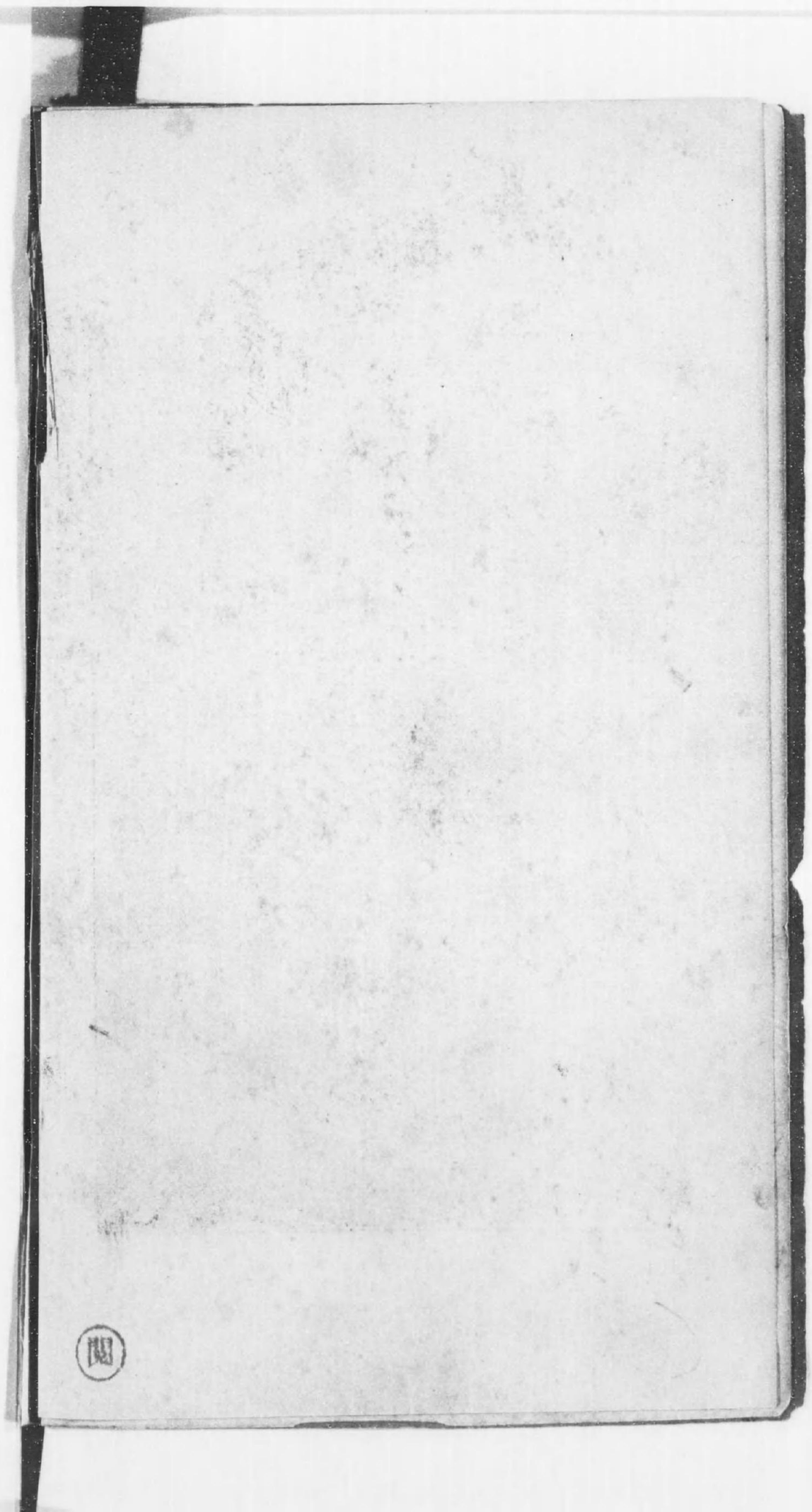
秋田雨雀序
日高只一閲
藤江勝譯

大正
12.7.31
内交

1923
聚英閣



欠



目次

海に乘り入る者等（一幕）……一
谷間の蔭（一幕）……二九
聖者の泉（三幕）……五九
鑄掛屋の結婚（二幕）……一四三
西海岸の鬼息子（三幕）……一九三
きのディアダア（三幕）……三三三

閲

欠

海に乗り入る者等

人物

モーリヤ　老婆
バートリー　その息子
カスリーン　その娘
ノーラ　妹娘
濱の男女たち

場所

アイルランド西方沖合の或島。

漁師の小屋の臺所。網、油衣（かっぱ）、紡車（いと）、二三枚の新しい板などが壁に立て掛けてある。カスリーン、二十歳位の娘、燕麥麪包を捏ね上げ、それを鍋に入れて火にかける。それが濟むと手を拭いて、紡車の輪を廻し糸を紡ぎ始める。ノーラ、小娘、下口に現れる。

ノーラ（低い聲で）

おつかさんは何處？

カスリーン

横になつてゐるのよ。えゝ、眠られさへしたならば睡つてゐるかも知れないのよ。

ノーラ靜に入り來る。そしてショールの下から包を一つ取り出す。

カスリーン(紡車を速く廻しながら)

何をあんたは持つて來たの?

ノーラ

若い坊さんが持つて行けつて言ひなすつたのよ。シャツが一枚と飾のない靴下が一つなの。ドーンガルで水に溺れた水死人が著てゐたんですつて。

カスリーンふと紡車を止め、體を前に乘り出して耳を傾ける。

ノーラ

あたし遂は何時かおつかさんが濱へ行つた留守に、それがマイケルのかどうかよく見なければならないのねえ。

カスリーン

まあ、ノーラ、あなたは何うしてそれがマイケルのだと思はれるの。なんで兄さんがそんな遠い北海の果なんぞに行きませう。

ノーラ

若い坊さんがそれに似たのに見覺えがあるつて仰言つたのよ。そしてね、もしそれが兄さんのだつたら、神樣のお惠みで清い水葬禮を兄さんがすませたつて、あたしがおつかさんに知らせるんですつて。それから若しそれが兄さんのでなかつたなら、おつかさんは泣いたり悲しんだりして直に死んで仕舞ふから、そのことを一言も言つてはいけないつて仰言つたのよ。

ノーラが半ばしか閉めない扉が、一陣の突風に煽られてばたんと開く。

カスリーン(心配さうに見廻はしながら)

あなたは坊さんに、今日バートリーが馬を曳いてガルウェーの市場に行くのを、止めて下さる樣にお願ひして下すつて?

ノーラ

坊さんは無理には止めないけど、心配するには及ばないつて仰言いましたのよ。それからね、おつかさんは自分で夜中までお祈りをしていらつしやるから、全能の神樣はおつかさんの子供の生命を一人殘らず奪つてしまつて、おつかさんを一人ぼつちの頼りない身にはおさせなさらないだらうつて、坊さんが仰言つてよ。

カスリーン

ノーラ、白岩のあたりは海が荒れてゐて？

ノーラ

えゝ、可なり荒れてゐてよ。西の方は大暴風雨なんですの。そして潮が風と反對に流れると尙一層ひどくなるでせう。（包を抱へてテーブルの所に行き著く。）直ぐ開いてみませうか。

カスリーン

あたし達が見終らないうちに、おつかさんが眼を覺して這入つて來るかも知れないわ。（テーブルの方へ行きながら）あたし達二人はこれから長い間泣き暮さなければならないのよ。

ノーラ（奥の戸口の所に行き耳をすます）

おつかさんは寢床の上で動いてゐるわ。もう直き出て來るでせう。

カスリーン

梯子を持つて來て頂戴な。あたしが屋根裏に載せときませう。さうすればおつかさんには一寸も知れやしない　よ。潮が變れば、マイケルが波に漂ふて東から流れて來ぬかと、おつかさんは濱邊に見に下りて行くかも知れませんわ。

二人は煙窓の張出しに梯子をかける。カスリーンは二足三足上がつて、屋根裏の泥炭倉に包を隱す。モーリヤ奥の部屋より出で來る。

モーリヤ（カスーリーンの方を見上げ、ぶつぶつ言ひながら）

もう今日は晩までの泥炭が足りないのかえ。

カスリーン

一寸の間燕麥麪包を火にかけて燒くのですの。（泥炭を投げながら）バートリーだつて潮が變つてコンネマラまで行くやうになれば、燕麥麪包が要るんでせう。

ノーラ泥炭を拾ひ上げ、それを鍋のまはりにおく。

モーリヤ（爐傍の腰掛に腰をかけながら）

西南の風が吹いてるから、あの子は今日は行きやしないよ。あの若い坊さんが屹度止めて下されるから、あの子は今日は行かれやしないよ。

ノーラ

おつかさん、あの坊さんは兄さんを止めては下さらないのよ。それにイーモン、サイモンや、スチーヴン、フィーティや、コーラム、シォーンが、兄さんは行くだらうつて言つてゐるのをあたしは聞きましたわ。

モーリヤ

あれは一體何處にゐるのだえ。

ノーラ

バートリーはねえ、この週に出る船が外にあるか何うかつて、濱まで見に行つたのよ。だけど直に戻つて來るでせう。なぜつて潮が靑岬の所で變つて來たし、漁船が東の方から間切つて來るんですもの。

カスリーン

誰か大きな石の處を廻つてくるのが聞えるわね。

ノーラ（外を見ながら）

バートリーがやつて來るわ。大層急いでゐるのよ。

バートリー（入つて來て部屋中を見廻はす。そして悲しさうに、穩やかに言ふ）

カスリーン、コンネマラで買つて來た新しい繩が少しあるかい。

カスリーン おりて來ながら）

ノーラ、それをやつとくれ。ほら、白い板の傍の釘にかゝつてゐるのをさ。足の黑い豚が來て食べてゐたから、あたしが今朝それを懸けておいたのよ。

ノーラ（繩を**バートリ**に渡しながら）

これでいゝの、バートリー。

モーリヤ

バートリー、あとでまた板の傍にきちんと掛けて置きなよ。（バートリー繩を受取る）若しマイケルの死骸が明日の朝にでも、或は明後日の朝にでも、或は又今週の中のどの日かの朝にでも、濱邊に打上げられたならば、ねえ、繩が此處で入用なんだよ。なぜつてマイケルの爲に深い墓を掘つてやりたいんだからね。

バートリ（繩で手綱（たづな）を作る）

馬に乘つて行くのに手綱がないんです。所が私は急いで行かなければならないんです。この艘は二週間置きに一遭出るんか、もつと長いときもあるし。それに濱の人々の話を聞くと、今度の市はいゝ馬市だらうつていふことなんですから。

モーリヤ

死骸が濱に打上げられても、その死骸を入れる棺が出來てゐないと言つたら、濱の衆は惡口を言ふだらう。それにわたしは高いお金を拂つて、コンネマラ中で一番上等な白木の板を買つておいたのだもの。（白木の板を眺める）

バートリー

俺達はこれで九日間毎日搜し廻つてゐたが、少し前から西南の强風が吹いてゐるんだから、何うし

て死骸が上がるもんか。

モーリヤ

屍は打上げられなくても風は波を立て、月夜になつて月が上れば、星が一つ月に對してきらめくだらう。たとへ百頭の馬があつたつて、千頭の馬があつたつて、千頭の馬の値段がたつた一人しか殘つてゐない息子とかけがひになるものか。

バートリー（頭絡を作りながら、**カスリーン**に）

お前は毎日行つて、羊がライ麥の中に跳び込まぬやうに見ておくれ。それから仲買が來たらね、價さへよければ足の黒い豚を賣つて仕舞つてもいゝよ。

モーリヤ

何うしてあの子に好い値で豚を賣ることなんぞ出來るものかね。

バートリー（**カスリーン**に）

もし西風が月のある中續いたら、海草灰（ケルプ）を作るのにお前とノーラと二人して、今一つ海藻を積み上げておいておくれ。これからは働く男は一人切りだから、みんな隨分こたへるぞ。

モーリヤ

お前まで他の兄たちのやうに水に溺れて死んでくれたら、あたし達はどんなに辛いか知れやしない

よ。もう墓場を探し求めてゐる年寄つたこの婆が、娘達を相手にこの先どうして生きながらへることが出來やう。

バートリー頭絡を下に置き、古い上衣を脱ぎ捨て、同じフランネル製の新しいのと著換へる。

バートリー（**ノーラ**に）

船は波よけに近づいてきたかい。

ノーラ（外を見ながら）

青岬を通つてゐるのよ。帆を下ろし始めてゐるわ。

バートリー（財布と煙草とを取り上げて）

濱まで下りて行くのに半時間いる。二日か三日で又歸つて來るよ。いや、風の工合が惡いと四日かゝるかも知れない。

モーリヤ（爐の方へぐるりと振向いて、ショールを頭から被りながら）

海に行くなつて年寄が止めるのに、一言も聞き入れないなんて、まあ、お前はなんて强情な、不人情な子だらう。

カスリーン

海に乘り出すのは若い男の生命（いのち）なんですもの、年寄が一つことを繰り返しおつ繰り返し言つたつて、

誰が聽くもんですか。

バートリー(頭絡を掴みながら)

さあ、俺は急いで行かなきやならない。赤馬に乘つて行かう。鼠色の小馬は俺の後をついて來るだらう。……みんな丈夫でゐておくれ。

バートリー出て行く。

モーリヤ(**バートリー**がまだ家に居るうちから泣き出して)

あゝ、とう〳〵行つてしまつた。あたしたちはもう二度とあの子には逢へないだらう。あの子はもう行つて仕舞つたから、日が暮れて闇夜が來れば、もうこの世の中に私はたつた一人の男の子も持たないのだよ。

カスリーン

なぜおつかさんは兄さんが戸口でうろ〳〵見廻しておつた時、兄さんを祝つてあげなかつたの。ねえ、おつかさんは、兄さんが出て行くあとから不吉な言葉を吐きかけたり、酷い言葉を聞かせたりして、そのまゝ兄さんを追ひやらないでも、内の者がみんな悲しいとは思はなくつて。

モーリヤは火著を取つて、餘所見をせずに、あてどなく火を掻き立て始める。

ノーラ(老婆の方を振り向いて)

おつかさん、燕麥麪包の火をひいて仕舞ふのね。

カスリーン(泣きながら)

あゝ、何うしやう。ノーラ、あたし達は兄さんに麵麭をあげるのをすつかり忘れて仕舞つたわねえ。

カスリーン爐傍に近寄る。

ノーラ

では兄さんは夜までには空腹の爲に疲れ切つて仕舞ふでせう。だつて太陽が昇つてから何も食べられないんですもの。

カスリーン(籠から燕麥麪包を取り出しながら)

屹度兄さんは疲れて倒れて仕舞ふわ。あゝ、おつかさんがのべつにくど〳〵言ふもんだから、内の者はみんな逆上がつてぼうつとして仕舞つたのよ。

モーリヤ腰掛の上に體を投げかける。

カスリーン(麵麭を幾何かに切り、それを布に包みながら)

さあ、おつかさん、噴き井戸の所へ行つて兄さんの通るのを待つてゐて、兄さんにこれを渡してあげて下さいな。さうすればおつかさんは兄さんに逢つて、不吉な言葉をとり消すことも出來るし、それから「神樣のお蔭で無事に行つておいで」つて言つて上げることも出來るから、兄さんだつての

んびりした心持で行けるのよ。

モーリヤ（麵麭を持ちながら）

あの子にわたしは追ひつくかしら。

カスリーン

すぐ、大急ぎで行けば。

モーリヤ（いや〳〵立ち上がつて）

わたしは歩くのが大儀だよ。

カスリーン（母親を心配さうに眺めながら）

ノーラ、大きな石にでも躓くといけないから、おつかさんに杖をおあげ。

ノーラ

どの杖。

カスリーン

マイケルがコンネマラから買つて來た杖をさ。

モーリヤ（**ノーラ**の渡す杖をとりながら）

世間では年寄が息子や小供たちに形見の品を残して行くのに、この家では若い者が年寄に、形見の

品を残して行くのだよ。

考婆のろ〳〵と出て行く。**ノーラ**梯子の所に行く。

カスリーン

お待ちよ。ノーラ、ことによるとおつかさんはふいと歸つて來るかも知れないよ。ほんとうにおつかさんは悲しいんだからね、どんなことになるか知れやしないのよ。

ノーラ

もう藪の所を曲つて行つて？

カスリーン（外を見ながら）

もう行つてしまつてよ。早くおろして下さいな。何時またひよつくり歸つて來ないとも限らないから。

ノーラ（屋根裏から包を取り出しながら）

若い坊さんの言ふのには、明日立つんだから、あたし達に來てマイケルのかどうか、しつかり返事をして下さいつて言つたのよ。

カスリーン（包を取上げながら）

これが何うして見つかつたか坊さんは仰言つて。

ノーラ（下りて來て）

あの坊さんの言ふにはね、二人連の男がボティーン酒を積んで、枯草の山の前を漕いで廻つたんですつて。そしてその人達が北の海岸の黒い崖の所を通り過ぎた時にね、一人の人の櫂に死骸が觸れたんですつて。

カスリーン（包を開かうとしながら）

ノーラ、小刀を貸して頂戴な。紐が鹽水で腐れて、いやな結び目が一週間かゝつても解けさうもないから。

ノーラ（姉に小刀を渡しながら）

人々の話ではドーンガル迄は隨分遠いんですつてね。

カスリーン（紐を切りながら）

本當に左樣なのよ。ついこないだ此處に來た男の人が……さう、この小刀を賣つた男の人が言ふのには、あの向ふの岩の所から出かけて、どこまでも、どこまでも、七日の間歩き續けると、ドーンガルに出るんですつて。

ノーラ

では人一人流れて行くのにどの位かゝるんでせう。

カスリーン包を開いてシャツと靴下とを數枚取り出す。二人はそれをじつと見守る。

カスリーン（低い聲で）

あゝ、ノーラ、これらのものが眞實に兄さんのだかどうかを決めるのは、隨分むづかしいことね。

ノーラ

釘にかゝつてゐる兄さんのシャツをはづして、フランネルのシャツを二つ重ねて見ませう。（隅にかゝつてゐる數枚の衣類を透して見る）カスリーン、みんな違ふのね。どこにマイケルのはあるんでせう。

カスリーン

ぢやきつと自分のシャツが鹽水でびつしより濡れて重くなつてゐたもんだから、バートリーが今朝著て行つたんでせう。（隅を指さしながら）あそこに同じ地でこしらへた筒袖がある筈よ。持つて來て御覽なさい。それで間に合ふでせう。（ノーラ筒袖を姉の所に持つて來る。二人はフランネルを比べて見る）同じ地ねえ。ノーラ、だけどそれと同じ地だつても、ガルウエーの町には同じ切れの反物が澤山にあるでせうし、また多くの人の中にはマイケルと同じシャツを著る人がないとも言へないわねえ。

ノーラ（靴下をとり上げ、針目を數へて見て泣き出す）

マイケルのだわ。カスリーン、あゝ、マイケルのだわ。ねえ、おつかさんはバートリーが今海に出

てゐるのに、この話をお聞きになつたら、何んて仰言るでせう。

カスリーン（靴下を手に取りながら）

飾のない靴下ねえ。

ノーラ

それはあたしが編んだ三足の靴下の中の二番目の靴下なのよ。あたしは六十針も編んで、その中四つ針目をぬかしておいたのよ。

カスリーン（縫目を數へる）

丁度それだけの數になるのねえ。（泣き出す）あゝ、ノーラ、こんな樣をして遠い北の海の果までも流れて行つて、そして海の上を飛んでゐる魔女の外には、誰一人お葬ひの歌を唄つて上げるものがなかつたんだと思ふと、悲しくつてたまらないわね。

ノーラ（半ば體を廻はし、衣類の上に兩腕を投げかけながら）

それにあれ程の勝れた漕手であり、魚を捕へるのゝ名人たつた兄さんの死んだ後に、一枚の古シャツと、飾のない靴下だけしか殘らないなんて、何んて悲しいことでせう。

カスリーン（暫くして）

ノーラ、おつかさんが來たんぢやないかしら。小徑の所に小さな足音が聞えるのよ。

ノーラ（外を眺めながら）

おつかさんよ、カスリーン。おつかさんが戸口に向つてやつて來るのだわ。

カスリーン

入つてこないうちにこの品物を片附けて頂戴な。おつかさんはバートリーの門出を祝つて、屹度氣が休まつておいでゞせう。それにバートリーが海に出てゐる時でもあるから、あたし達は何にも聞かなかつたことにしませう。

ノーラ（**カスリーン**を手傳つて包みながら）

こゝの隅に藏つておきませう。

二人はストーヴの穴の中に包を隱す。**カスリーン**紡車にかへる。

ノーラ

おつかさんあたしの泣いておつたのが解るかしら。

カスリーン

燈火（ともしび）が顏にあたらないやうに、扉の方に背中を向けていらつしやいな。

ノーラ扉口に背中を向けてストーヴの所に坐る。**モーリヤ**のろ〳〵した足取で部屋に入り來り、娘達には目もくれず、爐の向ふ側の自分の腰掛に腰をおろす。麵麭を包んだ布はまだその手に持つてゐる。娘

逢は眼と眼とを見合はせる。それからノーラは麵麭の包を指さす。

カスリーン（暫く紡いだ後）

おつかさん、兄さんに麵麭を上げなかつたの。

モーリヤは振り向きもせず、靜に葬ひの歌を唄ひ始める。

カスリーン

おつかさんは兄さんが馬を乘り入れる所を見たの。

モーリヤは葬ひの唄を唄ひ續ける。

カスリーン（少しいらいらして）

どうしたの？　おつかさん。過ぎ去つてしまつたことを、何時までもくよ／＼悲しんでおるよりは、見て來たことを大きな聲で話して下すつた方がいゝわ。ねえ、バートリーに逢つたかどうかつて、あたしおつかさんに聞いてゐるのよ。

モーリヤ（弱々しい聲で）

今日から私の心は破れてしまつたのだよ。

カスリーン（前のやうに）

バートリーに逢つたの。

モーリヤ

わたしは眞實に怖しいものを見たよ。

カスリーン（紡車を棄てて外を見る）

まあ、どうしたの。兄さんは今馬で靑岬を乘り越えてゐるのではないの。それから灰色の小馬も兄さんの後からついて行つたのではないの。

モーリヤ（ぎよつとして跳び上がる。その拍子にショールが頭から落ち、ちぢれた白髮が現れる。物におびえた聲で）

鼠色の小馬が兄のあとから――。

カスリーン（爐傍に近寄つてきて）

一體どうしたんですの。

モーリヤ（遲くのろ／＼と話す）

わたしはね、昔花嫁のダーラが子供を抱へた死人を見た時からこつち、誰も見たことのない怖しいものを見たんだよ。

カスリーン、ノーラ

ウワー。

二人は爐傍にゐる老婆の前にうつ伏す。

ノーラ

何を見たんだか聞かしい下さいな。

モーリヤ

わたしは噴き井戸の所に行つて、其處に立つて一人でお祈りをしておつたのだよ。するとその時バートリーが赤い馬に乘つて、後に鼠色の小馬を連れてやつて來たんだよ。(何かを眼から拂ひ除けやうとするかの如く手を擧げる)ノーラ、あゝ、どうしやう。

カスリーン

何をおつかさんは見たの。

モーリヤ

たしかにマイケルを見たんだよ。

カスリーン(靜かに口をきく)

おつかさん、違ひますわ。おつかさんの見たのはマイケルぢやありませんわ。なぜつて兄さんの死骸はもう北海の果で見つかつて仕舞つたんですもの。ね、兄さんは神樣のお惠みで、淸い埋葬をすましたんですのよ。

モーリヤ(やゝいどむ樣に)

いゝえ、わたしは今日あの子が馬に乘つて、とつとゝ驅けさせて行く所を見たんだよ、最初にバートリーが赤馬に乘つてやつて來たので、わたしは「しつかりやつておくれ」つて言はうとした所が、何かが咽喉につまつて聲が出なかつたんだよ。するとあの子はその間にとつとゝ驅けて行つてしまつたのさ。「おつかさんに神樣のお惠がありますやうに」つて言つてね。だけどわたしは何にも言ふことが出來なかつたよ。その時わたしはひよいと首を上げて、泣きながら鼠色の小馬を見ると、その小馬の脊には、立派な着物を著、新しい靴を穿いたマイケルが乘つておつたのさ。

カスリーン(泣聲を立てゝ)

いよ〳〵今日であたし達は亡ぼされて仕舞ふのだわ。あゝ、どうしやう。

ノーラ

若い坊さんは、神樣がおつかさんから男の子をのこらず取つて仕舞つて、一人ぼつちのみぢめな身の上には、なさるまいつて仰言つたのよ。

モーリヤ(低い聲で、しかしはつきりと)

あの子位よく海を知つておつたものは少なかつたよ。……バートリーももう今頃は波にさらはれて仕舞つたらう。さあ、イーモンを呼んで、この白木で上等の棺をわたしにこしらへて貰つておくれ。

あの子たちが死んでしまつては、わたしは生きてはおられないのだからね。わたしには夫もあつたし、夫の父親もあつたんだよ、それからね、またこの家には六人の男の子があつて、六人が六人共立派な男の子だつたんだよわたしはそれらの子供を産む時には、隨分苦しんだよ。それからそれらの子供をやつとのことで世の中に出したのだけど、それが今では六人共揃ひも揃つて海にとられて仕舞つたのさ。……中には死骸の見つかつたのもあるけどまだ見つからないのもあるのだよ。……スチーヴンとショーンとは大風の吹く中へ巻き込まれたのだが、後でコールドン、マウスのグレーゴリーの入江で死骸が見つかつたつて、二人の死骸を一枚の戸板にのせて、あの扉口からかつぎ込んで來たんだよ。

暫く話が途切れる。娘たちは後の半ば開いてゐる扉口から、何か聞えたやうに思つてぞつとする。

ノーラ（囁く）

姉さん、あれが聞えて、北東の方でわい〳〵いふのが、

カスリーン（小聲で）

誰かゞ濱で呼んでるのよ。

モーリヤ（何も聞かずに獨りで喋りつゞける）

シューマスと父親が、さうもう一度言ふよ。シューマスと父親とがね、闇の夜行方知れずになつて仕舞つたんだよ。そして翌る朝太陽が高く昇つても、棒切れ一つ、ほんの手がかりさへも跡に殘つてゐなかつたよ、それから今度は舟がひつくり返つて、バッチが溺れて死んでしまつたんだよ。わたしが此處でバートリーをまだ赤子のバートリーを——膝の上に抱へて腰を下してゐると、二人の女が入つて來、そしてその後から三人、四人と次々に女達が入つて來たよ。みんな十字を切つてゐて、一言も物を言はなかつたので不思議に思つて外をのぞくと、その後から男たちが赤い帆を半分に裂いてものに何かくるんでみなで擔いで入つて來たんだよ。帆布からは雫がぽた〳〵垂れてゐたよ。ノーラ、そしてお天氣がいゝのにその跡が戸口までつゞいておつたんだよ。

（再び言葉を切つて扉の方へ手を伸ばす　扉がそのときすうつと開いて、年を取つた女達が後から後へと入り來る。女達は入口で十字を切り、頭の上に赤いベチコートを冠つたまゝ舞臺の前方で跪く。）

モーリヤ（半ば夢中で、**カスリーン**に）

バッチかえ、マイケルかえ。一體何だい。

カスリーン

マイケルの死骸は遠い北の海の果で見つかつたんですもの、一度見つかつたものがまた此處にかつぎ込まれるわけはないわ。

モーリヤ

多くの若い者達が海の上を流されて來るんだもの、うち上げられたのがマイケルのだといふ事が何うしてわからう。マイケルに似てゐる人のかも知れないぢやないかね。九日の間も海水に浸つてゐて風雨に吹き曝されりや、産みの母親にだつて誰々だなんて言へやしないよ。

カスリーン

いゝえ、マイケルなのよ。もう疾うに北の海の果から、人々が兄の著物の布を送り屆けて下すつたのよ。

カスリーンは行つて**マイケル**の著物を取り出し、**モーリヤ**に渡す。**モーリヤ**はのろ〳〵立ち上がり、それを手に取る。**ノーラ**外を見る。

ノーラ

みんなして何か持つて來るわ。あの、そしてそれから雫がぽた〳〵垂れて、大きな石の傍に跡をつけてゐるのよ。

カスリーン（入つて來た女達に囁くやうに）

バートリーなの。

女達の一人

えゝ、さうなのよ。バートリーの魂が落ち付けますやうに。

二人の娘が入つて來て卓を引き出す。その時男達が**バートリー**の死骸を板の上にのせ、その上に帆布を被せて運び來り、卓の上にそれを置く。

カスリーン（働いてゐる女たちに）

どんな風に水にはまつたの。

女達の一人

鼠色の小馬がぶつかつて、バートリーさんを海の中へ投げ落したのよ。そして白岩の上に大浪がかゝつた處へ、あなたの兄さんは打ち上げられたのよ。

モーリヤ卓に近寄り、その一端に跪く。女達は葬ひの歌をそつと唄ひながら、靜かに廻はる。**カスリーン**と**ノーラ**とは卓の端に跪く。また男達は扉口の傍に跪く。

モーリヤ（頭を上げながら、恰も周圍に居る人々が目に入らぬかの如く語り續ける）

もうみんな亡くなつて仕舞つたのだから、海はこれ以上わたしが何うすることも出來ないんだよ。……これからは風が南から吹いて來やうが、大波が東に立たうが、西にも立ち、二つの音が交つてすさまじい昔を立てやうが、二つぶつかり合つて碎けやうが、わたしはもう聲を上げて泣ひたり、お祈を上げたりする必要がないのだよ。わたしはこれからは濱にくだつて行つて、サムエーン後の闇夜に聖水を汲んで來なくつてもよいのだし、他所の女達が葬ひの歌を唄つてゐる時だつて、また

海がどうならうと、もう構やあしないよ。（ノーラに）ノーラ、わたしに聖水をおくれ。まだ戸棚に一雫位殘つてゐるだらう。（ノーラ聖水を母に出してやる）

モーリヤ（**マイケル**の著物を**バートリー**の足に掛けてやる。そして聖水を死骸の上に振りかける）バートリーや、わたしはお前のために神樣にお祈を上げぬ事はなかつたのだよ。わたしは暗い眞夜中に、終ひには、わたしが何を言つておるのかお前に解らなくなる位數多く、お祈の言葉を言はぬ事はなかつたのだよ。だけど今わたしには大きい休息がやつて來たよ。今こそわたしは大きな安息を得られるのだねえ。サムエーン後の長い夜にもよく眠られるし、それに食べるものといつたつて、ほんの少しの濡つた麥粉と、惡い臭のぷんとくるお魚さへあればいゝのだからね。

モーリヤは十字を切り、小聲で祈禱を唱へながら再び跪く。

カスリーン（一人の老人に）あなたとイーモンとで、太陽が昇つたら棺をこしらへて下さるでせうね。マイケルの死骸が上がるだらうと思つてね、おつかさんが上等の白木の板を買つておいたのよ。それから働いて下さる達にと思つて、あたしは麵麭を燒いて置いたのよ。

老人（木を見ながら）

一緒に釘があるかね。

カスリーン

あゝ、無いわ、コーラムさん。あたし達は釘のことに氣が附かなかつたのよ。

他の男

此處のおばさんが釘のことを思ひ出せなかつたなんてよつほど不思議だなあ。これ迄に度々棺を拵へるのを見てゐた癖に。

カスリーン

手をとつたので著碌したのよ。

モーリヤのろ〳〵と再び立ち上がり、**マイケル**の著物を死骸の脇に擴げ、殘りの聖水を振りかけてやる。

ノーラ（**カスリーン**の耳に囁く）おつかさんはもう落附いて樂になつたやうねえ。でもマイケルが水で死んだ日には、おつかさんの泣き聲が噴き井戸の所にゐて聞えたのよ。おつかさんはマイケルが可愛いかつたのねえ。誰かさう思つてゐるかしら。

カスリーン（のろ〳〵と、然しはつきり）年寄は何を爲ても直に飽きて仕舞ふもの。　ねえ、おつかさんが泣いたり、葬歌を唄つたり、家の

中で大暦歎き悲しんでからまた九日しか經たないぢやないの。

モーリヤ(空になつた杯を伏せて卓の上にのせ、兩手を揃へて**バートリー**の足の上に置く)

みんなこれで一緒になつたんだよ。いよ〳〵おしまひになつたんだよ。全能の神樣はバートリーの魂にも、マイケルの魂にも、シューマスとバッチの魂にも、またスチーヴンとショーンの魂にも、お慈悲をかけて下さるでせう。(頭を下げながら)それからノーラ、神樣はわたし達にも、また此の世の中き生き殘つてゐる凡ての人達にも、お慈悲をかけて下さるでせう。

言葉が途切れる。そして葬ひの歌がやゝ高調に女達の間から唄ひ出される。と、やがてまた低くなる。

モーリヤ(言葉を續ける)

マイケルは神樣のお恵みで遠い北の海で清い水葬をして戴いたのだよ。バートリーにはこの白木の板で立派な棺を作つて上げませう。そしてこの白木の墓は深く堀つてやりませう。わたし達は之以上何を望むことが出來やう。誰だつて何時までも生きておられるものではなし、わたしたちは滿足しなければならないのだよ。

老婆跪く。幕靜に下りる。

谷間の蔭

人物

ダン、バーク 農夫で牧人
ノーラ、バーク その妻
マイケル、ダーラ 若き牧人

場所

ウイツクロウ郡の長い谷の入口にある一軒の百姓屋。

百姓家の臺所。右手に泥炭を燃した火、火の近くに壁に寄つて寢臺がある。寢臺の上には白布に包まれた人の死骸が横はつてゐる。それから室の左の端には扉がある。そしてその近くにはテイブルと腰掛か或は木製の椅子が置いてある。テイブルの上にはお通夜の客でもあるのかコツプが二つ三つ、ウヰスキーの瓶が一本、茶碗が二つ、土瓶と手製の菓子とが載せてある。もう一つ小さな戸が寢臺の近くにある。**ノーラ、バーク**は部屋の中を歩き廻り、二三片附けものをしたり、テイブルの上の蠟燭をつけたりしながら、時々不安らしい眼附をして寢臺を眺める。何人かそつと扉を叩く音がする。彼女はお金の入

つた片方の靴下をテイブルの上から取り上げ、自分のポケットに入れる。そしてそれから彼女は扉を開ける。

宿なしの男（家の外で）
お主婦さん、今晩は。

ノーラ
今晩は、よその方、ひどい晩だね。あゝ、雨の降る中を外にゐなさるのかい。

宿なしの男
全くひどい晩でさ。わしはオウグリムの市からブリタスへ行く所なんですよ。

ノーラ
歩いて行くのかね、もし。

宿なしの男
二本の足でな、お主婦さん。わしは下の方で此處の燈を見つけたんで、こちらへ來りや新しい牛乳の一杯位え飲ませて戴けて、何處か靜かな具合のいゝ隅に寢して戴けるかしれんと思ひやしたんでさ。……（ノーラの肩越に死人を見る）あゝ、えれえこつた。

ノーラ

何でもないよ。お前さん、雨の中に立つてゐずにお入りよ。

宿なしの男（のろ〳〵入つて來て、寢臺の方に歩み行く）
死んぢまつたのかね。

ノーラ
さうだよ。お爺さんはあたし一人を殘して死んぢまつたのさ。あゝ、あたしや今向ふの丘に百頭の羊を持つてるよ。だけど冬を越す泥炭はしまひ込んではないのさ。

宿なしの男（死人をよく見ながら）
死んだ人にしちや妙な顏つきをしてゐるなあ。

ノーラ（半ばおどけて）
なに、お前さん、いつも妙だつたんだよ。生きてる時に妙な人は、死んでからおかしな死人になるんだと見えるよ。

宿なしの男
死人をそこに寢かしたまゝ綺麗にもせず、埋めもしねえなんて、大變おかしいぢやねえか。

ノーラ（寢臺に近寄りながら）
ねえ、あたしやおつかないんだよ。今朝ね、お爺さんが言ふのには、もし俺が急に死ぬやうなこと

があつたら、お前は決して俺の身體に觸つちやいけない。又妹の他には誰にも觸らしちやいけない。觸つたら取つ付くぞつてあの人はあたしを嚇したんだよ。その妹つていふのはねお前、十哩も先の山向ふの大きな谷に住んでるんだよ。

宿なしの男（女の方を見、ゆるく頷きながら）

自分の嬶に觸らせないで、寢床ん中で靜に死んでるなんて妙な話だね。

ノーラ

うちの人は年寄でね、風變りな人なんだよ。いつも丘の上にゐて、うす暗い霧の中で考へごと許りしてゐたのさ。……（白布を少しまくる）さあ、手を當てゝみて、眞實に冷たいか何うか言つておくれ。

宿なしの男

お主婦さん、もしも觸つたら、このわしに祟が來やしねえかね。ナハナガンの湖にお金を一杯入れて呉れたつて、死人に觸るのは御免だね。

ノーラ（不安さうに死骸を眺めながら）

冷いからつて屹度うちの人が、死んでるつていふ證據にやならないかも知れないよ。うちの人なんかあたしが知つてから、毎日、……毎晩、始終冷たかつたんだからね。……（死人の顔を蔽ひ、寢臺より遠退く）だけどあたしや確に死んでると思ふんだよ。二三日前から胸が痛むつてこぼしてゐたんだが、丁度今朝はブルタスへ出かけて行つて三四日泊つて來ることになつたのさ。そこへ急に痛みが來てね、床に就いたんだが、丁度谷間がかけつてくる時分にや、もう駄目だと言ひ出すんだらう。そしてお太陽樣が向ふの沼に沈む頃にやひどく跳ね返り、大きな聲を立てゝね、それなり死んだ羊みたいに硬ばつちまつたんだよ。

宿なしの男（十字を切る）

神樣、あの人の魂をお救ひ下さい。

ノーラ（コップに一杯彼にウヰスキーを注ぎながら）

ウイツクロウ郡の一番いゝ牛の乳より、お前さんにはこの方がいゝだらう。

宿なしの男

いや、有難い、有難い。神樣のお蔭でお前さんは丈夫で暮せるよ。

ノーラ（男に煙管と烟草を渡しながら）

あの人の煙管しかないんだよ。だけど大變のみいゝ煙管だよ。

宿なしの男

お主婦さん、有難う。

ノーラ

さあ、坐つてゆつくりお休みよ。

宿なしの男（煙管に煙草をつめ、部屋中を見廻しながら）

お主婦さん、わしは廣い世間を歩き廻つて、隨分不思議なことを見ましたがな、良い酒や、良い煙草や、上等の煙管が揃つてゐて、女衆一人しかゐないお通夜に出會つたなあ始めてですよ。

ノーラ

だからお前さんに聞かせたぢやないかい。うちの人は丁度太陽の入り方に息を引き取つたんだよ。だけど家にやあたし一人だし、この近所には家がないんだからね、谷に出かけて行つて近所の衆に知らせることが出來なかつたのさ。

宿なしの男（酒を飲みながら）

お主婦さん、怒つたのかい。

ノーラ

なあにお前さん、あたしや怒りやしないよ。こんな隣もない一軒屋にあたしがどんなに淋しく暮してゐたか、そりや暗い夜道を往來するお前さんにだつて解りやしないよ。

宿なしの男（腰をかけながら）

なに、ちやんとわしにや解るさ。（煙草に火をつける。そこで男の憔れた顔の下の方がパット明くなる）戸口を入つて來るときわしや考へたね。燈がちよんぴり窓から光つておるのを、二人と見る人がないやうなこんな淋しい處でなくつたつて、眞暗な晩にやわしがやうな者を見て恐がる女が多からうつてな。

ノーラ（ゆつくりと）

そりや恐がるものも澤山あるだらうが、このあたしときちや、乞食や坊さんや、あんたのやうな人を恐がつたことは唯の一度だつてありやしないよ。……（窓の方を見、聲を低くする）だけれどあたしにはお前さんなんぞとはまるで違つた恐いものがあるんだよ。

宿なしの男（身を顫はせながら、きよろ〳〵見廻す）

ほんとにさうだ。あゝ、神樣、お助け下さい。

ノーラ（物珍らしさうに暫く彼を眺める）

お前さんは臆病者のやうだねえ。

宿なしの男（沈んだ聲で）

お主婦さん、わしはいつも長い夜を歩き廻つて、霧のかゝつた丘を越すんですよ。そしてそんな時にや、細い枝がお前さんの腕位えに太く見えたり、兎が栗毛の駒程太かく見えたり、積んだ泥炭が

ダブリンの町の聳えたつた教會のやうに大きく見えまさあね。だから若しもこのわしが無闇とおつかながる野郎でしたら、わしはもう疾つくの昔氣狂病院に閉ぢ込められとるか、古いシャツ一枚で裏山に驅け上がつて、あの可哀さうなバッチ、ダーシィのやうに、去年あたりわしも鴉の餌食になつとるでせうよ。――彼奴も天國へ行かれます樣に。

ノーラ(興じて)

お前さん、ダーシィ　知つてるのかい。

宿なしの男

あの男の生きてる時の聲を此世で一番最後に聞いたなあ、このわしでしたよ。

ノーラ

あの時分にや色々な噂があつたつけ。だけど谷間でみんなが言つてたやうなことを、人は眞實にしやうかしら。

宿なしの男

お主婦さん、嘘ぢやないね。……今夜のやうな眞暗な晩だつた。山の下を通つて行くと、羊は溝の中に横はつてゐて、あのどしやぶりと霧のために、どれもこれも爺のやうに咳をしたり、喘いでおつたつけ。すると其時わしは妙な聲を聞きましたよ。夢でもさめちやとても信じられねえやうな奇妙な聲をね。――そこでわしは夢中になつて、お慈悲深い神樣、此霧の深い中であんな聲を聞かされちや、わしはくたばつちまひますよ、つて言つてね、ラスバナまでとつとゝ驅け續けました。それからわしはその晩はひどく醉つぱらひ、その翌朝も飲み、又翌日も飲むつていふ風でした。――わしは競馬の歸り道だつたんです。――でその晩から三日目にダーシィの死骸がみつかつたんでさ、……そこであの晩わしが聞いたなあ、あの男の聲だつたつていふことが解ると、それからはもう一寸も恐かなくなりましたよ。

ノーラ(悲しげに、ゆつくりと言ふ)

可哀さうにねえ。あの人は往復にやいつも覗いて行つたんだよ。そしてあたしやあの人が行つて仕舞ふと少しの間、非常に淋しい思をしたんだよ。(寢臺の方を見て聲をひそめる。そして極くゆつくり言ふ)それから又逢ふのが樂しみでねえ――樂しみと言はれないかも知れないけど――しまひにはあたしも淋しいのに慣れてしまつたのさ。(暫く沈默、やがてノーラ立ち上がる)お前さん、オウグリムから來る途中、この近くの路に誰かおらなかつたかい。

宿なしの男

一人の若い男が山の牝羊をあつちこつちに追ひかけて居つけ。

ノーラ(微笑して)

ねえ、ずつと下でかい。

宿なしの男

なに、すぐそこでしたよ。

ノーラ湯沸に水を入れて火にかける。

ノーラ

もしお前さんが臆病者でなけりや、少しの間一人であの人の番をしてゐてお呉れな。

宿なしの男

あゝ、いゝとも、死人は何にも害をしやしないからな。

ノーラ(おしつけるやうに言ふ)

あたしや一寸後の山の方へ行つて來やうと思ふんだよ。うちの人は時々そこへ行つて口笛を吹いたのさ。するとさつきお前さんが見たあの若者が、用があるかどうか聞きにやつて來たんだよ。あの若者かへ、ありや他所の國から海を渡つてやつてきて、向ふの小家に住んでゐる、まあ百姓だねえ。あたしや今夜あれに用があるんだよ。あしたの朝お日樣が出たら、谷に下りて行つて、うちの人の死んだことをみんなに知らせて貰ひたいんだよ。

宿なしの男(布に包まれた死骸を見ながら)

お主婦さん、お前さんがこのどしや降りに外に出てひどい目に會ふといけねえから、わしがあの男を呼びに行つてやらう。

ノーラ

お前さんにや路が分らないよ。細い路で、兩側に溝があつて、驢馬でも荷車でも落つこちさうな所なんだからね。(頭からショールを被る)安心してあの人の魂にお祈でも上げてゐてお呉れ。ぢきにあたしや戻つてくるからね。

宿なしの男(不安げに身動きをして)

鼠色の糸と針がありませんかい。針一本でも魔除けになりますからな。わしやこの古い上衣の綻を(ほころび)あちこち繕ひながら、あの人の魂が天國に行けるやうに、お祈でも上げてませう。

ノーラ(自分の著物の胸から針と糸とをとつて男に渡す)

さあ、針を渡すよ。お前さんはそれ程淋しかないだらう。山路には慣れとるし、それに死人とだつて、たつた一人で腰をかけて、風の叫ぶのを聞きながら、何を考へていゝか解らずにぼんやりしてゐるよりは、一緒にゐた方がずつといゝからね。

宿なしの男

ほんとにさうだ。あゝ、あゝ。

ノーラ出て行く。男は上衣の裾の方をからげながら、小聲でデ、プロフアンデスを唱へる。するとその時白布が靜かにまくられ、**ダン**、**バーク**が顔を出す。**宿なしの男**は不安げに身を動かし、それから顔を上げ、喫驚(びつくり)して跳び上がる。

ダン(嗄(しやが)れた聲で)

恐がるない。死人は害をしやしねえ。

宿なしの男(顫えながら)

もし、旦那、わしは惡い考へで言つたんぢやねえんです。今わしやああんたの後生を祈つておつた所なんですからね、どうぞ勘辨して下せえ。(外の方に口笛が長い間聞える)

ダン(寢臺の上に起きなほり、荒々しく言ふ)

えゝ、あの尼奴め……おい、あの音が聞えるかい。二本の指を口にあて、あんなに旨く口笛を吹ける女が他にあらうか。(あはてゝテイブルの方を眺める)喉が渴いておつ死にさうだ。彼奴の歸らない中に急いで一杯持つてきて呉れ。

宿なしの男(疑はしげに)

お前さんは死んだんぢやないんだね。

ダン

燒いた骨みてえに咽喉が乾いとつて何うして死ねやう。

宿なしの男(ウヰスキーを注ぎながら)

お前さんにお酒の匂がしたら、お主婦さんは何て言ひなさるだらう。お前さんが死んだ眞似をしてゐなさるには、何かわけがおあんなさるだらうね。

ダン

さうだ。だが彼奴は俺の側へは寄つつかねえよ。それに俺だつて何時迄もさう死んだ眞似をしちやゐられねえや。背中はひつつるし、腰はしびれやがるし、蠅の畜生が俺の鼻孔を樂りやがるのに、くしやみが出來ねえで俺あひでえ目にあつた。それをお前はお前で、雨が降つてどうの、ダーシイがこうの(劇しく)——畜生、いゝ氣味だ——聳え立つた敎會がどうだとか、下らないことをべちやくちや喋りやがるんだ。(堪え切れぬやうに怒鳴る)俺にあのウヰスキーをくれ。お前は俺が一口も飲まないうちに彼奴をかへつて來させてえのか。(宿なしの男コップを渡す)

ダン(飲み終つてから)

あの戸棚の所へ行つて、壁の傍の後の隅においてある、黑い杖を持つて來てくれ。

宿なしの男(戸棚から棒を取り出しながら)

旦那、これかね。

ダン

うん、それだ。家の嬶は悪い嬶だから、俺は長いことその杖を藏つておいたんだ。

宿なしの男(妙な顏つきをして)

旦那、こゝのお主婦さんのことかね、ありや仲々話が旨えねえ。

ダン

あいつの事だよ。ほんとだ。彼奴は悪い嬶だよ。年寄に取つちや悪い嬶だよ。俺もそろ〳〵年を取つて來たが、まだ手は動くよ。(手に棒を持ちながら)少し待つて見ねえ。今二三時間もしたらこの部屋で面白いことが見られるぜ。(言ふのを止めて何か聞かうとする)誰か來たやうだね。

宿なしの男(耳を傾けながら)

話聲が聞える。

ダン

その杖を寢臺の中に入れ、シィツを元通り皺のねえやうに直しておいとくれ。(大急ぎでシィツに包まる)さあ、寢ろよ。でな、いゝか何も知らねえ振をするんだぞ。さもないと俺りやお前の生命を貰ふからさう思つてくれ。もと〳〵俺はな、喉が渴いておつ死にさうだつて云ふことだけ言ふつもりだつたんだ。

宿なしの男(老人の頭を隱しながら)

旦那、心配しなさるなよ。わしや口を出したり、お前さんを止めたりする程、お前さんのことを知つちやいねえんだからね。

火の側に戻り、寢臺に背を向けて腰掛に腰をかけ、それから上衣の紐をかゞり始める。

ダン(シィツの中から氣むづかしく)

旅の人!

宿なしの男(あはてゝ)

しつ! しつ! さあ靜かに、戸の所にやつて來たぞ。

ノラ、マイケル、ダーラといふ背の高い無邪氣さうな若者を後につれて入り來る。

ノーラ

ねえ、早かつたらう。途中で此の人に逢つたんだよ。

宿なしの男

かなり長かつたね、お主婦さん。

ノーラ

うちの人に何も變つた事はなかつたかい。

宿なしの男
何にもなかつたよ、お主婦さん。

ノーラ（マイケルに）
マイケル、ダーラ、あすこへ行つてお前シイツをまくつて御覽。あたしの言つたのが本當だといふことがお前解るよ。

マイケル
いやだよ、ノーラ。俺あ死人はおつかねえや。

マイケルはテーブルの側の腰掛に腰を下ろし、**宿なしの男**と對ひ合ふ。**ノーラ**湯沸を自在鍵の一番下の鉤にかけ、その下に泥炭を積む。

ノーラ（**宿なしの男**に向つて）
お前さんもあたしや、この若い人と一緒にお茶を飲むかい。それとも（一層言葉巧みに）小さな部屋に行つて、床の上でちよつくら休むかい。こんなひどい雨降の中を長い道中したんぢや、さぞ草疲れ切つてゐるだらうね。

宿なしの男
お主婦さん、お前さんがお通夜をしてゐるのに、わしにお前さんを置いてあつちに行けつて言ふん

ですか。いや、そいつは駄目ですよ。（自分の側においてあるコップから酒を一杯飲む）お茶も戴きたかないんです。

旅人は綻を縫ひつゞける。**ノーラ**はお茶の支度をする。

マイケル（暫時の間**宿なしの男**を度むやうに眺めた後）
ほんとによお前さんの上衣は情けねえ上衣だね。それからお前さんの仕立も下手だね。

宿なしの男
わしの仕立も下手だらうが、お前さんもわしが今日見たやうに、市のかへりにあれんばかりの牝羊をあちこちへ追ひ廻してゐるやうぢや、情ねえ羊飼ひさ。

ノーラ、テーブルの所に戻つて來る。

ノーラ（**マイケル**に低い聲で）
マイケル、ダーラ、あの人にお構ひでないよ。あの人は一杯飲んでゐんだからね。もうぢきぐつすり寢込んでしまふよ。

マイケル
あの人の言ふこたあ本當だ。俺あすつかり草臥れちやつたよ。どうも氣儘な奴等でねえ、此方の麥の中へ驅け込むかと思や、又あつちの枯草の中へ飛び込む。さうかと思やあ赤沼の中へころけ込ん

で、羊といふよりや年を取つた山羊みたいになつちまふ。……ノーラ、バーク、あ山の牝羊は變り種だねえ。俺が慣れてないせいかも知れねえが。

ノーラ（茶道具を並べながら）

山の牝羊を逐ふのにや、グレンマルアとか、ラスバンナとか、グレン、イマアルとかいつたやうな谷間の土地で育つた者でなけりや駄目ださうだよ。――あのバッチ、ダーシィのやうな者でなけりやねえ。あの人なんぞは五百頭もある羊の中を驅け拔けて、數へもしないで一疋足りないかどうかつて言ふことが解つたんだよ。

マイケル（氣味惡さうに）

去年頭が變になつたあの男のことかい。

ノーラ

あゝ、さうだよ。

宿なしの男（あはれつぽく）

なあ、兄い。ありや偉い男だつたよ。――ほんとに偉い男だつたよ。自分の牝羊の產んだ子羊なら、符號をつけねえでもすぐ解るんだ。そしてな此處からダブリンの市までおつ走つたつて決して息も切らさねえつていふんだ。

ノーラ（急に振り返つて）

お前さん、ほんとにあの人は偉かつたよ。ね、死んだ人のことを、それも氣が違つて死んだ人のことを、生きてる者が褒めるなんて、立派なことぢやないかね。

宿なしの男

だがわしの言つたこたあ本當の話だ。

旅人は上衣の襟の裏に針をさし、煙突の偶に身を横へて眠らんとする。**ノーラ**はテーブルの前に腰をかける。**ノーラ**と**マイケル**とは寢臺の方に背を向ける。

マイケル（**ノーラ**を妙な眼つきで見ながら）

ノーラ、バーク、俺あ今日こんな話を聞いたよ。あのバッチ、ダーシィが此の下の路を行つたり來たりしたつてね。そして朝だらうが晩だらうが、お前と話をしないで行き過ぎたこたあなかつたつてな。

ノーラ（低い聲で）

お前の聞いたことは嘘ぢやないよ、マイケル、ダーラ。

マイケル

こんな淋しい處に住んでても、隨分澤山の男をお前は知つてるだらうね。

ノーラ（茶を注いで**マイケル**に與へながら）

そりやこんな淋しい處に住つて居りや、人とも口をきゝたくなるし、夕方になりや、誰が來てくれりやいゝと、人を待つやうにもなるよ。あたしや隨分澤山男と近づきになつたけど、みんな好い人達だよ。なぜつてあたしや子供の時にもむづかりやだつたが、娘になつてもさうだつたよ。（やゝきつくマイケルを見る）そして今だつてマイケル、ダラ、あたしやきむづかしい女なんだよ。嘘ぢやないよ。

マイケル（旅人がよく眠つてゐるのを見て、死んだ人の方を指さしながら）

あれを亭主にした時も、きむづかしい女だつたのかい。

ノーラ

お婆さんのあたしにや、少しや畑もあり、牛も持つとり、裏山にや羊もある男と結婚しなけりや、食べて行かれまいぢやないかね。

マイケル（考へながら）

そりやほんとだ、ノーラ。お前は馬鹿な女ぢやねえ。淋しい處ぢやあるが、好い牧場だから、よつぽと後に殘していつたらう。

ノーラ（ポケットからお金の入つた靴下を取り出し、テーブルの上に置きながら）

欠

聖者の泉

人物

マーチン、ダウル　風雨に曝された盲目の乞食。
メリー、ダウル　その妻。風雨に曝された醜き女。同じく盲目。五十位。
テイミイ　年よりも多く見える中年の元氣な鍛冶屋。
モリイ、バーン　金髪美貌の少女
ブライド　美しき少女
マツト、サイモン
聖者　諸國遍路の僧
その他少女及び男たち

場所

愛蘭東方のある淋しい、山の多い地方。一世紀或はそれ以上前。

欠

第一幕

右手に大きな石などのある路傍。背景の中央の邊に、破目のある低い無窓な壁あり。右手には教會の朽ちた入口、その側に戴あり。**マーチン、ダウル**及び**メリー、ダウル**手探りで左手より登場、そして右に進み、二人は其處に腰を下す。

メリイ、ダウル

マーチン、ダウル。もう何處いらだらう。

マーチン、ダウル

破目を通り過ぎたろ。

メリイ、ダウル(頭をあげて)

もうそんなとこかい。だけど秋の終りにしちや今日は暖いね。

マーチン、ダウル(手を日向に差し出して)

お太陽(ひ)さまが高けえもの、暖いなあたりめえだ。夜が明けて人さんがクラッシの市へ行つちまつてからも、お前は永いこと黄色い髪を束ねてばかりゐたね。

メリイ、ダウル

あの人たちは牛を追つたり、車の中にぶうぶう鳴いてる仔豚を入れて町へ行く時にあ、何にもくれやしないよ。(坐る)よく知つてゐる癖にそんなことを言ひたがるんだね。

マーチン、ダウル(彼女の傍に坐り、彼女の渡した燈心草を細かに割き始める)

若しも俺が默つてお前のガチャ〳〵言ふのを聞いてたら、俺はどうしていゝか分らなくなつちまふ。ほんとにお前は顔は綺麗だとしても、妙なガチャ〳〵した聲を出すなあ。

メリイ、ダウル

年がら年中雨に曝されて外に坐つてゐりや、誰だつてガチャ〳〵した聲になるよ。マーチン、ダウル。聲のためにやよくない暮し方だね。たけどあたし達を吹く濕つた南風ほど、顔や首あたりの綺麗な肌に——あたしの肌みたいな——いゝものは無いつていふことだよ。そして綺麗な肌ほど女を一番美しくするものは他にないよ。

マーチン、ダウル(虐めるやうに、しかし上機嫌で)

おらあお前が、どんな風に美しいかよく分らねえから、時々考へてみるよ。そんでなきや又、お前がほんとに美しいのかしらと、考へて見るね。俺が若くつて眼がよく見えた時にや、可愛らしい聲をしたものが一番顔も綺麗だつたからなあ。

メリイ、ダウル

鍛冶屋のティミイや、マット、サイモンや、バッチ、ルーアや、その外大勢の人たちが、あたしの顔を綺麗だといつたのをお前は聞いてゐるんだし、あたしのことをバリナトンでは、「盲目美人」と言つてるのをよく知つてゐるんだから、そんなことを言ふのはよしておくれ。

マーチン、ダウル(前のやうに)

さうかも知れねえけど、俺はゆんべモリイ、バーンが、お前のことをお化みたいだと言つたのを聞いたぜ。

メリイ、ダウル(鋭く)

彼奴は妬いてるんだよ。可哀想に。何故つてね、鍛冶屋のティミイがあたしの髪を褒めたからさー

マーチン、ダウル(嘲るやうな皮肉で)

妬いてるんだつて！

メリイ、ダウル

あゝ、妬いてるんだよ、マーチン、ダウル。さうでなくつたつて若い馬鹿者は、いつも盲目をかつて喜んでゐるのさ。そしてあたし達はお互に綺麗だつていふことを知らないもんだから、欺したら面白からうつて思つてゐるんだよ。

満足したやうな身振りをし、片手を顔にあてる。

マーチン、ダウル(稍〻恐しげに)

一時間でも、いや一分間でも、おら達が眼が見えたら、大したことだらうと長い夜には考へるよ。さうすりやおら達が、東の七州のうちで一番綺麗な男と女だつていふことが、ちやんと判るんだからな。——(にがにがしげに)下の眼の見えるわい〳〵連は、悪い嘘ばかりつきやがつて、氣が變になつちまふかも知れねえ。俺達はあいつらの言ふことを氣にとめまい。

メリイ、ダウル

マーチン、ダウル、若しもお前が大馬鹿者でなけりや、あいつらには氣にかけまいよ。目明は悪いものばかしだ。立派なものを見ても見ないふりをして、モリイ、バーンがお前に言つたやうな、馬鹿な嘘をついちや喜んでゐるんだよ。

マーチン、ダウル

あの娘の言ふことは嘘かもしれねえが、彼女は一寸豚を呼ぶにも、又長い草ん中で鶏を呼ぶのにも、聞き倦きのしねえいゝ聲だ。(物悲しげに語る)綺麗な、柔かい、ふつくらした女があゝいふ聲をもつてるに違ひねえ。

メリイ、ダウル(再び鋭く、氣を悪くしたやうに)

ふつくらしやうが、べちやんこだらうが、お前氣におしでないよ。あいつはね、蓮つ葉な馬鹿な女なんだよ。人がゐない時にや、井戸の傍で彼女が大きな聲を出したり、笑つたりしてゐるのが聞えるよ。

マーチン、ダウル

若い女の笑ひ聲はいゝもんぢやねえか。

メリイ、ダウル（にが〳〵しげに）

いゝものだつて？　あれのやうに、山羊の啼くやうな大きな笑ひ聲をたてて笑ふ女に、きゝ慣れるのがいゝんだつて？　あゝ、あの女は男を惹きつけるのが巧いんだね。テイミイだつて仕事場に坐つてる時、グリーナンからあの女がやつて來ると、はしやいで、揉み手をしながらハー〳〵するよ。

マーチン、ダウル（少し腹を立てゝ）

テイミイはお前の傍であの娘を見たら、比べものにならないつてよく言ふけど、お前を見てる人の呼吸が變になつたのを、俺あ聞いたことはねえ。

メリイ、ダウル

あたしはね、路を駈けづり廻つたり、足をふつて歩いたり、頸を出して男を見たりするあまつちよとは違ふんだよ。……あゝ、マーチン、ダウル、世の中には悪い奴が澤山にゐるよ。バツチリした

眼や、甘つたるい言葉をもつてるけれど、何の考へもない、ふら〳〵した奴がね。

マーチン、ダウル（悲しげに）

ほんとかも知れねえ。だが若い女が路を歩いてゐるなあ、いゝもんだつていふことを俺あよく聞くよ。

メリイ、ダウル

お前が目明だつたら、他の奴等と同じやうにお前も悪人だよ。あたしや目明と一緒にならないでよかつた。――大變喜んで貰ひ手があつたゞらう――だつて目明つて變な人間で、何をするか分つたものぢやないからね。

暫く言葉が途切れる。

マーチン、ダウル（耳を傾けて）

誰か往來をやつて來たやうだ。

メリイ、ダウル

燈心をおかくしよ。それでないとぎよろ〳〵した眼で見つけだして、あたし達のことをお金持だといつて、何にも惠んぢやくれやしないから。

二人は燈心草を束ねて篠へやる。鍛冶屋のテイミイ右手より登場す。

マーチン、ダウル（喜捨を乞ふやうな聲で）
旦那様、どうぞ盲目のマーチンに銀貨を一枚お恵み下さい。銅貨なりともお恵み下さい。お路すぢを神様がお守り下さいます様にお祈りいたしますから。

テイミイ（二人の前で止まつて）
何だ、少し前まで俺の足音が分るやうなことを言つてただやねぇか。

腰を下ろす。

マーチン、ダウル（地聲で）
俺あモリイ、バーンが前を通るときと、あの娘が五間も後をのろ〳〵歩いてゐる時にや分るよ。だがまるで途中で變つたものに出會つたやうに、お前がそんな歩き方をするのを、俺あ聞いたことはねえんだ。

テイミイ（ほてり、喘ぐ。顔を拭きながら）
お前は嘘つきかもしれねえが、い〳〵耳を持つてるなあ。俺は市で不思議なことを聞いて、大急ぎで歩いて來た所なんだ。

マーチン、ダウル（稍嘲けるやうに）
お前はいつも妙な、不思議なことを聞いた聞いたつていふが、何でもねえことばかしだ。だがクラ

ッシの芝地で、彼奴等が踊つたり跳ねたりするのや、見世物を見せるのを待たねえで、晝前に歸つて來るやうぢや、今度はほんとに珍らしいことかもしれねえ。

テイミイ（膨れて）
俺は間もなく、こゝに大した不思議があるつていふことを、お前に言ひに來たんさ。（マーチン、ダウル仕事を止める）クラッシの芝地にも、レンスターの何處にもねえやうな不思議がな。だがお前は利口だから俺なんかにや構ふまい。

マーチン、ダウル（興がる。然し信じられぬやうに）
こゝで不思議があるつて？

テイミイ
こゝの四つ辻でよ。

マーチン、ダウル
爺さんがお金を持つて家に歸る途中を、可哀想に奴等がこゝで殺して、死骸を谷に投げ込んだ晩からこつち、こゝで不思議なことがあつたつていふ話を、俺あ聞いたことがねえ。この辻は俺達の領分なんだから、どうか今夜はあんな眞似をしねえでくれ。それに俺達には、お前なんかの惡巧みや、不思議には用はねえ。い〳〵かい俺達つていふ人間がそも〳〵不思議なんだからな。

テイミイ

俺が話す氣になりさへすりや、今日はほんとに不思議な話を聞かせるがなあ。お前が思ひもつかないやうな大喜びをする話を。

マーチン、ダウル（動かされて）

後の岩ん中にウキスキーを密造する場所が出來るのかね。雨の降りしきる中を、手搜りで谷を通り抜けて、身體をだいなしにしなくつても、手輕に一杯飲めりや素敵なもんだ。

テイミイ（尙むつとして）

ウ井スキーを密造する場所でも、それに似たもんでもねえ。

メリイ、ダウル（言葉巧みに、テイミイに）

上の木の枝んとこで泥棒を絞り殺すんだらう。絞罪になつた人間を見るのは面白いつてね。だけど物の見えないあたし達には、面白くも何ともないよ。

テイミイ（一層上機嫌で）

今日は誰も絞罪にはされやしないよ。メリイ、ダウル。だがこれからまだ神樣のお慈悲で、死ぬまでには多くの人が絞り殺されるのが見られるよ。

メリイ、ダウル

まあ、お前はいやに人を食つたことを言ふねえ……七つの年から盲目になつたこのあたしが、何うして多くの人の絞り殺されるのが見られやう。

テイミイ

あの海を一寸越えた所に島があつて、そこに四人の美しい聖者の墓があるつていふことを、聞いたことがねえかい。

メリイ、ダウル

西から歩いてきた人が、そんな話をしてゐたのを、あたしや聞いたことがあるよ。

テイミイ（感動を與へるやうに）

その墓の後に羊齒の澤山に生えてゐる綠の井戸があるんださうだ。そしてその中の水を一たらしでも盲人の眼に注ぐと、その盲人がほつゝき歩いてゐる人々と同じやうに、眼が見えるやうになるんだとさ。

マーチン、ダウル（興奮して）

ほんとかい、テイミイ。お前俺に嘘をついてゐるんだらう。

テイミイ（聲粗く）

そりやほんとだよ、マーチン、ダウル。根も葉もないことを散々に信じたお前だから、こりや信じ

たつていゝわけだ。

メリイ、ダウル

誰か若い衆に水を取つて來させやう。朝になつたら一合徳利を洗つて、旨い酒を飲ましてやり、葺草の中にかくしてある僅かばかしのお金をやりや、バッチ、ルーアが行つてくれるだらう。

テイミイ

俺たちのやうな罪の深い人間をやつたつて何にもなるまいよ。水を持つて來る間に娘つ子を見廻したり、酒場で一杯ひつかけたりすりや、尊い水の有難みが、俺たちの腐つた心で失くなつちまふつていふからな。

マーチン、ダウル（がつかりして）

俺達が歩いて行くにや長い恐しい路だらう。だから俺あ不思議なんていふもなあ、俺たちにや一寸も嬉しかねえと思つてるんだ。

テイミイ（性急に向き直つて）

歩いて行かなくつても奇蹟はこゝでおこるんだ。俺が今言つたのが聞へなきや、お前は盲目同様聾になつたんだね。

マーチン、ダウル（赫つとして）

若しも奇蹟が起るんなら、お前のでつかな涎れつたらしの口を開けて、何んな風に起るか言つたらいゝだらう。日が暮るまでべちやくちや喋つていねえで。

テイミイ（跳び上がつて）

俺あもう行かう。（メリイ、ダウル起きあがる）お前のやうな者と丁寧な口をきいて、無駄に暇をつぶすまい。

メリイ、ダウル（立つ。待ち切れないのをこらへて）

あたしの所へお出でよ。テイミイ。そしてあの人には構ふんぢやないよ。（テイミイ立ち上る。メリイ手捜りで彼に近寄り、彼の上衣をとらへる）お前はあたしに腹を立つちやゐないだらう。だからあたしに話しておくれ。ね、いつまでも揶揄ふんぢやないよ。お前が水を持つて來たのかい。

テイミイ

いや、さうぢねえ。

メリイ、ダウル

テイミイ、それぢやお前の不思議つていふのをあたしに話しておくれ。一體誰が持つて來るんだい。

テイミイ（和らいで）

立派な、有難いお方がそれを持つて來るんだ。神様にお仕へしてゐる聖者さんが。

マリイ、ダウル(畏怖して)

聖者様だつて?

テイミイ

あゝ立派な聖者様だ。長い上衣を著、腰に水入を下げるため裸足で、愛蘭中の教會を廻つて歩いてる、立派な聖者様だ。そんな聖者様になると、一つたらしの水で死にかゝつてゐる者をなほし、盲目を、靜な日に空を高く飛んでゐる灰色の鷹のやうに、よく見えるやうになさるんだ。

マーチン、ダウル(杖を手探りで求めながら)

テイミイ、その方は何處にゐなさるんだい。俺あその方の所へ歩いて行かう。

テイミイ

ぢつとしておいで。マーチン。その方は廻つて歩いて、こゝとあの小山との間にある教會や、高い十字架にお禱りをしていらつしやるんだ。立派なお禱りをするもんだから、その聖者様の後には大勢の人がついてるよ。聖者様は斷食をするんで、お前の膝の上にのつてゐる、燈心草のやうに痩せていらつしやる。俺たちがお前のことを言つといたから、今にお前たち二人を治しに此處へお出になつて、教會でお禱りをして下さるだらう。

マーチン、ダウル(急に**メリイ、ダウル**の方をふり向いて)

今日こそ俺達は自分を見ることが出來るんだ。あゝ、有難てえことだ。だがほんとに間違ひはねえかな。

メリイ、ダウル(大喜びで、**テイミイ**に)

下へ行つて大きなショールを持つて來る位の暇はあるだらうね。あたしがあれを頭から被ると、一番綺麗に見えるつて言ふ話だから。

テイミイ

時間はたしかあるだらう。——

マーチン、ダウル(耳をすませて)

しつ!、……又誰か流ん所へ來たやうだ。

テイミイ(左手を眺めて當惑する)

聖者様の後へ、俺あ俺の若い娘つ子を殘して來たんだ。……皆やつて來る。(入口の所へ行き)手に何か持つて、まるで子供が前垂の中に十二の卵をかくして歩いとるやうに、みんなおづ〳〵しながらやつて來る。

マーチン、ダウル(耳をすませる)

ありや、モリイ、バーンだ。

モリイ、バーンとブライド左手より現はれ、**マーチン、ダウル**に近寄る。水鑵、聖者の鈴、衣を持つてゐる。

モリイ、バーン(幅口に)

マーチン、あたしは西の四人の聖者樣のお墓から持つて來た、尊い水を持つてゐるのよ。あなたはこの水の力で治して戴けて、あたし達のやうに見えるやうになるのよ。——

テイミイ(**モリイ**に近寄り、彼女を遮る)

マーチンはもうその事を聞いて知つてるよ。可哀想にね。だが一體聖者樣は何處にいらつしやるのだい。それに又こんな有難い水を、何うしてお前なんかにお預けになつたんだらう。

モリイ、バーン

向ふの方に雲が出たものだから、あの方は遠くに行くのを氣遣つたのよ。そしてね、グリーナンの十字架にお禱りをするために、あの大きな森を通つていらつしやつたわ。ですからあの方はこの路を通つて教會に行かれるでせう。

テイミイ(益々驚いて)

それで何かい。お前たち二人にこの有難い水をお預けになつたのかい。こいつあまつたく不思議だ。

稍左手にさがる。

モリイ、バーン

若い衆さんが、聖者樣のお登りになる所は、茨があつたり、險しい滑々した岩ばかりだから、こんなものは持つて行かれないつて言つたので、聖者樣はお見廻しになつて、水と、大きな衣と、鈴をあたし達にお渡しになつたのよ。若い女がこの世で一番純潔で尊いんですつて。

メリイ、ダウル席に近寄る。

メリイ、ダウル(獨り笑ひをしながら坐る)

なる程、聖者樣はさつぱりした方だね。そしてほんとの事を仰言るね。

マーチン、ダウル(前へ身體を曲げ、兩平を差し出す)

モリイ、バーン。俺の手に水をおくれ。お前がほんとに持つてるかどうか、俺に分るやうに。

モリイ、バーン(鑵を**マーチン**に渡す)

不思議つて妙なものだから、お前さんがそれを持つたゞけでも、治るかも知れないわ。

マーチン、ダウル(見廻す)

駄目だよ、モリイ。俺には何にも見えやしねえ。(鑵をゆする)少しつきりしか入つてるねえな。ふん、こんな小つぽけなもので、盲目が見えるやうになつて、若い娘つ子や、綺麗なものがみんな見られるなんて、不思議なこつた。

メリイ、ダウルを手探りで求め、彼女に鐘を渡す。

メリイ、ダウル（ゆすつて見て）

あゝ、有難い。——

マーチン、ダウル ブライドを指さして）

それからお前の持つとる、手の中で音のしてゐるものは何だい。

ブライド（**マーチン、ダウル**に近づき）

これは聖者樣の鈴なのよ。あの方が何處かへお禱りをしにいらつしやるときには、この鈴のなるのが聞えてよ。

マーチン、ダウル手を差し出す。**ブライド**鈴を彼に渡す。

マーチン、ダウル

いゝ音がするなあ。

メリイ、ダウル

その小さな銀のやうな音で、斷食をなさつてゐる聖者樣が、長いことそれを腰につけていらつしやつたことが、お前にも分るだらう。

ブライド、マーチン、ダウルの少し右後に行く。

モリイ、バーン（聖者の衣をひろげて）

マーチン、ダウル。立つて御覽。あの方の大きな衣を、お前さんに著せてあげるから。（**マーチン、ダウル**起き上がり、前方ほゞ中央に進み出る）お前さんが神樣のお仕へ人になつたら、何んな風に見えるだらう。

マーチン、ダウル（起き上がつて、やゝ恥しさうに）

俺は牧師さん達が、聖者樣の美しいのを褒めてるのを、何回も何回も聞いたことがある。

モリイ、バーン、マーチンに衣をかけてやる。

テイミイ（不安さうに）

モリイ、お構ひでないよ。お前が衣をおもちやにしてゐるのを、聖者樣が御覽になつたら、何て言ふだらう。

モリイ、バーン（大膽に）

森の中でお禱りをしていらつしやるんですもの、見つかりつこはなくつてよ。（**マーチン、ダウル**に一廻りさせる）鍛冶屋のテイミイさん、立派な、尊い顏をした、聖者樣ちやなくつて？（馬鹿のやうな笑ひ方をする）メリイ、ダウル、立派な綺麗な人だこと。あんたが見えたら、神樣に落された地獄の惡魔のやうに、自慢をするでせう。

メリイ、ダウル（靜に、自信を以て**マーチン、ダウル**に近寄り、衣をさぐる）

今日はあたし達は自慢出來るだらうね。

マーチン、ダウルはまだ鈴を鳴らしてゐる。

モリイ、バーン（**マーチン、ダウル**に）

マーチン、ダウル。一生さうやつて、神樣のお仕へ人と一緒に、鈴をふつて歩いてゐたらいゝだらう。

メリイ、ダウル（**モリイ**の方をふり向いて、荒々しく）

あたしと一緒にゐるんだもの、何うして神樣のお仕へ人と一所に、鈴を鳴してゐられやう。

マーチン、ダウル

女房（あれ）の言ふことはほんとだ。鈴を鳴すのはいゝことかも知れねえが、俺にはバリナトンの盲目美人と一緒にゐる方が、遙かにいゝんだ。

モリイ、バーン

まあ、さう思つてゐるの。あなたは何にも知らないのねえ。

マーチン、ダウル

知らねえんだ。だから俺ああれの顏が、今日見たくつてならねえんだ。

テイミイ（氣まづく）

お前たちは手で觸り合つてゐるから、お前は女房がどんな風だか、よく知つてるだらう。

マーチン（未だ衣を探つてゐる）

知つてるかも知れねえ。だが顏や、立派な、美しい衣は知らねえんだ。衣をもつたことは滅多にねえし、顏をさはつて見たこともねえからな。（悲しげに）鍛冶屋のテイミイ、それに若い娘は、非常にはにかみやだ。俺のことを、綺麗な男だつて言つては呉れるが、一寸も構つちや呉れねえ。

メリイ、ダウル（嘲るやうに、上機嫌で）

あれが痩つこけた娘つ子の話をすると、聲が變になるだらう。西の世界の不思議だつて言はれてゐる、あたしと一緒になつてる癖にさ。

テイミイ（憐むやうに）

お前たち二人は、今日素敵な不思議を見るよ。嘘ぢやねえ。

マーチン、ダウル

あれの黃金の髪の毛や、白い肌や、大きな眼は、不思議だつていふことを俺あ聞いてゐる——

ブライド（左手を見てゐたが）

森の端から聖者樣がお出になるのよ。……モリイさん、見つかるといけないから、マーチンから衣

をとつておしまひなさいな。

モリイ、バーン（**ブライド**に、大急ぎで）

鈴をとつて、メリイを石の傍に坐らせて下さいな。（マーチン、ダウルに）衣を脱ぐまで、頭を眞直にしてるのよ。（モリイ衣を剝取り、自分の腕にかける。それからマーチン、ダウルを押しやり、メリイ、ダウルの傍に立たせる）靜に立つてゐるのよ。一言も言つちや駄目よ。

モリイは**ブライド**と竝んで、**マーチン、ダウル**の少し左手に、鈴などを手にして、謹直らしく立つ。

マーチン、ダウル（氣がゝりらしく上衣を整へる）

俺たちのやうに、一寸も小綺麗にしたり、綺麗に洗つたりしなくつても、氣にかけやしないだらうか。

モリイ、バーン

どんなだつてあの方は、氣におかけにならないのよ。……愛蘭で一番美しい女の傍へ寄つたつて、その女の顔を見るために、眼をお上げになりやしなくつてよ。……シッ！

聖者群集に取卷かれて左手より登場。

聖者

二人の憐な者といふのはこれか？

テイミイ（おせっかいに）

さうです。いつもこの四つ辻に坐つて、通りがゝりの者に銅貨を貰つたり、燈火（あかし）に使ふ燈心をさいたりしてゐます。そして少しも悲しがらずに、大聲をあげてべちやくちや喋つたり、又話し好きなものを揶揄つたりしてゐるのです。

聖者（**マーチン、ダウル**と、**メリイ、ダウル**に）

お前たちは日も月も見ず、又聖い牧師が神にお祈りをする樣をも見ずに、辛い生活をしてゐる。然し不幸な時を勇敢に切り拔けて來たお前達のみ、全能の神樣が今日お前たちに齎す視力といふ賜物を、よく用ひるであらう。（衣を取つて身に纏ふ）神に仕へた四人の美しい人々の墓は、裸岩の上にある。それ故その水が、裸の餓えた人々を救ふのは、何の不思議もない。（水と鈴とをとつて、肩のまはりに吊す）さればわしは、富める人が錢（ぜに）やパンのかけらを投げ與へるほか一寸も顧みない、皺だらけな、哀れなお前たちの所にきたのぢや。

マーチン、ダウル（不安さうに動く）

綺麗なメリイ、ダウルを彼奴等が見ると——

テイミイ　彼をゆすつて）

シッ、聖者樣の仰言ることを聞かぬのか。

聖者（一寸彼等を眺めて綴ける）

たとへお前が醜く、そして又汚くあらうとも、神は愛蘭の富めるものゝやうなことはせぬ。お前の目は、わしが小舟に載せて、カシラ灣より持ち來たつた水の功德によつて、忝くも癒されるであらう。

マーチン、ダウル（帽子をとつて）

聖者樣．仕度が出來ました。

聖者（彼の手をとつて）

先づお前を治し、それからお前の妻を治してやらう。さあ、教會に入りなさい。わしは神樣にお祈りをしなければならない。（行きかけてメリイ、ダウルに）心を靜にし、心の中でお祈りをしてゐなさい。不思議に、神樣のお力がお前の身に及ぶから。

人々（後から押す）

さあ、見に行かう。

ブライド

テイミイさん、いらつしやいな。

聖者（手をふつて追ひ返す）

其處にゐて呉れ。わしは多くの人達に教會の中で、小聲で話をされたくないのだからな。其處にゐて呉れ。お前たちは、罪をつくると盲目になるといふことをよく考へながら、僞りの豫言者や、邪教徒や、女や、鍛冶屋の言葉や、人の肉體や精神（たましひ）を汚す凡ての知識を遠ざけるやうに、お祈りをしてゐた方がよからう。

人々尻込みをする。**聖者**教會に入る。**メリイ、ダウル**、手探りで戸口の方に半ば行き、路の近くに跪く。人々右手につどふ。

テイミイ

上品な、いゝ聲ぢやねえか。斷食をしてゐなさるが、立派な、勇氣のある方だ。

ブライド

手を動すところを見て。

モリイ、バーン

こゝの人で、誰かあの方のやうに、お祈りが出來ればいゝわね。若しも誰かお祈りの仕方さへ知つてれば、あたし達の所のいゝ井戸水で、充分に間に合ふのよ。そして立派な家の一軒もない、又綺麗な人の一人もゐない荒れ果てた所から、水を持つて來る必要もなくなるわ。

ブライド（右手から戸の中を覗きながら）

マーチンが膝をついて、あんなに顫へてゐるのを御覽よ。

テイミイ（心配さうに）

可哀さうに。……今日あれが嬶を見たら、何うするだらう。俺たちはメリイのことを、綺麗で皺一つなく、ひからびた年とつた婆さんぢやないなんて、言つて、悪いことをした。

マツト、サイモン

あいつが盲目の時に、俺達が散々喜ばせたり、自慢をさせてやつたんだから、怒るわけがねえぢやねえか。

モリイ、バーン（**メリイ、ダウル**の席に腰を下ろし、髪を整へながら）

若しも怒るにしたつて、お主婦さんの時と同じやうに、他に思ふ女が出來るでせう。そして二三週間も經てば、あれはお主婦さんの顔を見たがらなくなるでせう。

マツト、サイモン

ほんとだ、モリイ。盲目のマーチンは、路傍に座つてゐる、皺くちや婆さんの嘘つぱなしを俺たちから聞いて、朝晩お前の傍にゐるお前の亭主が、お前のことで喜ぶよりも、もつと喜んでゐるんだ。

モリイ、バーン（反抗して）

お默り。マツト、サイモン。お前があたしの亭主になるんぢや無いんだからね。あたしと一緒にな

らうと思つて、お前さんが面白い歌を唄つたつて駄目ですよ。

テイミイ（ぞつとして、**モリイ、バーン**に）

聖者樣が向ふでお祈りをしていらつしやるんだから、大聲を出すなよ。

ブライド（叫ぶ）

シツ、……シツ、……治つたらしいのよ。

マーチン、ダウル（教會の中で叫ぶ）

おゝ、有難てえ。……

聖者（嚴かに）

愛蘭を恵み給ふ聖なる父と子の御靈（みたま）に幸あれ……

マーチン、ダウル（有頂天になつて）

おゝ、有難てえ。俺は見える……教會の壁が見える。羊齒の綠色も見える。聖者樣、あなたも見える。それから廣い廣い空も。

マーチン、ダウル大喜びで、半狂亂の體になつて駈け出す。そして**メリイ、ダウル**の傍ひづつてゐる傍を通り過ぎる。**マーチン**は通りすがりに少し彼女から退く。

テイミイ（他の者に）

あいつは嗅が分らねえのだ。

聖者、マーチン、ダウルの後より出で來り、**メリイ、ダウル**を教會内に導き入れる。**マーチン、ダウル、**人々の所に來る。彼と少女との間には數人の男あり。**マーチン**、杖をついて彼の場所を確める。

マーチン、ダウル（嬉しさうに叫ぶ）

ありやテイミイだ。頭が黑いから分る。……あ、マツト、サイモンだ。マツトは足が長いから分る。……こりやバツチ、ルーアに違ひねえ。元氣のいゝ眼と、眞赤な髮の毛で分る。（メリイ、ダウルの席にゐる、モリイ、バーンを見て、全然聲が變る）メリイ、ダウル、あゝ、俺が聞いたのは嘘ぢやねえ。おゝ、忝ねえ。俺はお前を見ずに死なゝかつたことを、神樣とお上人樣に感謝する。あの水に幸あれ。國々を遍つて持つてこられた人の足にも幸あれ。それからこの日にも、又聖者樣を俺の所へ連れて來て下すつた人々の上にも幸あれ。お前は立派な髮をしてゐるな。（モリイ一寸面喰つて頭を下げる）柔かな肌と、優しい眼だ。暫く眼が見えなかつた後、又眼が開いて、お前を見たら、聖者樣でも天から落ゐだらう。（モリイに近寄る）メリイ、頭を上げて呉れ。俺に俺が東の大王たちより幸福であるといふことが分るやうにな。頭を上げて呉れ。お前はすぐに、惡い所のほつちりもねえ俺が見られるんだ。

マーチン、ダウル、彼女に觸れる。**モリイ**は跳びあがる。

モリイ、バーン

退いておくれ。あたしの頸を汚しちやいやだよ。

人々哄笑す。

マーチン、ダウル（困つて）

お前の聲はモリイに似てゐるね。

モリイ、バーン

あたしがあたしの聲に似てゐるのは當り前だわ。あなたはあたしを幽靈だと思つてるの。

マーチン、ダウル

どれがメリイだらう。（ブライドの所へ行く）お前がメリイ、ダウルかい。みんな言ふのにお前が一番似てゐる。（のぞき込んで）お前は黃金の髮の毛と、白い肌を持つてゐる。それにお前のショールからは、俺ん所の芝の匂がしてゐる。

マーチン、ダウル、ブライドのショールを摑む。

ブライド（ショールをもぎとつて）

あたしはお前さんのお主婦さんぢやなくつてよ。だから退いて頂戴な。

人々再び笑ふ。

マーチン、ダウル(疑ひながら他の少女に)
お前だね。お前はそんなに綺麗ぢやないけれど、立派な鼻と、綺麗な手足を持つてゐるから、お前だらう。

少女(嘲つて)
あたしを盲目と間違へたものはなくつてよ、眼明があなたなんぞと一緒になるもんですか。

少女わきを向く。それから少し後に退り、**マーチン**を左手に殘す。人々又笑ふ。

人々(からかつて)
マーチン、も一邊やれ。もう一邊やれ。そうしたら當るかもしれねえ。

マーチン、ダウル(怒りつぽく)
何處へかくしたんだ。俺にとつては大切な日に、手前達の樣な可哀さうな畜生が大勢して、俺を揶揄つたり馬鹿にするなんて、恥つさらしだぞ。あゝ、手前たちはくす〳〵笑つたり、涙を流したりしていゝつもりなんだな。俺や、西の國の不思議と言はれてる女を、揶揄つてもいゝつもりなんだな。

マーチン、ダウルが教會に背を向けて喋つてゐる間に、**メリイ、ダウル**が眼を癒して出て來る。そして馬鹿げた作り笑をしながら右手に下り來り、**マーチン、ダウル**のすぐ後に行く。

メリイ、ダウル マーチンの言葉の途切れたとき)
どれがマーチン、ダウルなの。

マーチン、ダウル(ぐるりと向きかはつて)
確にあれの聲だ。

二人は互に呆然と相手を見つめる。

モリイ、バーン(**マーチン、ダウル**に)
さあ、お主婦さんの所へ行つて、顎をとつて、あたしに話しかけたやうに言つて御覽。

マーチン、ダウル(低い聲で、力强く)
今俺が物を言やあ、手前たち二人の惡口を言ふぞ。——

モリイ、バーン(**メリイ、ダウル**に)
メリイさん、あなたは一言も言はないのねえ。あなたはあの人の太い足と、牡羊のやうな小さな首を何う思ふの?

メリイ、ダウル
神樣が目を開けて下すつて、あんな男をあたしに突附けるなんて、情けないことだとあたしは思ふよ。

マーチン、ダウル

お前は自分で自分の姿を見ないのを、兩膝を地面について神樣にお禮するがいゝ。もしもお前が自分で自分の姿を見たら、谷の中をきやあ〳〵いひながら駈けづり廻つてゐる、氣違ひ女のやうに駈け廻るだらう。

メリイ、ダウル（氣がつき始める）

皆が言ふほど綺麗ぢやないかも知れないが、あたしや髪と、大きな眼と、白い肌を持つてるよ——

マーチン、ダウル（熱情的な叫聲をあげる）

お前の髪、お前の大きな眼だつて？……山の上の灰色の牝馬に積んである藁束の方が、汚いもしやくしやしたお前の髪の毛より、よつ程ましだぞ。餓ゑ死にしかけてる牝豚の二つの眼の方が、海のやうに青いつて言つてるお前の眼より綺麗だぞ。

メリイ、ダウル（**マーチン**の言葉を遮つて）

今日お前を癒したのは惡魔だ。牝豚のことを言ふなんて。惡魔が今日お前を癒したんだ。そして、出鱈目をいふ氣違に、お前をしてしまつたんだ。

マーチン、ダウル

十年もの月日を、朝晩お前は俺に嘘をついてゐたんだ。だがもうお前が老耄（おいぼれ）の萎び婆あで、俺の子

供を育てるにや適していないつていふことを、神樣が俺に眼を開けて見させて下さつたんだから駄目だぞ。

メリイ、ダウル

あたしはね、お前みたいな皺くちやな餓鬼を育てるのは御免だよ。お前より綺麗な男と一緒になつた女が、子供がなくても神樣にお禮を言つてるよ。天を淋しくし、空を飛ぶ雲雀や、烏や、天使をおどかすやうな厄介坊主を產まなくつてもね。

マーチン、ダウル

お前を隱しつちまふやうな淋しい所へ行つちまへ。行つちまへ。そんでなきや、お前は盲目になる水を神樣に求めて男や女の膝から、血を出さすだらう。果はみんなお前なんかを見るよりは、百年でも、千年でも、盲目でゐる方を喜ぶぞ。

メリイ、ダウル（杖をふり上げて）

これで思ひきり擲つたなら、お前は盲目になれて本望だらう——

聖者頭を垂れ、祈禱をしながら、教會の入口に現はれる。

マーチン、ダウル（杖をふりあげ、**メリイ、ダウル**を左手の方に逐ひたてながら）

少しばかりの腦味噌を、路傍にたゝき出されるのが嫌なら、さつさと俺の傍を離れやがれ。

打たうとする。テイミイ彼の腕をとらへる。

テイミイ

おい、聖者様が上でお祈りをしていらつしやるのに、大騒ぎをして、お前は恥しかないのかい。

マーチン、ダウル

あんなもの構ふもんか。(振放さうと身を跪く)思ひきり一つ殴らせて呉れ。さうすりや、死ぬまでおとなしくするよ。

テイミイ(彼をゆする)

静にしろつていふに。

聖者(中央に出て來る)

二人の心は喜びで亂されたのか。それとも目がはつきりしないのか。癒された日によくあることだが。

テイミイ

見え過ぎるんですよ。聖者様。二人共餘りにみすぼらしいもんですから、大喧嘩をしてゐるんです。

聖者(二人の間に入つて)

お前たちに眼を下さつた神様が、お前たちに分別を下さるやうに。さればお前たち、この世のあはれな二人の罪人(つみびと)のみを見ずに、しばし大きな山や、海へ流れる急川を照す神の御靈の輝きを見よ。

若しお前たちがかゝる光を見ておつたならば、お前たちは人の顔にとやかく言はないで、唯お祈を唱へてばかりゐるだらう。さうすれば優れた聖者のやうに、小さな古い外套を持ち、骨と皮のみになつて生きられる。(テイミイに)靜になつたからもう放しておやり。(テイミイ、マーチン、ダウルを放す)そしてお前は(メリイ、ダウルの方を向く)大きな聲を出すんではない。女が大きな聲を出すことは悪いことだ。然しお前たちは神様の御力を見たのだから、暗い晩にそのことを思ひ出し、神様が愛蘭の貧しい餓ゑた人々に、大なる憐れみと、愛とを垂れさせ給ふたことを、自分に言ふがいゝ。(衣をまとふ)神様はお前たち凡てにお恵を下さるだらう。わしは聾の女のあるアンナゴランや、二人の狂人のおるララや、生れつき盲目の子のおる、ナシルに行かねばならぬのだ。わしは今晩はケビンの洞穴に行き、神様にお祈りを上げて、お前たちすべてに、御恵のあるやうにお願ひしやう。

頭を下げる。

(幕)

第二幕

村の路傍、左手に仕事場の戸あり。こはれた車などが轉がつてゐる。中央近く井戸あり。その上に板がのつてゐる。そして井戸の後には、人の通れる丈の余地がある。マーチン、ダウル、仕事場の近くに坐つて、棒切れを割つてゐる。

テイミイ(仕事場でハンマーを振つてゐる音が聞える。呼ぶ)
早くしろよ。……夕方にや新しく火を起さなきやならないんだ。それだのにお前はまだ半分も出來ちやいないぢやねえか。

マーチン、ダウル(ふさぎ込んで)
腹ん中にや豚を生かしとく程の食物(くひもの)も入つてないんだから、お前の古枝を夕方までに折つぴしよつてりや、俺あ死んぢまふだらう。(戸の方を向く)切りたいなら手前で出て來て切つたらいゝだらう。毎日一時間のお休があるんだから。

テイミイ(ハンマーを手にして出で來り、もどかしげに)
もう一邊路傍へ追ん出して貰ひてえのか。お前が其處にさうやつてゐりやあ、俺あお前に食物(くひもの)だの、寢る所だの、金だのをやるぢやねえか。だがお前の話を聞きや、人々は俺がお前を打つたり、お前の金を盗んだりしとるやうに思ふだらう。

マーチン、ダウル
若しも俺が金貨を持つてゐたら、お前はそれを盗みかねやしねえよ。

テイミイ(ハンマーを投げ出し、割いてある棒切れを拾ひ上げて、戸の内に投り込む)
お前が金貨を握るやうな心配はありやしねえよ。——お前みたいな怠けものの、日向ぼつこばかりしてゐる馬鹿野郎がね。

マーチン、ダウル
お前と一緒に俺がこゝにゐる間は、多分そんな心配はねえだらう。なぜつて少し前俺が盲目(めくら)でグリーナンでぶつ坐つてゐた時の方が、こゝで一日中死んぢまふ程一生懸命に働いて貰ふものより、餘程多かつたからな。

テイミイ(驚いて立ちどまる)
一生懸命に働くつて。(彼の方に近寄る)マーチン、ダウル、懸命に働く方法を教へてやらう。さあ、上衣を脱いで袖をまくりあげ、俺が鞴の灰を掻いてる間に木を切るんだ。さもなけりや、俺はもう一時間もお前を我慢することは出來ねえぞ。

マーチン、ダウル(恐怖にかられて)

この眞冬の寒空に、上衣も著せないでひとを外に坐らせやうなんて、お前は俺を殺す氣かい。

テイミイ（威嚴を見せて）

さあ、脱げ。脱かなけりや出てけ。

マーチン、ダウル（悲しさうに）

あゝ。情ねえこつた！（上衣を脱ぎ始める）俺はお前が經帷子を剝ぎ敢つてから、嬶を墓の中に埋めたつていふことを聞いた。又お前のやうに、日の短い時に生きてる家鴨の羽を毟り取つて、大雨の寒い中を裸で駈けづり廻はらせるやうな奴は、ほかにゐねえつていふことも俺は聞いて知つてる。（袖をまくり上げる）あゝ、俺はお前のした妙なことを澤山に聞いて知つてるんだ。俺は今日からそれを皆んな信じて、子供等に聞かせてやらう。

テイミイ（大きな木の枝を引き出す）

今度はこいつを切つてくんな。俺はお前の言ふことなんぞ聞いちやいやしねえんだから默つてろよ。

マーチン、ダウル（木の枝をとる）

テイミイ、こいつは怖しく固い枝だ。皮が冷たくつて霜でつる〳〵してる時、こんなしつかりした奴を切るなんて、可哀さうぢやねえか。

テイミイ（他の棒切れを一抱へ拾ひ上げる）

月が變つてからこつち凍つてゐるんだから、冷たいのはあたり前だ。

テイミイ仕事場に入る。

マーチン、ダウル（のろ〳〵割る。不滿ちくし）

あたり前だつて、テイミイ。毎日々々ピリ〳〵する嫌な日だ。俺あ盲目の方がいゝ。なあ、鍛冶屋のテイミイ、丘の方を飛んでる灰色の雲も見ねえですむし、お前のやうな赤い鼻をした人々や、お前のやうに泣いて涙のたまつてる眼を持つた人をも見ねえですむんだ。

テイミイ（入口で瞬きをしてゐるのが見える）

眼が見えるのが嫌になつたのかい。

マーチン、ダウル（非常に悲しげに）

お前みたいな者の傍にゐたり、（棒切れを割つて投げ出す）嬶を持つたりすることは、（棒切れを切る）眼の見えるものには辛えこつた。この世の惡い日や、お前みたいな奴が歩き廻つて、どつちみち糞溜の中へすべり込むのを見てゐるなんて、神樣も辛いことだらう。

テイミイ（鐵床の上で自在鉤を叩きながら）

マーチン、ダウル。お前の氣にするのも無理はないよ。聖者樣のお癒しになつたものでも、少し經つてから又見えなくなつた者が澤山にあるからな。メリイ、ダウルも眼が霞んで來たといふ話だ。

神様が若しもお前のいふことをお聞きになつたら、もう憐れんぢや呉れまいよ。

マーチン、ダウル

見えなくなつたつて俺あ一寸も恐かねえ。日は暗えが、俺あお前の眼のまはりの皺を、いやになる程見たよ。

テイミイ(鋭く彼を見て)

雲ぎれが東に出來たから暗かねえよ。

マーチン、ダウル

俺を恐がらせやうと思つて苦勞すんなよ。お前は俺が盲目の中にたんと嘘をついたんだから、默つて休むがいゝ、(メリイ、ダウル、野菜の一杯入つた袋を腕にのせ、氣附かぬやうに入つて來る)愛蘭の大馬鹿者が時折は草臥れてくれなけりや、人々は一寸も樂をすることは出來ねえからな。(顔を上げてメリイ、ダウルを見る)あゝ、またあいつがやつて來やがつた。

マーチンは彼女に背を向けて、忙しさうに働き始める。

テイミイ(面白がつて、**メリイ、ダウル**が振向きもせずに行き過ぎやうとした時)

見て御覽、メリイ、ダウル。お前はあいつを精出して働かせるのが甘えよ。あいつは夜が明けてつから今まで、怠けたり、無駄口を叩いてばかりゐるんだよ。

メリイ、ダウル(そつけなく)

鍛冶屋のテイミイさん。何のことを言つてるの。

テイミイ(笑ひながら)

彼奴のことだよ。彼奴を見て御覽。シャツの背中んところが破けてるよ。お前達は久しくお互に口をきかないんだから、今夜來てお前縫つてやるといゝや。

メリイ、ダウル

二人であたしをお苦めでないよ。

頭を後にそらして左手より退場す。

マーチン、ダウル(仕事の手を止めて、**メリイ**を目送す)

ふん彼女は二日と俺を見ずにはいられねえから妙ぢやねえか。

テイミイ(嘲るやうに)

お前の顔を見るつて。メリイは醉つぱらひと娘つ子が、側の溝の中で話をしてゐるその側を通る牧師さんのやうに、頭を後にそらしてゐたぜ。(マーチン、ダウルは立ち上がつて、仕事場の角の所に行き、左手を眺める)こゝへ戻つて來いよ。そしてあんな奴には構ふなよ。さ、戻つて來いよ。お前にいゝ著物もきせず、旨いものも食はせて呉れねえで、お前をうつちやつて行つちまふやうな者

の後を、見送つたつて仕様がねえよ。

マーチン、ダウル(怒つて叫ぶ)

テイミイ、メリイを追つ拂つたのはこの俺だつていふことを、お前はよく知つてるだらう。

テイミイ

お前の言ふなあ嘘だよ。だがどつちがどつちを追つ拂つたつて構やしねえ。さあ、此處に戻つて來て仕事をしろよ。

マーチン、ダウル(振り返へる)

行くよ。……

一二歩中央に歩み寄り、立ち止つて右手を見る。

テイミイ

マーチン、ダウル、口を開いて何を見てゐるんだい。

マーチン、ダウル

誰か上を歩いてる……モリイ、バーンが鑵を持つて下りて來るやうだ。

テイミイ

あの娘が來たつてお前が怠けたり、氣にすることはねえ筈だ。さあ、早く棒切れを割んな。すぐお

前に鞭をふかせるんだから。

自在鉤を投り出す。

マーチン、ダウル(叫ぶ)

今度は俺を燒くつもりかい。(振りかへつて自在鉤を見る。そしてそれを取り上げる)自在鉤だ。お前はこいつをいぢくつて、夜明から今まで、汗を流したり、噴嚏をしたりしてたのか。

テイミイ(鐵床に倚りかゝつて、滿足げに)

マーチン、ダウル。俺りやお前が嬶を眺めてる間に、人が世帶を持つ時に必要なものを澤山に作つた。俺りやゆんべ、聖者樣が又間もなくやつて來られるつていふことを聞いたから、聖者樣にモリイと一緒にして貰ふんだ。……あの方は一文も取らずにやつて下さるさうだ。

マーチン、ダウル(自在鉤を下に置き、ぢつと彼を見詰める)

モリイは神樣がお前のやうな綺麗な、太つた、しつかりした男を授けて下すつたら、神樣を褒めそやすだらう。

テイミイ(不安さうに)

あたりまえさ。彼女は綺麗な女だが。

マーチン、ダウル(右手を見て)

テイミイ、あたり前だつて?……若しもお前がお前みたいな女と一緒になつたら、この世に又とない怖しい赤ん坊が出來るぞ。

テイミイ(非常に氣を惡くして)

畜生! 手前は顔も汚ねえが、尙更口の汚ねえ野郎だ。

マーチン、ダウル(同じく氣を惡くして)

俺あ寒さで弱つてるんぢやねえか。それによ、なる程俺も汚ねえか知れねえが、俺あ今日手前のやうな元氣のねえものを見たことはねえ、鍛冶屋のテイミイ、あの娘が來るやうだから、其處に坐つて爛れ目や、路傍におつたつてる、案山子のやうな大きな鼻をくつゝけて坐つてゐねえで、古小屋に入つて顔でもこすつたらいゝだらう。

テイミイ(不安さうに路の方を見る)

俺あ山の上に四室(よつや)もある家を建てたんだから、あの娘(こ)は俺の顔なんか氣にするもんか。(立ち上がる)だがお前もメリイ、ダウルも、こゝや向ふのラスバナの誰彼と、顔つきのことばかり喋つたり、考へたりするから不思議だ。(仕事場の方へ歩み行く)お前が綺麗な顔のことなんぞ言ふなんて惡魔の仕業だ。だが俺あ中に入つて綺麗に眼を洗つた方がいゝかも知れねえ。

仕事場に入る。**マーチン、ダウル**は上衣の端でこつそり顔を擦る。**モリイ、バーン**水罐を持つて右手より登場。罐に滿すため水を井戸から汲み始める。

マーチン、ダウル

モリイ、バーン。今日は。

モリイ、バーン(無關心で)

今日は。

マーチン、ダウル

暗い陰氣な日だねえ。神樣、憐れみを垂れ給へ。

モリイ、バーン

かなり曇つてゐるのね。

マーチン、ダウル

眼が開いてると、汚い日や、暗い朝や、みすぼらしい顔をした奴をたんと見なけりやならねえ。(肩で身振をする)だがたつた一つ好いことがある、そりやお前のやうな立派な、肌の白い、美しい娘つ子を見ることだ。……そして俺あお前を見るたんびに、空においでになる神樣や、聖い水や、聖者樣を有難てえと思ふんだ。

モリイ、バーン

牧師様は仰言つてよ。若い女を見てるとお禱りが覺えられないつて。

（罐の中にコップで水を汲み入れる。）

マーチン、ダウル

俺は他の奴等とは異つてお前の聲が聞けても、眼が一寸も見えなかつたんだ。

モリイ、バーン

路を通る娘つ子や、女の姿が見えないで、目をつぶつて坐つてゐるのは、老耄の、意地の悪い、お世辭を言つては人を欺す馬鹿にとつては、妙な時だつたに相違ないわ。

マーチン、ダウル

妙な時だつたかも知れねえ。だがグリーナンへ行く途中のお前の聲を聞くと、嬉しかつたし、自慢もした。（悲しさうな、しかし力の籠つた聲で語り始める）お前の聲は可哀さうな盲人の心に、多くの滿足を與へて呉れるのだ。それ故俺はお前の聲を聞いた日には、他のことは何にも考へなかつた。

モリイ、バーン

あたしにそんなことを言ふとお主婦さんに言ひつけてよ。……あなたも聞いたかも知れないけど、あの人は下でやもめのオフリンに蓐麻をとつてやつてゐるのよ。オフリンはね、あの人がお前と辻ん所で喧嘩をして、お前に恥しめられたのを見て、非常に可哀さうに思つたんだつて。

マーチン（我慢しかねて）

あの婆のことや、グリーナンのあの日のことを思ひ出させるやうなことをしねえで、世間話や、「お達者で」と一語位え言つてくれる者はねえものかしら。

モリイ、バーン（意地悪く）

生れてから一番いゝ日だつて自分で言つてるあの日のことを、お前さんに思ひ出させたつてあたしはいゝと思つてよ。

マーチン、ダウル

いゝ日だつて。（仕事を投げ出して彼女の方に身を曲げ、又悲しさうに）起きりや嫌な詞あたりの日だ。婆さんの話を聞いてる子供のやうで、暗い晩にや斑のある馬の居る大きな金の家の夢を見るが、覺めて見りや寒くて堪えられねえ。蕁草からは雫が垂れ、圍内にや腹の減つた驢馬がぶう〳〵唸いてゐやがる。

モリイ、バーン（平氣で働いてゐる）

マーチン、ダウル、大變なお話しねえ。あなたはゆうべ酒場へ行つたの。

マーチン、ダウル（立ち上がり、彼女の方へ行く。しかし井戸の右側に遙に離れて立つ）

モリイ、バーン。さうぢやねえ。ちつぽけなぼろ小屋に寢てたんだ……藁がぬれて固つたものゝ上

に横になつてたんだ。そんで俺はお前が歩いてるのを見たり、乾いた路の上にお前の足音を聞いたりした樣だつた。それから乾いた材木で屋根の出來た高い部屋の中でお前が笑つたり、大話をしたりしてゐるのを俺あ聞いたやうに思つたんだ。お前の聲はよく響くね。俺は盲人のやうに横になつてた方がいゝと思ふよ。炭色のあかりの中で、こゝにこう座つて、鍛冶屋のティミイに辛いことを言はれてゐるよりやなあ。

モリイ、バーン(興じて彼を眺めながら)

お前は小つぽけな、老耄の、みすぼらしい、づんぐりした男だけれど、面白いことを言ふのねえ。

マーチン、ダウル

俺あ皆んなの言ふ程老耄ぢやねえ。

モリイ、バーン

女の子にそんな話をするには年が多すぎるわ。

マーチン、ダウル(がつかりして)

お前の言ふのは嘘ぢやねえかもしれぬ。俺はあの耄老婆(おいぼれ)と戀を言つたり、感じたりして、永い年月をだいなしにして仕舞つたんだ。それにな、鍛冶屋のティミイの嘘つ話でも暇つつぶしをしちまつたんだ。

モリイ、バーン(半ば誘ふやうに)

鍛冶屋のティミイに仕返しをしやうつていふのはひどいのよ。……マーチン、ダウル、だけどお前は今では、ティミイの嘘に戀をしてはゐないんでせう。

マーチン、ダウル

あゝ、モリイ、さうぢやねえ。(モリイの後を通り、その左側に近寄る)俺は向ふのカヒール、アイバラヒツヒや、コークのリークスには、暖い太陽が照り、空が綺麗に輝いてゐる土地があるつていふことを聞いて知つてゐる。(彼女の方へ身を曲げる)昔盲目だつたものには光はいゝもんだ。それからお前のやうな綺麗な襟元や、肌を持つた女もいゝもんだ。俺たちは今日からこゝを出て、南の町を通つたり、話をしたり、それから緣日で歌を唄つて、面白可笑しく暮してもいゝだらう。

モリイ、バーン(半ば興じて向きかへる。そして**マーチン**を頭のてつぺんから、足の先まで眺める)

ねえ、お前がなさけない顏をしてゐたもんだから、お主婦さんがお前を棄てゝいつちまつたのに、又あたしにそんなことを言ふなんて妙ぢやないの。

マーチン、ダウル(少し後退りをする。氣を惡くし、立腹して)

そりや妙かも知れねえ。この世の中のものは何でも皆んな妙だからな。(妙に强めた低い聲で)だが一つ言ふことがある。彼女(あいつ)は俺を棄てて行つちまつた。だがそりや彼女が現在(いま)の俺の汚ねえのを見

たためぢやねえ。俺がこの二つの眼で彼女の起きる樣子や、物を食ふ樣や、髪の毛の結び方や、寢轉ぶ樣を見たからだ。

モリイ、バーン(興じる。氣をゆるめて)

結婚した男は皆んなそんなことをするんぢやないの。

マーチン、ダウル(注意を惹いた機會に乘じて)

盲目で少時(すこし)ゐたもの丶外、誰も何にも分りやしねえ。(興奮して)墓に腐れ込んで行く老耄婆を見るものは、誰もありやしねえ。それから、お前のやうなものを見るものもありやしねえ。(彼女の方に身を曲める)だけどお前は海の舟を曳き寄せる燈臺のランプのやうに輝いてる。

モリイ、バーン(身を縮こませる)

傍へ寄つちいやよ。マーチン、ダウル。

マーチン、ダウル(低い、恐しく緊張した聲で)

俺のいふことはほんとだよ。(彼女の肩に手をかけてゆする)お前は長いこと不運に出會つておつた男と、一緒にならない方がいゝよ。お前が朝起きて、上の小路んところの戸から出て來るのを見るのは、眼明にも盲目にもいゝものだが、何うしてそんな奴がそんな所を見るに適した眼を持つてるやう。お前の二つの目が、そいつを見てるやうな氣がする程空を眺めると、お前の二つの目がそいつの上に光る程ほんやりする。それから又今度頭を下げると、目明が何處の路に行つても出つくはす肥溜にふん込んで跳び上がるんだ。

モリイ、バーン(半ば催眠術にかゝつたやうに聞いてゐたが、はつと飛び退いて)

氣違ひがそんなことを言ふよ。

マーチン、ダウル(追ひかけて彼女の右に出る)

お前みたいなもの丶傍にゐりや、男が氣の違ふのは少しも不思議はねえよ。さあ、鑵を置いて俺と一緒にお出で。俺は今日誰よりも一番よくお前を見たんだから。(モリイの腕を取つて、右手の方に靜に曳き行かうとする)さあ、アイベラーか、コークのリークスへ行かう。あすこへ行きや一跨ぎで綺麗な花を踏みつぶして、空氣にいゝ匂をつけることが出來るよ。

モリイ、バーン(鑵を下に置き、ふり放さうともがく)

放しておくれ、マーチン、ダウル。放しておくれつてばよ。

マーチン、ダウル

馬鹿なことをするんぢやないよ。森を通つて小路を行かう。

モリイ、バーン(仕事場の方に向つて叫ぶ)

テイミィ——鍛冶屋のテイミイ。(テイミイ仕事場から出て來る。マーチン、ダウル、モリイを放す。

モリイ、バーン興奮し、喘ぎながらマーチン、ダウルを指さす）鍛冶屋のテイミイ、お前盲目になると氣違になるつていふことを聞いたことがあつて。

テイミイ（疑ふやうに、然し曖昧に）

あいつは屹度氣違ひなんだ。ぢや今日からあいつを、上等な寢床や、食物や、賃金にありつける、こゝから追んだしてやらう。

モリイ、バーン（前と同樣に）

テイミイ、彼奴はもつと大馬鹿者よ。さあ、よく見て御覽。彼奴は口さへ開けば、あたしみたいな綺麗な女が、すぐに後からついて來ると思つてゐるから偉いぢやないの、

マーチン、ダウル片手を兩方の眼にあて、小さくなつて中央に退く。**メリイ、ダウル**左手より靜に登場す。

テイミイ（全く驚いて）

あゝ、盲目は皆んな惡い奴だといふが嘘ぢやねえ。これ以上面倒のかゝらねえやうに、今日追ん出して呉れやう。

左をふりかへり、**マーチン、ダウル**の上衣と杖とを拾ひ上げる。何か上衣のポケットから轉り落ちる。

テイミイ再びそれを拾ひ集める。

マーチン、ダウル（ふり返つて**メリイ、ダウル**を見、頼むやうに、苦悶の聲を上げて**モリイ、バーン**に囁く）

モリイ、バーン。彼女と鍛冶屋がゐる前で、この俺に恥をかゝせないでくれ。俺はお前を褒めたんだ。それから夜中に……夢に……見たんだから、恥しめないで呉れ。（ためらふ。そして空を見廻す）雷雨がやつて來るのかな。それともこの世の終りかしら。（一寸錫罐に躓き、メリイ、ダウルの方によろめいて行く）空が暗いな。何か空に騒ぎが起つてるやうだ。（メリイ、ダウルに近づき、兩手でその左の腕を掴む。――狂氣したやうな聲で）メリイ、ダウル、雷がやつて來るので暗いんだ。お前は俺がはつきり見えるか。

メリイ、ダウル（腕をひき放す。それから空の袋で**マーチン、ダウル**の顏をうつ）

見えすぎるよ。だからお前、あたしの傍へ寄らないでおくれ。

モリイ、バーン（手を拍つて）

それがいゝよ、メリイ。あたしの足元に坐つて、お前さんのやうな老耄た、見すぼらしい、ほつゝき廻る女になる迄、一緒に行かうなんてあたしに賴むあんな奴には、さうしてやるのが一番よ。

メリイ、ダウル（挑みかゝつて）

モリイ、バーン。お前も頰の肉がなくなると、愛蘭中に二人とない痩せた婆になるよ。……ほんといゝお揃ひさ。

マーチン、ダウル中央より右後に、觀衆に背を向けて立つてゐる。

テイミイ（**メリイ、ダウル**の傍に來て）

あの娘が今にお前みたいになるだらうなんて嘘をついて、お前は少しは辱しかないかい。

メリイ、ダウル

肥えてだぶ〳〵してゐるものは、若い中に皺だらけになるんだよ。それからあの娘の白みがゝつた黄金色の髪の毛も、豚樫の北のじめ〳〵した所で腐つてる、一つかみのまばらに生えた草のやうになつちまふんだよ。（右手より退場せんとして向きかはる）少しの間馬鹿を氣違ひにし、そして小さな子供等を足元から追ひ散すやうなものになるよりは、あたしみたいな相應の顔を、四十年も五十年も持つてた方が遙かにいゝよ。

メリイ、ダウル退場す。**マーチン、ダウル**は感情を制して再び圓に進み出る。しかし不安の體。

テイミイ

モリイ、盲目の話なんか眞平だ。（**マーチン、ダウル**の上衣と杖とを投げる）マーチン、ダウル、さあ、そこにお前の古ぼけたがらくたがある。お前のものはそれだけだから、そいつを持つて世間に出て行つてくれ。俺が二度と再びお前の來るのを見やうものなら、お前の目が開いてやうが、開いてまいがおかまひなしに、大きなハンマーで打ちのめして、往生させてくれるぞ。

マーチン、ダウル（やうやく身を起して）

何の用があつて俺にそんなことを言ふんだ。

テイミイ（**モリイ、バーン**を指さして）

何の用かお前がよく知つてるだらう。俺が一緒にならうと思つてる綺麗な娘つ子に、お前みたいな汚い面をした馬鹿野郎が——どうせ妙な惡い話だらうが——話して聞かせて胸を傷めるのはよくねえつていふ位えのことは、お前もよく承知してる筈だ。

マーチン、ダウル（聲を張り上げて）

彼女はお前を揶揄つてるんだ。眼の見える女がどうしてお前なんぞと一緒にならう。あいつを見ろ。モリイ、あいつを見ろ。俺にはまだあいつがよく知える。さあ、時がくるからお前聲を張りあげて、あいつを仕事場に追ひやつちまへ。そして此の世の終りまで、自在鉤をたゝいて汗を出したり噴霧をさせて、ひとりぼつちで坐らせとけ。

マーチン、ダウル再び**モリイ**の腕をとらへる。

モリイ、バーン

テイミイ、この人を追つ拂つておくれ。

テイミイ（**マーチン、ダウル**を押しのけて）

マーチン、ダウル、お前は毆つて貰ひてえのか。さあ、さつさとお前はお前に似合ひの嗅の後を追つかけてけ。そしてモリイは俺にまかしてくれ。

マーチン、ダウル(絶望して)

モリイ、お前は聲を張り上げて、彼奴の舌を呪はねえのか。

モリイ、バーン(テイミイの左で)

あたしはねこの人に、あたしがお前の顔や聲でうんざりしたつていふことをいひつけてやるのよ。お前さんはお主婦さんの後を追つかけてお出で。そして若しもお主婦さんに打たれたら、丘を駈け廻つてる乞食鑄掛屋の娘か、町の自墮落な女の後を追つかけて御覽。さうすりやあたしのやうな躾のいゝおとなしい子には、何んな口をきいたらいゝのかすぐ分つてよ。(テイミイの腕をとる)あたしは彼奴の生れつきもつてる氣狂ひじみた目庇が恐くらなつたから、彼奴が往來に出て仕舞ふまで仕事場に入つてるわ。

モリイ、バーン仕事場に入る。テイミイ入口に立ちどまる。

テイミイ

マーチン、ダウル、二度と再びこゝへ來るなよ。(腕をまくる)お前は鍛冶屋のテイミイさんは、腕つ節が強いつていふことをよく知つてるだらう。それから俺がお前の頭の骨よりも固いものを、

打ち碎いてるるといふこともよく知つてるだらう。

テイミイ仕事場に入り、戸をとざす。

マーチン、ダウル(暫く片手を兩方の眼の上にあてゝ立つ)

俺のこの世の中での見納めはこれだ。——女の惡さと、男の殘忍な腕力だ。あゝ、今の俺には彼奴等をとつちめるだけの力がねえ。(暫く手探りをする。そして止める)だが俺には力はねえが、お祈りをする聲は持つてる。だから神樣は今日彼奴等を、俺の心と一緒に打つ挫るて下さるだらう。さうすりや、モリイ、バーンと鍛冶屋のテイミイの二人が、地獄の高い寢臺で悲鳴をあげてるのが見られる。……その時の彼奴等は觀物だらう。彼奴等は毎日々々、死ぬまでのたくつたり、嗷鳴つたりしてるるだらう。その時にや俺は盲目ぢやねえ。そりや俺にとつちや地獄でなくつて極樂だ。さうなつたら、俺あ神樣も知らねえやうな面倒をみてやらう。

マーチン、ダウル手探りで退場す。

(幕)

第三幕

第一幕と同じ場面。しかし中央の破目が、茨や何かの枝で滿されてゐる。メリイ、ダウル再び盲目となつて手探りにて登場、前のやうに腰をおろす。燈心草をいくらか持つてゐる。早春の或る日のこと。

メリイ、ダウル（悲しげに）

あゝ、情ない。……情けない。昔は今程暗くはなかつた。あたしはもう何うしたらよいのか分らなくなつちやつた。風が冷くつて、通りがゝりの人の少い時には、たつた一人で食べるお金をかせぐのも並大抵のことぢやない。（燈心草を割き始める）これからは短い日もあたしには長い日になるだらう。あたしは一寸も見ることが出來ず、又一言も口をきくことが出來ないでこゝに坐つてゐる。あたしの腹ん中には、ぢきにマーチン、ダウルに惡心の報がくるやうにつてお祈することの外、何の考もありやしない。人々はあたしのことをひどく揶揄ふだらう。また通りがゝりにあたしを指さして、マーチン、ダウルは何處にゐるんだいなんて尋ねるだらう。もう今日からは、あたしは長い髪の毛が白くなり、その白い髪の毛が額の上でもつれ合ふ婆になるまで、落ついたり、上品ぶつたりすることが出來ないんだ。（髪の毛をいぢくる。それから何か聞きつけたやうに暫く耳を傾ける）妙な、よほゝゝした足音が路から聞えて來る。……あゝ、きつと彼奴がやつて來るんだらう。

メリイ、ダウルじつと靜にしてゐる。

マーチン、ダウル右手より手探りにて登場、同じく盲目になつてゐる。

マーチン、ダウル（陰氣な聲で）

メリイ、ダウルの奴め、綺麗だなんて俺に嘘をつきやあがつた。うぬ惡魔にとつちめられろ。それから老耄の聖者もとつちめられろ。嘘だつていふことを俺に分らせやがつたんだから。（メリイの近くに坐る）辛い仕事をさせて、空つ腹で朝から晩まで俺をほつたらかしといた鍛冶屋のティミイにも、惡魔の奴とつゝいてくれ。モリイの心に幾萬もの惡魔がとつゝけ。――（メリイ、ダウル同意してうなづく）――それから、この世の凡ての女の中に隱れてゐる、惡い、憎い心にもとつゝけ。（片手に顔をうづめ、前後に動かす）今日からは俺はひとりぼつちだ。生きてる奴は惡者としたつて、あのメリイ、ダウル、彼奴は汚くつて皺だらけな老耄婆だけど、一緒に坐つてゐた方がたつた一人でゐるよりは遙にいゝ。冷い空氣の中にたつた一人で座つて夜の更るのを聞き、鶫が啼きながら茨の中を飛び廻るのを聞いてゐたら、俺は死んぢまふだらう。そんな時にや、車の遠く東に行つたり、西に行つたりする音も聞えるし、また犬の吠聲や、そよ風が枝を鳴らす音も聞えるからなあ。（耳を傾け、又重い吐息を洩らす）たつた一人で座つてゐりやあ、俺は駄目になつちまふだらう。そして目が見えなくなつた上に、氣まで變になつちまふだらう。なぜつて妙なものが澤山に動いたり、小

枝が折れたり、草が動いてる時、座つて自分の呼吸だの——(石の上で足を動かす)——足音だのを聞いてゐりやあ誰だつて怖しくなるからなあ。——(メリイ、ダウル半ば溜息をする。マーチンはこはゞゝメリイの方を向く)——あゝ、俺あ石の上に誰か溜息をしてゐるものもあるつていふことを、日や月にかけて誓つてもいゝ。(誓く彼女の方に耳を傾ける。それから興奮して飛び上がり、手探りにて杖を求める)俺はもう行かう。だが杖は何處に行つたんだらう。怖しさのために俺は何うしていゝんだか分らなくなつちまつたぞ。(手探りをしてゐるうちにメリイの顔に手が觸れる。そこで彼は叫ぶ)俺の側に冷い顔をした奴が坐つてゐるぞ。(逃げ出さうと向きかはる。しかし逃路をあやまり、壁にぶつかつてよろめく)さあ、路が分らなくなつちまつた。神様、どうか路をおそへて下さい。そうすりや夜も晝もお祈りをしますし、また若い女には耳もかしません。それから死ぬまで惡いこともいたしません。——

メリイ、ダウル(腹を立てゝ)

神様に嘘をおつきでないよ。

マーチン、ダウル

メリイ、ダウルかい。(急に安堵して落付く)メリイ、ダウルかよ。

メリイ、ダウル

少時(しばらく)聞かなかつたが、お前の聲には優しい所があるよ。お前はあたしをモリイ、バーンと間違へてゐるんだらう。

マーチン、ダウル(**メリイ**に近寄り、顔の汗を拭ひながら)

目が見えるなんていふことは妙なもんだ。人を目茶苦茶にしつちまふ。お前をこれまでおつかながつてゐたなんて妙なものだ。だが一寸の間震えたつて俺はすぐ元通りになるよ。

メリイ、ダウル

さうなりや偉いもんだよ。だがそれは嘘ぢやないね。

マーチン、ダウル(少し離れた所にはづかしさうに坐る)

お前も俺と同じやうに盲目だつていふことを聞いたから默つておいで。

メリイ、ダウル

盲目になつたけど、あたしやちつぽけな、色の黑い、馬鹿面の、ずんぐりした男と一緒になつたつていふことは覺えてるよ。それからそいつが、靜に呼吸をしてゐる可哀さうな女のいふことを聞いて、大騒ぎをしたつていふことも今日から覺えてやう。

マーチン、ダウル

それからお前は、少し前、風のちつともない空の晴れた日に、井戸だつたか或は綺麗にすんだ水つ溜だかをのぞいた時、何を見たか覺えてゐるだらう。

メリイ、ダウル

ようく覺えてゐるとも。下の嘘つき野郎の言つた通りぢやないけど、あたしや水溜の中に嬉しいものを見たのを覺えてゐるよ。

再び髪に手をやる。

マーチン、ダウル（皮肉に笑つて）

さうだ。下の方の奴は俺が氣が違つたと吐しやあがるが、俺あそんなことはありやしねえ。……可哀さうに、メリイ、ダウル、お前の顔つきは立派でもなんでもねえが、お前は東の國の宿なし女の中の一番の大氣違だ。

メリイ、ダウル（嘲つて）

お前はしよつちう人の嘘を聞くにいゝ耳を持つてゐるつて言つてたね。いゝ耳だこと。それでお前は今日もまたそれを使ふんだね。

マーチン、ダウル

お前の言つたことが本當にしろ、お前はお前が五十か六十に見える、皺だらけのけちな女でないやうにこの俺に思はせやうつていふんだらう。

メリイ、ダウル

マーチン、さうぢやないよ。（熱心に前に乗り出す）あたしや水溜で自分の姿を見たとき、もうぢき髪の毛が白くなると思つたんだよ。だけどあたしの顔は、柔かい白い髪の毛がまはりに垂れ下がつたら、すてきになると思つたね。あたしや、屹度東の七州に又とないやうな婆になるよ。

マーチン、ダウル（眞に嘆稱して）

お前は拔目のない女だ。メリイ、ダウル、ほんとによ。

メリイ、ダウル（勝ち誇つて）

あたしやほんとにさうだよ。ねえ、綺麗な白い髪の毛の女は見物だらう。キイティ、バウンが下でウヰスキーを賣つてゐると、若い衆が倦きずにキイティの顔を見てゐるつていふからね。

マーチン、ダウル（帽子を脫ぎ、頭を撫で、ためらひながら語る）

メリイ、ダウル、俺の頭がそんなに白くなつたら、お前は俺を見る氣があるかい。

メリイ、ダウル（この上なく輕蔑して）

まあ、お前がかい。……お前の頭はぢきどろぐその中に轉がつてゐる、しなびた蕪菁のやうに禿げつちまふよ。マーチン、ダウル、お前はもう二度と再び、自分の顔が美しいなんていふ必要はない

よ。そんな日はもう何時になつても來ないんだからね。

マーチン、ダウル

ひどいことを言ふ奴だ。だが俺あお前のやうな慰めてくれる人がありや、昔のいゝ日が近づいたやうに考へるよ。そりや確に不思議だ。だがお前が色の白い美しい女で、俺がみすぼらしい奴だと思ふと、俺あぢつとしちやいられねえ。

マーチン、ダウル

あたしにやあお前の顔はどうにもならないよ。マーチン、ダウル。お前の鼠のやうな眼や、大きな耳や、汚い顔は、あたしが拵へたんぢやないんだからね。

マーチン、ダウル（しょげて顎を撫でる。それから喜びに輝く）

お前は抜目のない女だが、たつた一つ氣のつかない所があるぞ。

メリイ、ダウル

お前のよぼ〳〵の足のことかい。鉤のやうな頸のことかい。それともひどく擦れ合つて黑ずんでる膝のことかい。

マーチン、ダウル（得意になつて嘲る）

それが頭のいゝ女の言ふことかい。なるほどな。

メリイ、ダウル、喜ばしさうな**マーチン**の聲に當惑して）

何か眞實のことを言ふかと思ふと自分のことだよ。

マーチン、ダウル（かつとなり、叫ぶ）

メリイ、ダウル、俺の言ひたいのはかうなんだ。俺はぢきに、東の界隈では又と見られないやうな見事な、長い、白い、絹のやうな、光つてるあごひげを生やすんだ。……あゝ、白い頸髯は年寄にはいゝもんだ。立派な人々を立ち止らせ、澤山の銀貨や金貨を出させるにはいゝもんだ。お前は頸髯を生やすことが出來ないんだから默つておいで。

メリイ、ダウル、（元氣よく笑つて）

なるほどね、あたしたちはいゝ夫婦だ。あたしたちはまだ澤山樂しい日を送られるだらう。そして死ぬまでには面白い話も出來るよ。

マーチン、ダウル

有難いことには神樣のお助けで、今日からいゝ時が澤山にある。牧師さんだつて、立派な頸髯の生えたお爺さんの言ふ嘘なら、ほんとにするからな。

メリイ、ダウル

春になると海を越えてやつてきてチュウチュウなく、黃色い鳥が一羽鳴いてる。それにもう陽氣も

暖かになつて來たし、微風がよい香を匂はせるやうになつて來たのだから、こんな時に物の生長する匂や、土を破つて芽の出てくる匂を嗅ぎながら、靜に、のんびりと坐つてゐるのは大層いゝもんだね。

マーチン、ダウル

少し前、俺ははりえにしだの芽をふく匂をかいだ。それから、若しもお前が默つてゐりや、谷間を流れてる水嵩の增した、流れの音に消されてよくは聞えないが、グリーナンの仔羊が鳴いてゐるのが聞えるよ。

メリイ、ダウル（耳を傾ける）

ほんとに仔羊が啼いてるね。それから一哩も向ふの丘の上では、雄鷄と卵を產む牝鷄とが、大變な騷をやつてるね。（彼女はぎよつとする）

マーチン、ダウル

西の方に聞えるのは何だらう。

かすかに鈴の音が聞える。

メリイ、ダウル

風が海の方から吹いて來るんだから、敎會ぢやないね。

マーチン、ダウル（びつくりして）

年をとつた聖者が鈴をならしてゐるんだらう。

メリイ、ダウル

どうぞ神樣、聖者の眼に入りませんやうに。（兩人は耳をすませる）屹度路をやつて來るんだよ。

マーチン、ダウル（試みに）

メリイ、ダウル、逃げやうか？

メリイ、ダウル

何處へ逃げるのだい。

マーチン、ダウル

ぬかるみの間を小路が上へ通つてるんだ。……には、とこの生えてる上の堤へ行きや、いくたり百姓が通らうが誰にもみつかりつこはねえ。だが暫らく眼はあいてたがあすこに行きつけるかしら。

メリイ、ダウル（立ち上がつて）

きつと行けるよ。春だつて、夏だつて、雪が深くつたつて、草や葉が繁つてたつて、路をさがし出すんぢやお前は有名ぢやないかね。

マーチン、ダウル（メリイの手をとつて）

もう少しこつちへお出で。路はこゝからだよ。(二人は破れ目のまはりを手探りする)破れ目に木が入つたぞ。それとも俺がこの前通つてつかからこつち、何か妙なことがあつたのかな。

メリイ、ダウル

枝の下を匍ひづつた方がいゝだらう。

マーチン、ダウル

何うしたらいゝか分らねえで困つたな。お前目が見えるのを怖れてゐても、目が見えなけりや逃げ出すことも出來ねえんだから、盲目つていふものは情けねえもんぢやねえか。

メリイ、ダウル(殆んど泣き出さんばかりに)

眼が見えるなんてほんとに詰らないことだよ。若しも目があいてたら、毎日毛が落ちたり、雨にあたつて汚くなるのが見えるから、あたし達の白い髪の毛もちつともよかないよ。

鈴の音が間近に聞える。

マーチン、ダウル(絶望して)

さあ、やつて來たぞ。だが俺たちは一寸も逃れられねえ。

メリイ、ダウル

教會の西の端に生えてる茨の中には隠れられないかい。

マーチン、ダウル

隠れてみやう。(一寸耳を傾ける)早くしろよ。俺には奴等が森の中を歩いてるのが聞える。

二人は教會の方に手探りで行く。

メリイ、ダウル

森の中に若い娘つ子たちが大騒ぎをする聲が聞えるよ。(二人はくさむらを見つける)マーチン、あたしの左に茨があるよ。あたしは大きくつて見つかり易いから先に入らう。

マーチン、ダウル(心配さうにふり向く)

お前の聲はすぐに知れるよ。だから默つてな。

メリイ、ダウル(體の一部だけ藪の陰にかくれる)

さあ、あたしの傍へお入りよ。(二人脆く。けれどもまだよく見える)マーチン、ダウル、彼奴らにあたし達が見えるかしら。

マーチン、ダウル

俺あ分らねえと思ふが、どうも若い娘つ子達はみんなすばしつこい怖しい眼を持つてゝ、墓の下に隠れてる可哀さうな奴等まで見つけ出すんだから、どうだか分らねえ。

メリイ、ダウル

惡いことをお言ひでないよ。マーチン、ダウル。そんでないと、神樣があたし達をお指差しになるかも知れないよ。

マーチン、ダウル

お前は氣違ひじみたことを言ふなあ。メリイ、ダウル。お前は旨目つて惡いもんだつて聖者樣が仰言つたのを聞いたゞらう。

メリイ、ダウル

若しもさうなら、お前あの水があたし達を治すことが出來なくなるやうな、大袈裟な怖しいことを言つてもいゝよ。

マーチン、ダウル

おつかなくつて顫(ふる)へてる俺に、何うして大袈裟な怖しいことが言へやう。もし又言へたにしろ、今日あいつから俺達を救ふのは、いゝ言葉だか惡い言葉だか誰だつて分りやしねえ。

メリイ、ダウル

來たよ。あたしには石の上を歩いてるのがよく聞えるよ。

聖者晴衣を著た**テイミイ**及び**モリイ、バーン**を伴つて、右手より登場。他の人々は前に同じ

テイミイ

マーチン、ダウルとメリイ、ダウルが、この路に今日おつたと云ふことをわしは聞きました。聖者樣、どうぞあの二人を憐れんでもう一度治して上げて下さい。

聖者

治してやらう。だが何處におるのだ。わしはお前たち二人を教會で結婚させてやると、あとにはもう餘り暇がないのだ。

マツト、サイモン(彼の席から)

あれ達の持つてた燈心草が石の上に散らかつてる。たしかに餘り遠くへは行くまい。

モリイ、バーン(喫驚しながら指さす)

テイミイ、あすこを御覽。

一同指ざした方を見る。すると**マーチン、ダウル**が居る。

テイミイ

なるほど、この日の高いのに横になつてるなんて、マーチンは忘けものだ。(叫びながら近寄る)さあ、起きろよ。マーチン、ダウル。今日眠つてると、お前は大事な折をとり逃しつちまふぞ。……

や、二人共入つてる。

マーチン、ダウル(**メリイ、ダウル**と這ひ上がる)

テイミイ、何の用があつて俺達を靜にさしとかねえんだ。

テイミイ

聖者樣が俺たち二人を結婚させて吳れにいらつしやつたのだ。そこでな、俺はお前たちがもう一度癒して戴けるやうに、聖者樣にお願ひ申したんだ。だから、聖者樣はお前たちを癒して下さるだらう。俺は親切深けえんだから、すこしの間眼が見え、食べてくために働いたお前が又眼が見えなくなつて坐つてゐるのかと思ふと、可哀さうでならねえんだ。

マーチン、ダウル、メリイ、ダウルの手を取り、手探りにて右手に行かうとする。**マーチン**はとうに帽子を失くしてゐる。そして二人共塵にまみれ、草の種におゝはれてゐる。

人々

マーチン、ダウル、路が違ふぞ。こつちだよ。

人々は彼を中央におる**聖者**の前におしやる。**マーチン、ダウル**と**メリイ、ダウル**は、哀れな、みじめな樣をし、絶望して立つ。

聖者

怖がらなくつていゝ。神樣はお惠み深いからな。

マーチン、ダウル

聖者樣、俺達あ怖がつちやゐねえんです。

聖者

神の四人の聖者の泉の水で癒つた人々の中にも、時が經つに從つてもとに復るものが屢々ある。然しわしが再び癒したものは、必ず死ぬまで目が見える。(罐の蓋をとる)水はもう少しつきりしか殘つてゐない。だが神樣のお惠みで、お前たち二人を癒すには充分だらう。さあ、路に脆きなさい。

マーチン、ダウルは、**メリイ、ダウル**と一緒にくるりと向きかはり、逃げ去らうとする。

聖者

今度は敎會に行かなくとも、こゝで脆けばいゝのだ。

テイミイ(**マーチン、ダウル**を向きかへらせながら、怒つて)

マーチン、ダウル、お前は頭が狂つたのかい。こゝへ脆くんだ。聖者樣が今仰言つたのを、お前は聞いておらなかつたのか。

聖者

足元の土は乾いてゐるから脆きなさい。

マーチン、ダウル(困つて)

聖者樣、お前さんはお前さんの仕事をやつて下せえ。俺達は何もお前さんには用はねえんだ。

聖者

わしは懺悔のことも、斷食のことも、一寸も言つてはおらんぞ。神樣はもはや盲目といふよい教訓を、お前にお授けになつたんだからな。お前はわしを怖れることはない。脆きなさい。さうすればわしがお前の眼を見えるやうにしてやる。

マーチン、ダウル（一層困惑して）

聖者樣、俺たちあ目が見えるやうになんて何も頼みやしねえよ。お前さんはお前さんで勝手に歩いて、斷食なりお祈りなり何でも好きなことをさつしやるがいゝ。だが俺たちはこの辻にほつといて呉れ。俺たちにやこれが一番いゝんだから。物が見えるやうになんて俺たちあ頼みやしねえんだ。

聖者（人々に）

癒して貰ひたがりもせず、生きることも、働くことも、世の中の不思議を見ることも願はぬなんて氣でも違つたのか。

マーチン、ダウル

一寸の間に、俺は一人の人が一生かゝつて見る程の澤山の不思議を見たんだ。

聖者（厳しく）

わしは今日まで、地や、人の上に投げかけられた神の御姿を見て、喜ばぬものを見たことはない。

マーチン、ダウル（聲を張り上げて）

聖者樣、そりや立派な見物だ。……俺が目があいて最初に見たものは、血のにぢんでおるお前さんの足だつた。そいつあ神樣の御姿のいゝ見物かも知れねえ。……それから俺が最後に見たものは、お前さんが鍛冶屋のティミイと――可哀さうに――一緒にさせやうつていふ娘つ子の目口から覗いてる地獄の惡魔だつた。それもいゝ見物だらう。それから北風が吹いて空が荒れる時分に、路に馬や驢馬や犬までが頭を垂れ、目をつぶつてゐたのを見たが、それも大した見物ぢやなかつた。――

聖者

だがお前は夏や、麗しい春や、愛蘭の聖者たちが神樣のために作つた、教會のことを聞かなかつたのか。お前は盲目になりたがり、立派な輝いてゐる海や、上の方で擴がつてるはりえにしだが間もなく空に聳え立ち、立派な金の魚籃のやうに山を輝かすのを見たがらぬなんて、氣違ひでない限り誰もそのやうなことは言はぬぞ。

マーチン、ダウル

お前さんはノックやバラヴォアのことを言はつしやるのだね。あゝ、俺達の方がそんなものより遙にいゝ見物を持つてる。たつた今俺はぶつ坐つて、鳥の聲や、蜂が溝の中でぶん〳〵啼くのを聞いた。暖い晩にやいゝ匂が立ち昇るのが嗅げるし、何かが空をすばやく翔けて行く音も聞える。それ

から又心の中で大空を見上げたり、潮を見たり、大きな河や、鋤を入れるにいゝ丘を見たりすることが出來るんだ。

聖者（人々に）

こんなものを相手にしても仕方がない。

モリイ、バーン

聖者様、あいつは怠けもので、ちつとも働きたがらないのですよ。あなたが眼をあけておやりにならぬ前は、何時も目が見えるやうになることを喋つたり、望んだり、欲したりしておつたのですが。

マーチン、ダウル（**モリイ**の方を向いて）

俺は確に目が見えることを憧憬れてた。だが俺はわづかの間に嗅の面と、モリイ、バーン、目に妙な意地の悪いせゝら笑ひをあらはして一人の男をからかつてる、お前の面を見たんだ。

モリイ、バーン

聖者様、あんな奴をお構ひなさいますな。彼奴は少し前にあたしに悪いことを申しました。——結婚したものとしては悪いことを——ですから若しも彼奴の悪い心が盲目に相當してる樣でしたら、盲目で放つておいた方がいゝでせう。

テイミイ（**聖者**に）

聖者様、おとなしい、可哀さうなメリイ、ダウルを癒して上げて下さい。メリイ、ダウルは誰をも傷けませんし、又マーチン、ダウルと喧嘩をする時か、下の若い娘つ子に揶揄はれる時の他は、何にも悪口をつきません。

聖者（**メリイ、ダウル**に）

メリイ、お前に癒して貰ひたい氣があるならわしの足元に脆きなさい。脆いたらわしはもう一度、お前の目を見えるやうにして上げやう。

マーチン、ダウル（更にはげしく挑みかゝる）

それはいかねえ。お前さんは彼女に俺を見さして、死ぬ時までこの俺に辛い言葉を聞かせやうつて言ふのかね。

聖者（厳しく）

若しもメリイに目をあけて貰ひたい心があるのなら、わしはお前なんかに邪魔はさせぬ。（メリイ、ダウルに）さあ、脆かないか。

メリイ、ダウル（疑はしげに）

聖者様、あたし達には構はないで下さい。あたし達はぢきにまた、幸福な盲目だつて評判になるでせう。あたし達は何の心配もなく、路で五厘錢を貰つて樂に暮して行けるのです。

モリイ、バーン

メリイ、ダウル、大馬鹿者になるのはおよしよ。脆いて目をあけて貰つたらいゝぢやないの。彼奴はそれが好きなら、こゝに坐らせて、五厘錢などを貰はしとけばいゝでせう。

テイミイ

ほんとうだよ。メリイ、ダウル。若しお前がすき好んで盲目でゐるんなら、この土地のものは誰一人、お前に仕事もさせてやらなければ、少しの肉も、又暮しに必要なものは何一つやりやしないよ。

マツト、サイモン

メリイ、ダウル、お前目が見えりや、彼奴と一緒にあつちこつち歩くことも出來るし、著物も縫つてやれりや、他の女が彼奴の傍へ來ないやうに見張りも出來るぢやないか。

メリイ、ダウル（半ば說き伏せられて）

それもさうだねえ——

聖者

脆けよ。わしは結婚をさせてやつたり、日の暮れぬ中に出發するので忙しいのだから。

人々

メリイ、聖者樣があゝ仰言つて下さるんだから脆けよ。

メリイ、ダウル（不安さうに**マーチン、ダウル**の方を見て）

みんなの言ふことはもつともだね。聖者樣、あなたがさう仰言るのなら脆きませう。

メリイ、ダウル脆く。**聖者**帽子をとつて傍のものに渡す。一同帽子を脱ぐ。**聖者**は**マーチン、ダウル**から**メリイ、ダウル**の手を放させやうと、一歩前に進み出る。

聖者（**マーチン、ダウル**に）

さあ、退いて呉れ。わしはお前には用はないのだ。

マーチン、ダウル（荒々しく聖者を押しやり、左手を**メリイ、ダウル**の肩に當てゝ立ち上がり）

退いてくれ、聖者さん。それから嗅の盲目を治して俺の慰めを奪ひ取つて呉れるな。……一體お前さんは何の用があつて夫婦の間にたち入るんだい。——少しも知らないくせによ、——それから又何でお前さんはお前さんの持つてる、有難い水やお祈りで大騒ぎをするんだい。後生だからさつさと行つてくれ。そしてこのまゝ俺たちは路の上にほつといてくれ。

聖者

若しも目明きがわしにそんなことを言はうものなら、わしはそいつの魂が地獄に落ちるまで呪ふだらう。だがお前は哀れな盲人だ。だからわしは氣にかけまい。（鑵を取り上げる）さあ、わしがお前

の妻に恵みを與へてやるのだから退いてくれ。若しも自分で退かなけりや、傍に立つてる者がお前を退かすだらう。

マーチン、ダウル(**メリイ、ダウル**を引っぱって)

さあ、お出で。そしてあんな者には構ふんでないよ。

聖者(人々に、横柄に)

あの男を捕へて路傍に推し倒せ。

二三人のもの。**マーチン、ダウル**を捉へる。

マーチン、ダウル(**腕**きながら叫ぶ)

聖者さん、奴等を追つ拂つて下さい。そうすりや、お前さんが今日嗅の目を癒さうと何うしやうと構ひません。

聖者(人々に)

放してやれ。氣がついたら放してやれ。

マーチン、ダウル(ふりほどき、**メリイ、ダウル**を求める。**聲をひくめ、まことらしい泣き聲で**)

聖者様、あれを癒してやつて下さい。わしは止めやしません。彼女はお前さんの顔を見て大喜びをするでせう。——それからどうか彼女が嘘をついたら分るやうに、又朝から晩まで神様のお仕へ人

が見られるやうに、彼女と一緒にわしも癒して下さい。

マーチン、ダウル、メリイ、ダウルの少し前に脆く。

聖者(半ば人々に向つて話す)

永らくの盲目で、頭の中で妙なことを考へてゐるものは、わしらのやうに毎日働いたり、祈つたりして暮してゐる質樸な人間とは違ふのだ。だから若しもお前が最後に本心に復つたなら、わしは神様の思召に從つてお前を癒してやらう。それから今日お前がわしに言つた惡口も氣にかけまい。

マーチン、ダウル(熱心に聞いてゐる)

そんなら聖者様、わしは待つてますよ。

聖者(片手に罐を持ち、**マーチン、ダウル**の傍で)

神様の四人の聖者の墓からもたらしたこの有難い水の力で、わしがお前の目に注ぐこの水の功德で

——

聖者罐を高く上げる。

マーチン、ダウル(急に身を躍らせて罐を**聖者**の手から叩き落し、舞臺を横切つて罐を投げる。**マーチン**は立ち上がる。人にはがやゝと騒ぎ立てる)

俺は可哀さうな盲目の罪深い人間だが、耳はよく聞える。お前さんの持つてる罐の水がはねかへつて、

音をたてたのが俺には聞えたんだ。聖者さん、さあ行つちまひねえ。お前さんは聖者様かも知れねえが、お前さんが思ふよりもつと盲目にや考へがあるんだ。もつと力があるんだ。さあ疲れた足と痕のついた膝で、大かな頭と痩せた情ない腕が殘るばかりの斷食や有難い眞似をして歩かつしやい。(聖者は暫くマーチンを嚴しく見詰める。それからふり返つて鑵を拾ひ上げる。マーチン、ダウルはメリイ、ダウルを引き起す)もしお前方のうちで、誰かが鍛冶屋のテイミイのやうに汗を流して働くのがいゝなら、またお前さんのやうに斷食をしたり、お祈りをしたり、神様のお話をしていゝなら、俺たちだつて盲目のまゝ路傍にぶつゝはつて、そよ風が春の木の葉をひるがへすのを聞き、太陽にあたり、曇つた日や、お上人様たちや、世の中を歩き廻つてる人間の汚い足を見て俺たちの魂を傷つけねえのが、何んなにいゝことかも知れやしねえ。

マーチン、ダウル、メリイ、ダウルと石の方に手探りで行く。

マツト、サイモン

こんな奴をグリーナンの町に俺たちと一緒に住はせておくのは、不幸なまた恐しいことだ。聖者様、彼奴のお蔭であたし達が神様から呪はれるやうなことはありませんでせうか。

聖者(帶を結びながら)

神は大なる憐みを持つてゐられる。しかし罪あるものにはお怒りなされる。

人々

さつさと行つちまへ。マーチン、ダウル、こゝから行つちまへ。お前のために、神様が大暴風や旱を起さないやうにして呉れ。

四五人のもの**マーチン**に何か投げる。

マーチン、ダウル(挑むやうにふりかへり、石を拾ひあげる)

さあ、退かねえか。この啼き蟲め。俺のたゝきつける石に當つて、大勢頭から血を出すな。さあ、退け。だが心配するな。俺たち二人は南の町へ行つちまふから。南の町の人々は、俺達に親切な言葉をかけて呉れるだらう。俺たちはいやな顔や、人々の悪さを強いて見たくはないんだ。(再びメリイ、ダウルの手をとる)さあ、行かう。南の方へ歩いて行かう。こゝにゐる奴等は見過ぎる程たんと見た。それに彼奴らと一緒に住んでゐたつて、また朝の暗いうちから日の暮れるまで彼奴らの嘘をつくのを聞いてゐたつて、一寸も面白かねえ。

メリイ、ダウル(元氣なく)

遠い所だつていふけど行つた方がいゝだらう。そこでは右にも左にも濕つた沼のある間を歩き、北風が後から吹きつける、石だらけな路を歩くんだつていふことだけど。(兩人退場す)

テイミイ

南へ行く時にや、石を跳び越えて行く深い河が澤山にあつて、どれもこれも水が溢れてゐるから、彼奴らは二人共屹度ぢきに溺れて死んぢまふだらう。

聖者

あれたちは勝手に運をとつたのだ。神よ彼等を憐み給へ。(鈴を鳴らす)さあ、お前たち二人、教會に來るがいゝ。モリイ、バーンに鍛冶屋のテイミイ、わしはお前たち二人に結婚させてやるから。それからわしはお前方すべてにも祝福を與へやう。

聖者教會の方を向く、行列をつくる。一同が靜に教會に入ると共に幕おりる。

鑄掛屋の結婚

人物

マイケル、バーン 鑄掛屋
メリイ、バーン 老婆、その母
サーラ、ケイシイ 鑄掛屋仲間の若い女
牧師

場所

黃昏後の一村の路傍。

第一幕

黃昏後の一村の路傍。稍右手の溝近くに、薪の火が燃えてゐる。**マイケル**その火の傍で仕事をしてゐる。左手の背景には垣根があり、その上には天幕の如きものと、襤褸々々な著物が乾してある。右手には禮

拜堂の門が見える。

サーラ、ケイシイ(右手より入り來る。熱心に)

マイケル、バーン、此處で牧師さんに會はう。あの人が家に歸る時にね。

マイケル(顏を顰めて)

そいつあお有難い仕合せだ

サーラ(鋭く)

だけど、あたしの結婚の指環が出來てゐなけりや、仕合せぢやないよ。(マイケルの側に行く)もう直き出來るのかい。それとも未だどの位かゝるんだい。

マイケル

僅かしか出來ちやゐないよ。サーラ、ケイシイ。指環を拵らへるなあ惡魔の仕事だ。それにお前俺の手は駄目になつちやつて、夜明けまでにやブリキの鑵一つ出來ねえやうになるかも知れねえ。

サーラ(**マイケル**の傍に坐り、薪を火の中に投げ入れる)

惡魔の仕事なら氣をおつけよ。そして馬鹿の息の根を止めるやうな話はお止めよ。

マイケル(靜に、むつゝりして)

お前が馬鹿つ話をするんだ。サーラ、ケイシイ。今日までお前のやうな嘘つ話を聞いた者あ誰もあ

りやしめえ。手前は長いこと俺と一緒にほつつき歩いて、始終馬鹿な話を始めちやあ、その後で結婚の話を持出して、とうとうこの俺をそこまで押しつけやがつた。俺は何にも頼みやしねえんだ。

サーラは**マイケル**の方に背を向けて、溝の中で何か片付けてゐる。

マイケル(怒つて)

やい、何とか返事をしろよ。月が變つてつからお前は何うかしたのかつて、俺あ聞いてゐるんだ。

サーラ(考へながら)

あたしや何うもしやしないよ。だけど春つて妙な時でね、あたしや時々妙なことを考へるよ。

マイケル

餘り有難かないことを考へるなあよかないよ。サーラ、ケイシイ。だけど今夜俺を牧師さんの所へ引つ張つてつて、お前にどんな得がつくんだい。なあ、夜が明けりや又他のことを考へる癖に。

サーラ(いぢめるやうに)

朝になりやヂブラデンからタラの丘までほつゝき歩いて、金子　鑄掛屋さ　の所へ行きたいものだと考へてゐるのさ。上つたり下つたりしてお前の背が痛めるやうな丘のない所で、若いジョンチング、ヂムと馬車を走らすのはいゝもんだよ。

マイケル(仰天して)

お前の考へさうなこつた！

サーラ

さうだよ。マイケル、バーン。お太陽様が少し當つて風が暖かになり、お前の頭の上にある茨の木から、いゝ匂ひが漂ふ頃になるとね。

マイケル（恐怖にかられて暫く**サーラ**を見詰めてゐたが、やがて彼女に指環を渡す）

今度は合ふかね。

サーラ（舐めてみて）

堅いよ。それにブリキの端が鋭すぎるよ。

マイケル（注意深く見ながら）

お前の指が太えんだ。サーラ、ケイシイ。もう一邊言ふが、俺と結婚してえの、俺を捨てゝ逃げてえのとぬかしやあがつて、まつたく氣違ひ沙汰ぢやねえか。それでも手前は結構太つて丈夫でゐやがる。

サーラ（指環を返す）

今度は合はしておくれ。氣をつけて壓し潰さないやうにすれば好いんだよ。

マイケル（不興げに又仕事を始める）

氣を附けろつて口で言ふなあ譯あねえ。サーラ、ケイシイ。何でも口で言ふなあ造作ねえからな。馬鹿だつて何か言ひ出すから驚くだらう。（劇しく飛び上がる）畜生！氣を附けろい。あゝ、又火傷しちやつた！

サーラ（馬鹿にして）

火傷したつて？お前は今夜にだらしがないねえ。マイケル、バーン。（聲を張り上げて）さあ、お急ぎよ。じやないと婆あがビールをさげてやつて來るよ。

マイケル（挑むやうに聲を高めて）

急げつて？急いでお前をぶん毆るぞ。お前にやそれが入用なんだからなあ。俺は今ラスバンナでお前と馴染になつた日のことを考へてるんだ。お前は泣き出して仕舞つたつけ。俺達ちや丘から下りて行く所だつた。お前は泣きながら「かあちやんの所へ歸えるんだ」つて言やあがつた。俺あその時お前の後へくつゝいてつて、お前の耳つ朶をどやしつけてやつたつけ。それからこつちお前は今日まで隨分おとなしくこの俺についてきたなあ。

サーラ（立ち上がつて、薪を火の中に入れてしまふ）

多分あたしも大馬鹿者だつたのさ。だけど翌日はバリナクラシでジョンチング、ヂムに會へるよ。あの人はウィックロウの馬市で白馬を好い値に賣つたから、そのお金を使ひ散して歩く所は好い見

物だらう。あの人は馬にも拔目がないが、女にかけても拔目がないよ。

マイケル（じれつたさうに仕事をしながら）

惡魔が馬と女を彼奴に與へて、勝手な眞似を爲せるんだらう。

サーラ（灰を足で蹴りながら）

あの人は立派な若者だよ。だからあの人に會ふのは幸福な、又自慢なことなのさ。あの人はね、一番先にあたしのことをバリナクリーの美人て呼んだんだよ。女にはいゝ名だねえ。

マイケル（輕蔑して）

アークロウで競爭させる馬につけるやうな名だ。サーラ、ケイシイ、お前を喜ばせるなあ譯はねえ。大きなことを言ふか、嘘つきが大法螺を吹きやお前はすぐ喜ぶよ。

サーラ

嘘つきだつて！

マイケル

さうだ、嘘つきだとも

サーラ（怒つて）

嘘つきだつて？マルアの谷に沿ふて十哩も巡査があたしに從いて來て、暗い闇の夜に戀を打ち明けた話を、お前は聞いたことがないのかい。それから學校歸りの子供が、「今日はサーラ、ケイシイに會つたぞ。バリナクリーの美人にな。ほんとに素敵だ」つて互に言ひ合つてゐるのを、お前は聞いたことがないのかい。

マイケル

神樣、奴等をお救ひ下せえ。

サーラ

二三週間も經ちやお前が神樣のお救を乞ふやうになるよ。眞暗な晩にお前が眼を覺して、あたしが太陽に照されながら、ジョンチング、ヂムの荷馬車の後に乘つかつて行くさまを考へるとね。そんな晩にやお前が寢床にする溝は淋しくつて冷いだらう。それにあの婆あは大きな聲で寢言を言ふし、樹の間では蝙蝠がキイキイ鳴くよ。

マイケル

シーツ、誰かやつて來たやうだぞ。

サーラ（右手を見て）

お醫者さん所から誰か出て來るんだよ。

マイケル

牧師の奴あしよつちう彼處で、夜の明けるまでカルタを取つたり、酒を飲んだり、歌を唄つたりしてゐやがる。

サーラ

大股で歩いて、ノバのやうな聲を出す大法螺吹きさ。あの人に違ひない。指環が出來上がつてるりや、牧師さんの一杯機嫌のとこを巧くやつちまふんだがね。

マイケル（彼女の側に行き、指環を渡しながら）

さ、指環を渡すよ。サーラ、ケイシイ。だが牧師さんは素通りしちやつて、俺たちにや話しかけちや呉れめえ。

サーラ（有頂天になつて身のまはりを整へる）

こゝへ坐つて、もつと火をおゝこしよ。牧師さんにあたしの顔が見えるやうにさ。そしてお前は働いてる樣に見せかけるんだよ。あの人達は働く話をするのが大好きなんだから。

マイケル（むつゝりしながら、坐つてブリキの鑵を作り始める）

ほんとに大好きだ。

サーラ（熱心に）

さあ、どんどと火をお熾しよ。マイケル、バーン。

牧師右手より登場。サーラ彼の前に行く。

サーラ（作聲で）

牧師さん、今晩は。ほんとにいゝ晩ですねえ。

牧師

えつ！一體お前は何ういつた女なんだ。

サーラ

あたしやサーラ、ケイシイですよ。牧師さん。バリナクリーの美人ですよ。それから下の溝にゐるのがマイケル、バーンなのです。

牧師

あゝ、聖い夫婦かね。さあ、そこを退いておくれ。

サーラ（牧師の前に立ち塞がつて）

あなたに少しお願ひしたいことがあるのですよ。

牧師

半片もないよ。さあ、退いておくれ。

サーラ

半片くれつて言ふんぢやありませんよ。牧師さん。あたし達は結婚がしたいんですの。そしてあなたなら半片も出さなくつても、結婚させて戴けると思ふの。あなたは親切ですからね。牧師さん、あなたは貧乏人には親切ね。

牧師（驚いて）

たゞでお前たちを結婚させるんだつて？

サーラ

さうよ、牧師さん。そしてあなたなら指環代に銀貨一枚位戴けると思ふのよ。

牧師（大聲で）

喋るな。默つとれ。サーラ、ケイシイ。わしはお前たちに遣るやうな金は一文も持たん。結婚したけりや一磅（ポンド）拂ひなさい。たつた一磅でやつてやらう。それでもこゝに住んでる、わしらと同じ身分の者にしてやるよりは餘程安いんだ。

サーラ

牧師さん、何處であたし達のやうなものが、一磅儲けることが出來ませう。

牧師

驢馬を賣るか、鑵を作るか、ウィックロウ、ウエックスフォード、ミース郡を盗み歩けば、わけはないだらう。（行き過ぎやうとする）退いとくれ。そしてこれ以上わしを苦しめてくれるな。

サーラ（ポケットから金を取り出して、頼むやうに）

牧師さん、少しは可哀さうだと思つて下さらないんですか。（金を出して）半ソベリンで結婚させては戴けませんか。今の王様のお母さんの顔がついてる、キラ〳〵光つたお金でね。

牧師

十志あるなら、同じやうにしてもう十志持つて來なさい。さうすりやお前たちを結婚させてやらう。

サーラ（泣き聲で）

牧師さん、二年か〻つてやつとそれだけ溜たのよ。一片（ペニー）、半片、餘分の三片を溜めたんですのよ。それだのに若しも今あなたがあたし達を結婚させて呉れなければ、宿（やど）と喉の渇き切つてる婆あとが、翌日（あす）市場で飲んでしまふでせう。（前掛を眼にあて〻、半ば泣きながら）さうすればあたしは二度と再び、結婚することが出來ないんですのよ。あたしは婆あになるまで、「貧乏人に生れるのは情ない悪いこと」だつて言ひ暮しませう。

牧師（火の方に向き直つて）

泣くんぢやない。セーラ、ケイシイ。お前は一生涯宿なしでほつ〻き廻つてゐる癖に、そんなことで泣くなんて奇妙な女だなあ。

サーラ

牧師さん、その金貨を得るにや二年もかゝつたんですよ。それだのにあなたはそれ丈のお金で、今あたし達を結婚させてはくれないのね。あたし達のやうな貧乏な勞働者は、暗い晩に鑵を拵へ、そして薪から出て黑い烟で眼を痛めてしまふんですよ。

老婆の黴醉機嫌で歌を唄ふ聲が左手に聞える。

牧師（**マイケル**の作つてゐる鑵を見ながら）

マイケル、バーン、その鑵は何時出來上がるんだい。

マイケル

もう一寸で出來上かるんでさ、牧師さん。最後のハンダを叩きつけてるとこです。

牧師

サーラ、ケイシイ、今の十志とそのガロン鑵と一緒に、一クラウン持つておいで。さうすりやお前を結婚させてやらう。

メリイ（突然後で黴醉機嫌に叫ぶ）

ラリイは美男だつたよ。眞實にさ。ラリイは美男だつたよ。サーラ、ケイシイ——

マイケル

シーツ、さあ、二人共、俺の阿母がやつて來る。彼女はしこたま飲んでゐるから、こんな話を聞かうもんなら、俺たちをどんな目に會はせるかしれやしねえ。

メリイ（唄ひながら出で來る）

人に惜しまれずに首を吊つた時
人々がどんな風に死にたいかと尋ねたら、ラリイが言ふにや、
坊んさんの初めて見たものを、ぽんとにわしはようくみた。

サーラ

さあ、酒德利をおくれ。溝の中へ零して仕舞ふといけないから。

メリイ（兩手で德利を持つて、傲然たる聲で）

お構ひでないよ。サーラ、ケイシイ。いゝかね、あたしや零しやしないから。ねえ、あたしがジエミイ、ネイルの店から、長い道程をずつと兩手でそれを抱へて來て晩くなつたからつて、それで緣まで泡が一杯になつてると思ふのかい。

マイケル（心配さうに）

一啜り位ひ殘つてるかしら。

サーラ（德利を覗き込んで）

ほんの一雫しかないね。

メリイ(**牧師**を見、徳利を彼の方に差し出す)

あゝ、あたしや今上等のお酒を持つて來たんだよ。さあ、牧師さん、お飲みよ。いつもお前はよく喉が渇いてるぢやないかね。ほんとにさ。それに今夜はひどく渇く晩だね。

メリイ牧師の方に行からとする。**サーラ**後から**メリイ**を引め止める。

牧師(手を振つて彼女を遠退けながら)

火の中へ落ちるよ。さあ退いた。

メリイ(言葉巧みに)

牧師さん、あたし達とお友達になるのを避けなさんなよ。みんな罪のあるもんだからね。神様、あたし達をお憐れみ下さい。さあ、一杯お飲みよ。あたし達はお裁きの日まで、お前さんが飲んだなんて決して言やしないから。

メリイ錫の杯を出し、それに少し酒を注いで**牧師**に差し出す。

メリイ(片手に徳利を持ちながら唄ふ)

寂しいバリガンの溝で
十ペニー鑵をたゝく日に

寂しいバリダフの土手で——

メリイ中途で唄ひ止める。

悪い嫌な歌だねえ。サーラ、ケイシイ。さあ、あたしを溝の中へ入れて寢かしておくれ。さうすりや彼奴が行つちまふまで唄やしないから。いゝかい、彼奴はあたし達が悪くしてやらなくつても、もうすつかり悪いんだよ。

サーラ(**メリイ**を溝の中に下ろしながら、微笑を浮べて牧師に)

牧師さん、氣におかけでないよ。飲んだら恥を知らない女なんだからね。たとへ羅馬から法王樣がお出でになつたつて、徳利から自分の杯に酒を一杯ついで法王樣に差し出し、あんたに言つた通りのことを言ふんですよ。

メリイ(**牧師**に)

教父さん、飲んでおくれ。いゝかね、さあ飲んでおくれ。ね、飲まないなんて仰言るなよ。天に昇れば澤山にお酒を持つてあんたぢやないかね。

牧師(諦めて)

よし、ぢやお前の健康を祝さう。神よ、我等を守り給へ。(飲む)

メリイ

それでいゝ。牧師さん、神樣があんたをお守り下さるだらう。あんたがさうやつて坐つて、高ぶらずにあたし達のやうなものと一緒に一杯飲むなんて、大したものだね。あたし達はね、何處を探したつて二人とない貧乏人で、落ぶれもんで、空つ腹の畜生なんだよ。

牧師

お前たちは空つ腹でもなあ、渴いた時に飲み、足の强張つた時に寢られるんだから、仕合せなこつたとわしは思ふよ。(陰氣くさく溜息をする)お前たちが、口が乾からびてゐる時に彌散を言ひ、西や東に走り廻つて病人を尋ね、田舍の者の罪を告げるのを聞くこのわしだつたらどうするだらう。

メリイ(同情して)

天氣の好い春の日に、田舍の人の罪を聞くのはたまらないね。

牧師(絕望して)

詰らない生活だよ。メリイ、バーン、詰らない生活だよ。夜が明けりや僧正が來る。僧正さんは、お前たちがやつてることを一事でも見やうものなら、お前たちを呪ふやうな老人なんだ。

メリイ(非常に同情して)

牧師さん、あんたがそんなことを言つたり、溜息をついたりするのを聞くと、あたしの胸は張り裂けさうだよ。(牧師の膝を輕く叩く)あんたが貧乏で獨身であつても、あたしが夜が明けるまで歌を唄つて上げるから元氣をお出しよ。

牧師(メリイを制して)

お前の歌なんぞ聞いたつて仕樣がない。お前は間もなく死ぬんだから、兩膝をついて神樣にお祈りでも上げるがいゝ。

メリイ

あたしにお祈りが要るんなら、あんたはお祈りをしてもいゝよ。牧師さん。あたし達はお祈りなんて爲たことがないんだからね。だがお祈りの要るのはお前さんだつて皆が言つてるのを、あたしや幾度も聞いたよ。牧師さん、さあおやりよ。あたしや世間を歩き廻つて妙しい話を澤山に聞いたけど、たつた一つ眞實の牧師さんがお祈りをやるのを聞いたことがないよ。

牧師

こいつは驚いた！

メリイ

敎父さん、嘘ぢやないよ。あたしや始終お百姓さんたちが寢る前に變な聲を出すのを聞くが、あんな奴等にや誰もかまやしないよ。然しあんたのやうな學問のある方が、天におる尊いお方とラテン

語で話をするのを聞くのは、大したもんだらうね。

牧師(氣を惡くして)

默れよ、メリイ、バーン。お前は年寄の空恐ろしい異教徒だ。わしはもう一刻もお前たちと一緒にはおられれん。(立ち上がる)

メリイ

牧師さん、お祈りをしてつから行つとくれ。一寸でもお祈りをする迄ね。さうすりやあんたの爲に祈つて上げて、德利の中に殘つてるお酒も上げるよ。

牧師(ふりもいで)

行かして呉れ、メリイ、バーン。憎いの何のつて二十二年間こゝにゐるが、お前のやうな奴に出合つたことはない。

メリイ(無邪氣に)

ほんとかね。

牧師

あゝ、ほんとだ。

牧師左手に行く。**サーラ**その後を追ひかけて行く。

サーラ(低い聲で)

教父さん、あたしの頼をいつきいて下さるの。あなたは屹度して下さるでせう。そしてこのあたしを、あの婆あみたいな業突張の異教徒にはさせないでせう。

メリイ(金切聲で呼ぶ)

此處へお歸へり。サーラ、ケイシィ。神樣の見ていらつしやる所で、あんな奴とひそ〳〵話をおしでないよ。

サーラ(牧師に)

あれが聞えて、牧師さん。ほんとに彼女は年寄の空恐しい異教徒ですよ。世の中を目茶苦茶にしてしまふつていふのも、嘘ぢやないでせう。

牧師(退場しながら、**サーラ**に)

よし、ではわしは朝早く禮拜堂に來やう。わしの通るのを見たら、直きにあの金貨と、ブリキの鑵とを持つてやつて來なさい。わしはその二つでお前たちを結婚させてやらう。情ない額だが、お前をあのやうな年寄の業突張な異教徒にさせるのが辛いからなあ。

セーラ(**牧師**の後を追ふて退場)

有難ふ、牧師さん。神樣、今日から牧師さんに惠を與へ、幸福を與へ、そして牧師さんをお守り下

さい。

メリイ(**マイケル**を肘で輕く衝きながら)
あれを見たかい。マイケル、バーン。月が變つてからこつち、彼女がそは〳〵してるつてあたしやお前に言つたゞらう。嫁入りのことを下らなく騒いで、路傍で誰や彼やとひそ〳〵話をしてるんだよ。

マイケル
もう默つた。そんでないと彼女が歸つて來て、お前の頭をぶつ敲くぜ。

メリイ
あゝ、今夜は嫌な晩だ。いくら空が晴れていたつてね。あたしや若い時分、あんな奴とひそ〳〵話をする所を、たゞの一度だつてお前に見せたことはなかつたよ。あゝ、彼女は世界の何處を歩いたつて見られない空恐しい老ほれだ。(セーラ急いで戻つて來る)

メリイ(**サーラ**を呼びかけながら)
上で何をひそ〳〵喋つてるたんだい。

サーラ(嬉しさうに)
おやすみよ。もう默つてね。

サーラ、**マイケル**と囁く。

メリイ(一本の藁と一端に煙管を探り出して唄ふ)
あの女は一人の男とさゝやいた。
あの女は二人の男とさゝやいた——

咳のために唄ひ止める。

サーラ、ケイシイ、もう歌を唄ふ聲も出やしないよ。(煙草に火をつける)お前は浮氣者だが好い女だねえ。鐘掛屋さんの華で、ウイックロウの自慢者、バリナクリーの別嬪さんだ。春が樹の間に來てるんだから、あたしやお前をこんな晩に、暗い溝ん中で寂しく眠らせたくはないよ。さあ、そこの大きな樹の枝に腰をおかけ。そうすりやダンダルクからバリナクリーまで、何處へ行つたつて聞かれない面白い話を聞かして上げるよ。どれもこれも始めつから終ひまで色んな相手を拵へる、偉い女王さんの話だよ。そしてどの女王さんもみんな晝間はぴか〳〵する絹の著物を著、夜になると白い肌衣を著てるんだよ。

マイケル(ブリキの鑵を片手に持つて立ち上がりながら)
さあ、おねよ。そしてもう俺たちの邪魔をするんぢやないよ。

メリイ(睡つたさうに仰向けに寝ながら)

あれの言ふことなんぞを聞くんぢやないよ。サーラ、ケイシイ。さあ、腰をおかけ。お前のやうな女に、春きかせるに好い話をしてきかせて上げるから。

サーラ(**マイケル**から鑵を受け取り、それを布切で包みながら)

こうしておきやあ、夜露で錆びるやうなことはないよ。明日の朝すぐ出せるやうに、溝の中にしまつておかう。さあこれでこつちの方は片附いたよ。マイケル、バーン、あたしもこれからお前と一緒に、テイム、フライティの鶏をせしめに行かう。

サーラ鑵を溝の中に置く。

メリイ(睡つたさうに)

愛蘭の偉い女王様の素敵な話があるよ。サーラ、ケイシイの様な白い頸を持つてゐて、サーラ、ケイシイがお前をぴつしやり打つやうにぴつしやり打つ、手附の好い女王様の話なんだよ。

サーラ(左手の方で手招をしながら)

マイケル、バーンお出でよ。あれが寝てゐる間にさ。

マイケル左手に行く。**メリイ**二人の行くのを見、俄に身を起して這ふ。

メリイ(哀れつぽく)

何處へ行くんだい。こゝへ歸んなよ。ねえ、こんな好い晩にあたしを一人ぼつちにしてお出でゞないよ。

サーラ

べちやくちや喋つて、人さんをお起しでないよ。あたし達はこれから後の森を抜けて、井戸の上の奏皮(ミネロコ)の木にとまつてる、テイム、フラハティの鶏を二羽盗みに行く所なんだからね。

メリイ

あたしを一人ぼつちにしてかい。こゝへお歸りよ。サーラ、ケイシイ、ね、お歸りよ。だけどね、若しも何うしても行かなきやならないんなら、銅貨を二枚ばかし置いてつておくれ。少し歩いて寝酒が一杯飲めるやうにね。

サーラ

お前は飲み過ぎてるよ。のび〳〵と横になつてゆつくりと寝ておいで。それが女の出來る一番いゝことなんだからね。それにお前みたいな酔つぱらひの邪教徒にゝさ。

サーラと**マイケル**は左手より退場す。

メリイ(靜に立ち上がつて)

あいつらは行つちまつた。あたしの足は燈心草で打たれても倒れて仕舞ふ程弱つてる。おまけにあ

たしの頭ん中は、岩の間を流れ走る川か、雨の降る音でも聞いてる時のやうにがんがん音がしてる。(鑵を布切で包んでしまつてある溝の所に行き、鑵を下ろす)あゝ、何て今夜はつまらない晩だらう。いくら面白い話を知つてたつて、死にかゝつてえらく怯えてゐる女の子か、寒い晩に腹が減つて眠られないちつちやな小供の他には、老ほれ女には耳を貸さうていふものが一人もないのだから仕方がないさ。(包の中から鑵を取り出し、その代りに三本の空徳利と、藥とを入れて縛る)若い間はもう僅かなんだから、あの二人は歩き廻つたつていゝんだらう。だけど若しあいつらが出歩くのがいゝんなら、このメリイ、バーンにだつてたんと飲ましてもいゝんだよ。夜は好いし、空には淋しい月が出てゐるんだからね。(鑵を取り上げ、包を溝の中に戻す)ジエミイ、ネイルはいゝ若い衆だ。だからこの鑵を持つて行きやたんと飲ましてやれるだらう。明日の朝、市場で最初のつけ値をする間お巡査さんの側にゐりや、あの女だつてあたしを打ちやあしまい。よしんば打たれたつて、いゝ晩一人ぼつちで坐つて、犬の吠えるのや、蝙蝠のキーキー啼くのを聞いたり、直にお目出たくなるなんて言はれるよりはまだましだよ。

「**ラリイ**のお死刑になつた前の夜」と唄ひながら退場。

(幕)

第二幕

前景に同じ。早朝。**サーラ**は古いバケツで顔を洗つてゐる。それから髪を編む。**マイケル**も亦身繕ひをしてゐる。**メリイ**、**バーン**は溝に倚つて熟睡してゐる。

サーラ(上機嫌で**マイケル**に)
さあ、彼處の包の所へ行つて御覽。お前の頸に卷く赤いハンケチがあるよ。青いのはあたしのだよ。

マイケル(二つ手に取りながら)
こんなものに金ばかりかけてやがる。なにしろ今度はえれえ散財さ。そして一文にもなりやしねえんだ。(ハンケチを持つて)この二つかい。

サーラ
さうだよ。マイケル。(一つの方を取る)さあ、これを頸にお卷きよ。それから教會に入つて行く時にや、忘れずに帽子を取るんだよ。二度目の男と結婚した下のビッディ、フリンに訊いたら、こんな風にするんだつてさ。

メリイ次伸をし、寢返りを打つ。

サーラ(心配さうに)

あゝ、起きるよ。あれの知らない間に仕事をしやうと思つてゐたんだが。

マイケル

今に怒鳴るだらう。そして大馬鹿者だといつて、俺達をからかふに違えねえ。

サーラ

もう一度寢かさう。それでなきや、どうにかして邪魔をさせねやうにしやう。あいつは罰あたりな言葉で牧師さんを怒らしつちまふやうな、悪魔のお弟子なんだからね。

メリイ(眼を覺して起き上がり、物珍しさうに二人を眺めながら、穏かに)

サーラ、ケイシイ。偉えものを附けてるなあ。それにお前顔なんぞ洗つたりして、今日は大層な騒ぎだね。あたしや鐵鎚の音を聞き馴れてるから耳にや入らないが、お前が顔を洗ふなんて珍しいこつた。それにお前たちがあたしより先に起きて、あたしを日向でぐつすり寢かして置くなんて。

メリイ注意深く繰をかくした包の方を見廻はす。

サーラ(眠すやうに)

もつと寢といで。メリイ、バーン。あたし達が市に出かける迄には、まだかなり時間があるんだからね。

メリイ(疑つて)

馬鹿にお世辭がいゝなあ。サーラ、ケイシイ。だが寢ることも好いことだらうが、こんな日にや起きてることも好いことだよ。太陽は暖かだし、それに風もあたゝかいし、ほとゝぎすが丘の上で鳴いてるからねえ。

サーラ

そんなに氣持がよけりや、下へ行つて、早くから市場に馬車で行く金持の旦那から、半片の銅貨を二三枚も貰つておいで。

メリイ

朝早くつから馬車で乘り廻すやうな金持は、氣が變になつてるんだよ。だから彼奴等のくれるものは悪口かお小言ばかしさ。

サーラ(癇癪を起して怒鳴り始める)

乞食もいやや、寢るのもいやなら、こゝぢやお前には用はないからさつさと出てつてお呉れ。そして夕方になつても歸つて來るにや及ばないよ。

メリイ(**マイケル**の方を向いて、少し不安さうに)

困つたねえ、マイケル。あれは朝つぱらからまた氣まぐれを起してるよ。あゝ、月が變つてつから、あれはなんて怖しい女になつたゞらう。(靜に立ち上がる)さう、あのガロン鑵でも賣りに行く

のが一番いゝ。

メリイ進み寄つて、包を取り上げる。

サーラ(怒つて叫ぶ)

下におゝき。メリイ、バーン。まだ草の露も乾かないうちから、喉が乾いたつて悪い心を起して鑵まで飲んぢまふなんて、なんて恥知らずな女だらう。

メリイ(まだ手に包を持つたまゝ、仲直りをするやうな作り聲で)

今日は喉が渇いたんぢやあないよ。サーラ、ケイシイ、胸焼けがするんだよ。だから彼處の井戸ん所まで下りてつて、喉をしめさうと思つたのさ。鑵は下の牧師さんとこのお嬢さんに賣りつけてやるよ。悪氣のない娘だから、ちよつと嘘でもつかうもんなら手に一杯お金を呉れるよ。

サーラ

そのブリキの鑵はそこにおいといで。メリイ、バーン。お前の話しつぷりで、あたしにやお前の飲みたさうなものがちやんと分るよ。

メリイ

こゝから市へ行く途中にや、酒場なんか一軒もありやしないよ。だから下の町でいゝ値に賣つたつて、一文もなくさずに持つてるよ。

メリイ右手より退場せんとする。

サーラ(飛び上がり、脅かすやうに鐵鎚を取り上げながら)

さあ、その鑵をおいといで。

メリイ(恐れて暫時彼女を見守り、それから包を溝の中に置く)

お前は氣が違つたのかい。サーラ、ケイシイ。女の誇であるお前が、この世の中を目茶苦茶にするなんて。

サーラ(**メリイ**に近寄り、彼女を左手に突き飛ばす)

あたしが氣違ひかどうかお前に見せて上げるよ。さあ、さつさと出ていつとくれ。いゝかね。そして用心おしよ。

メリイ(彼女の方を振り向いて)

サーラ、ケイシイ、出て行きや、お前のことをえれえ不信心な野蠻人だつて、年寄りや若いもんに言つてやるよ。牧師さんのキャベツ頭を、著物と一緒に鍋で煮やうつて取り外した奴だつてね。(牧師メリイの後、左手に來て聞いてゐる)それから祭壇の上に燃えてゐる蠟燭の火が、お前の影を禮拜堂の中に映すと同時に、消えて仕舞ふつていふこともね。

サーラ、**メリイ**に打ち向ふ。**メリイ**飛び退いて振り返る途端、危く**牧師**の腕の中に飛び込まんとする。

そして**牧師**を見、肩掛を口にあてゝくす〳〵笑ひながら溝の方に行く。

牧師(**サーラ**の方を向く。然し今聞いた言葉で少し怖れてゐる)いやはや、お前は怖しい女だ。ゆうべはわしを擔いたんで、お前はわしなんぞには何の用もないのだらう。

サーラ(尙聲に怒を含めて)擔いたんですつて！　神樣の前で口約束をしたことをお前さんは反古にするんですか。

牧師(曖昧に)サーラ、ケイシイ、お前は洗禮を受けたことはないんだらう。それを、お前のやうなものに、キリスト教の儀式を行ふのは變ぢやないか。(ポケットの中を探しながら、說き伏すやうに)だからわしは、わしの健康を祝して貰ふために一志お前にやつて、少しもわしを苦しめぬやうに、お前に行つて貰つた方がいゝ。

サーラそれがあなたの言草なんですか。牧師さん。若しもあなたが口約束を守らなけりや、あたしや皆のおる前で法冠をつけた僧正樣に、あたしの不平を訴へますよ。

牧師

そんなことをお前はするのかい。

サーラ屹度しますとも。教父さん。血を出しても肉刺をこしらへても、跣足でダブリンの町まで歩いて行きますよ。

牧師(困り切つて耳を掻きながら)早く今日一日經てばいゝ。サーラ、ケイシイ。お前なんかと事をするのは危ないこつたからなあ。

サーラさあ、早くやつてお呉れ。何か考へてる暇にや出來つちまふから。

牧師(屈して)或程、お前の言ふのが道理かも知れない。ぢやわしが戸口から顏を出したら、禮拜堂へ來て呉れ。(禮拜堂に入つて行く)

サーラ(後から呼びかける)ぢや、行きますよ。教父さん。

メリイ(二人の側に來、喫驚したやうに、しかし怒つてはおらないで言ふ)禮拜堂に行くんだつて！　又馬鹿くさい結婚のことなんだらう。(サーラ、彼女に背を向ける)そん

で顔を洗つたり、あたしをゆんべ酒の使にやつて、路で德利の酒を半分からも飲ましたんだね。(サーラの前に廻つて)又結婚なんていふ馬鹿な眞似をしてるんだね。

サーラ(勝ち誇つて)

さうなんだよ。メリイ、バーン。あたしやもうすぐ結婚するんだよ。今日からはもう、ウイックロウや、ウエツクスフオドや、ダブリンの町々で鑵を賣つてゐたつて、誰もあたしに惡口なんぞ言やあしないよ。

メリイ(**マイケル**の方を振り向いて)

マイケル、バーン、お前はあの女と結婚するのかい。

マイケル(鬱ぎ込んで)

さうだ。ほんとに。

メリイ(暫く**サーラ**を眺めてゐたが、やがて馬鹿にしたやうに吹き出して笑ふ)

ふふつ、ほんとに締りのあるしつかりした娘だ。そりや嘘ぢやないよ。だが、あたしや今日の今日まで、自分の子がそれ程の大馬鹿者だとは知らなかつたよ。驢馬を育てることや、獵犬を育てることや、風を甜めるやうに速く走る馬を育てることは出來ると聞いたが、あゝ、男の子に分別をつけることは難かしいこつた。

マイケル(鬱ぎ込んで)

俺が結婚しなけりや、彼女あ日暮頃にやジョンチング、ヂムの所へ行つちまふだらう。お前もあの女くれえ金を貰つたり、男に歌を賣つたりするのが旨え女は二人とないつていふことを、ようく知つてるだらう。

メリイ

だけどお前は牧師さんに金さへやりやあ、何處かへ行かうとしてゐる女を止めることが出來ると思ふのかい。

サーラ(怒つて)

詰らないことを言つて打ち毀しでないよ。あたしにだつて、上の眞黑けな小舍に寢てゐる菊石女が驢馬の首を締めることが出來るやうに、儀式ばつた結婚が出來るんだよ。

メリイ(嫌すやうに)

そりや儀式ばつた結婚したつていゝさ。サーラ、ケイシイ、ほんとによ。たが、それが一體何の役に立つんだい。結婚の指環を指に嵌めてりや婆にもならず、お前の綺麗な顏がしなびもせず、痛い時に痛みでも癒るといふのかね。金の指環を指に嵌め、絹の著物を著て結婚した立派な奧さん達たつて、お產の時にや苦しいんだよ。そしてね、そんな時にや、立派な驢馬と、荷馬車を一臺買へる

位の大きなお金を、ダブリンの市のお醫者様に拂はなければならないんだよ。（坐る）

サーラ（惑ふて）

ほんとかね。

メリイ（旨くいつたので喜んで）

誰が嘘なんかつくものかね。あゝ、お前はまだ生れてつから幾年も經たないんだから、世間のことはろくすつぽ、なに、まるつきり知りやしないんだよ。

サーラ（不安に思ひながらも強く言ふ）

お前なんか側にもよりつけない癖に、何うして立派な奥さんのことなんか知つてるんだい。

メリイ

こつちの町で一杯、あつちの町で一杯と飲み歩いてるうちにや直きに色んな智慧がついて、世間のことがすつかり解るやうになんのさ。サーラ、ケイシイ、お前みたいな人間だつて、暗い晩にそこいらの樽の上に腰をかけて喋り合つてる男や女の話を聞いてるりやあ、三月の野兎みたいにぢきに利口になるよ。

マイケル（サーラに）

阿母の言ふこたあ本當だ。なあ、若しもお前に少しでも分別があるんなら、馬鹿な眞似は止めにして、金貨を徒費して呉れんな。

サーラ（きつぱりと）

馬鹿だつて利口だつて、あたしや旨くやつたんだから何處までもやるよ。

メリイ

牧師さんは何を遣せつて言ふんだい。

マイケル

金貨が十志と、上の包の中に藏つてあるブリキの鑵さ。

メリイ（驚き且恐れて、包を見守りながら）

金貨とブリキの鑵かね。

マイケル

半ソベリンとガロン鑵だ。

メリイ（周章てゝ這ひ上がりながら）

どれ、町の方へ出かけやう。お前たちが丘の上を速く歩き過ぎてひどい目にあはされるといけないから。（左手に二三歩行き、それから振り向いて、非常に言葉巧みにサーラに言ふ）サーラ、ケイシイ。包からあの鑵を取り出すんぢやないよ。お前がそんな眞似をしてるのを見やうもんなら、上

を通る人がお前を揶揄つたり指差しゝたりするよ。いゝかね、袋の中へ大事にしまつておゝき。サーラ、それが一番だよ。

左手に歩み行く。それから一寸立ち止まり、困つたやうに見廻はす。

マイケル(低い聲で)

何うしたんだらう。

サーラ(心配さうに)

あんなに優しい口をきく時にや、屹度意地悪をするんだよ。

メリイ(獨語を言ふ)

禮拜堂にゐる方が安全だ。途中であいつに捕つたら殺されつちまふだらう。

よろ〳〵しながら右手に戻つて來る。

サーラ

何處へ行くんだい。市へ行くんならそつちぢやないよ。

メリイ

あたしやお前の幸福を祈りに、それから牧師さんのお祈りを聞きに、禮拜堂に行くんだよ。グリーナンに下りてく路は寂しいし、それに女が寂しい所をたつた一人で歩いてると、何んなことが起るか知れやしないからね。

牧師

禮拜堂の戸口に彼女が行き著いた時、牧師が白の袈裟を著けて現はれる。

さあ、來いよ。お前たちはこの俺に、一日中お祈りをさせとく氣なのか。俺は胃の中が空になつて死にさうだ。朝飯も食べられやしない。それに今日は僧正さんが、馬車に乘つてやつて來るかも知れない。

サーラ

今行きますよ。教父さん。

牧師

金貨をわしの手にのせて呉れ。

サーラ

さあ、あげますよ。教父さん。

サーラ、金を**牧師**に渡す。**マイケル**は溝から包を持ち來り、**サーラ**の少し後に立つ。そして包を手で觸つてみて、**メリイ**を意味ありげな目附で見る。

牧師(金貨を見ながら)

何處で取つたにしろこりやほんとの金貨だ。だが鑵は何處にあるんだい。

サーラ(包を取つて)

この綺麗な袋の中にあるんですよ。牧師さん。夜露にあたつても錆ないやうに、あたしがこんなかへ入れといたんですの。だけど今開けちやあ駄目よ。開けやうもんなら、あちこちの山の隅まであたし達のことを言ひ觸してよ。

牧師(包を取りながら)

サーラ、ケイシイ、わしの手に鑵をおだし。鑄掛屋が鑵を拵へた所で誰も何とも思やしないよ。

牧師包を開け始める。

サーラ

牧師さん、立派な鑵ですよ。あたし達は何にも知らない貧乏人ですけど、立派な鑵を作ることは出來るんですよ。ほんとにあの人は、仕事にかけては巧者なんですからね。

牧師包をあける。すると三本の空鑵利が轟がり出る。

サーラ

おや、おや。

牧師

誰がそんな物を見たことがあらう。わしを瞞し、嘘をついて、子供を結婚させるにも足りないやうな僅かなお金で、わしに結婚の儀式をさせやうとしたんだね。

サーラ(落膽し、驚愕して)

惡魔がしたんですよ。牧師さん。あたしやあんたに嘘なかん決して言ひやしませんよ。(兩手を擧げて)神樣、若しも惡魔が包の中から鑵を引き出したんでないなら、あたしを打ち殺して下さい。

牧師(烈しく)

さあ、行つてくれ。嘘の誓言なんぞしないがいゝ。さあ、行つてくれ。わしがそんな事を信ずるやうな大馬鹿者だと思ふなよ。お前たちは鑵を賣つちまつたか、夜の暗闇に飲み代と取換へつちまつたんだらう。

メリイ(**牧師**の左の腕に自分の手をのせ、仲裁するやうな聲で)

牧師さん、あの女は飲みたくない時にやそんなことあしないよ。それにあれは結婚のことを大騒ぎをしてるんだからね。どうか勘辨してやつておくれ。そして鑵のことなんぞ氣にかけないでおくれ。お前さんのやうな立派な、お金持の、しつかりした人には、空鑵一つ位ひ何でもないぢやないかね。

サーラ(哀願するやうに)

牧師さん、どうか金貨十志で結婚させて下さい。さうすりやあ夕方には、立派な鑵を拵へてあげま

すよ。――神樣のお仕へ人が水を運ぶに丁度いゝやうな罐をね。どうかすぐ結婚させて下さい。さうすれば朝でも晩でも、雨が降つて、膝をついてる所が水溜りのやうになつても、あなたの爲にいゝお祈りをして上げますよ。

牧師(大聲で)

お前たちはみんな惡人で、嘘つきで、巧みやだ。さあ、さつさと行つとくれ。そして、そこの溝の中に置いてある臭い襤褸はみんな持つてつてくれ。

メリイ(肩掛を頭の上に被つて)

牧師さん、神樣のお慈悲で、あれを結婚させてやつておくんなさい。そんな風にあの女を追つ拂ふと、下で何をしでかすか知れやしませんよ。そして途中で氣違のやうに誓ふでせう。

サーラ(怒つて)

彼奴の言ふことあ眞實ですよ。あたし達が丘を歩いてた時分彼奴が非常に飲みたがつてたから、婆あが酒とあのブリキ罐とを取換へちまつたのかも知れやしない。

メリイ(怒つて叫ぶ)

サーラ、ケイシイ、牧師さんに嘘を言ふなんてお前は恥を知らないのかい。

サーラ(居丈高になつて、**メリイ**に)

大つぴらにあたしを揶揄ふつもりなんだね。だが巧く逃げやうつたつて、又教會の中へ隱れやうつたつて、今度といふ今度は、お前を捕へたが最後逃がしやしないよ。

サーラ徳利を一本取り上げる。

メリイ(**牧師**の後に隱れながら)

牧師さん、彼奴を追つ拂つて下さい。どうぞ追つ拂つて下さい。あたしが頭を粉々に打ち割られてこゝん處に倒れてゐる所か、それとも教會の入口で、あんた達二人があたしのお墓を掘つてる所を、もしも僧正さんが御覽なすつたら何て言ふでせう。

牧師(**サーラ**を手で押しやつて)

行け。サーラ、ケイシイ。お前は俺の足元で人殺をする氣か。さあ、あつちへ行つとくれ。だが、わしは親切なことをしてやつて、こんな苦しい目に逢はせられるなんて何といふ大馬鹿者だらう。

サーラ(叫ぶ)

世の中のあらゆる强い男を相手にしたあたしだよ。牧師位にこのあたしがへたばると思ふのかい。さあ、そこをお退きよ。退かなきやお前さんも一緒にぶちのめして呉れるよ。

牧師

駄目だよ。サーラ、ケイシイ。わしやお前の仲間なんぞ恐れやしないよ。さあ、行つとくれ。用の

ない所へお前なんかゞやつて來て、教會の入口で怒鳴つたり、人殺をして騷ぐのはよして呉れ。

サーラ

あたしや彼奴の頭をぶち割るか、あの人と結婚する迄は一歩もこゝは退かないよ。若しもお前さんがあたし達を追つ拂ひたかつたら、さつさとあたし達を結婚させておくれ。肥えてはち切れさうな身體をしてゐるお前さんには、金貨で十志はいゝ値だよ。

牧師

わしはお前たちなんかに來て教會を汚して貰ふまい。どうせお前たちは地獄に落ち人間だからな。(十志を地上に投げ捨てる)さあ、このお金を持つて、わしの眼に見えぬ所に行つちまへ。今度わしがお前たちを見やうものなら、フイリイ、オクレンとこの黑い驢馬を盜んだのは誰か、又あの灰色の驢馬が食つてた枯草は誰の枯草だか、巡査に言ひつけてやるぞ。

サーラ

ほんとに言ひつけるつもりかい。

牧師

言ひつけるとも。

サーラ

若しもそんな眞似をしやうもんなら、ウイツクロウや、ウエツクスフオドや、ミース郡の鑄掛屋がみんなして、お前さんが外を見たり、娘つ子に色目を使つたりすることが出來ないやうに、あの窓の硝子にブリキの板を被せつちまふよ。それから又、お前さんとこの庭に卵を產む鷄を一羽だつて殘しちやおかないから、四旬齋の永い間、お前さんは腹一杯食べることが出來ないよ。

牧師

さあ行け。愚圖々々してると、今日までお前たちがやつて來た惡事を——嘘をついたり、盜んだり、ちよろまかしたり、搔逸つたりしたことを、皆日附まで書いて警察に送つてやるぞ。さあ、早く行け。キルメナムから逃げ去るか、お繩を頂戴するかどつちかだ。

マイケル(上衣を脱いで)

やい、牧師、手前みたいな者の所から逃げろつて？　うぬ、小舍へ引つ込んでゐやあがれ。若しも引つ込まなけりや、手前の唸り聲がこゝからクレアの海岸まで聞えるやうに、驢馬の手綱でぶちのめして呉れるぞ。

牧師

わしに手を上げてみい。神樣がお前の手足を腐らせて仕舞ふぞ。行け、行け。

マイケルを突きのける。

マイケル

腐らせるつて？　よし、受けてみろ。牧師奴。神樣がお前の言つた通り守つて下さるだらう。

マイケル手綱をもつて牧師にうち向ふ。

牧師（溝の方に駈けて行き、叫ぶ）

あすこに巡査がゐる。あゝ、有難い。オーイ！

メリイ（牧師の口を片手で抑へて）

路の上に打のめしてお仕舞ひ。何で向ふまで聞えるもんかね。（マイケル牧師を引き倒す）

サーラ

猿轡をおはめよ。

メリイ

口の中に袋をおつめ。

鍋を包んだ袋で牧師に猿轡をはめる。

サーラ

袋を頭から被せておやりよ。それから若しも巡査がやつて來たら、溝の向ふの沼ん中にまつさかさまに投げ込んでやらう。

何かの袋で牧師を縛る。

マイケル（メリイに）

騒がせないやうにするんだよ。それから叫ぶといけないから、襤褸をしつかり詰めておくれ。（テントの所に戻る）サーラ、ケイシイ、さあ早く。巡査はこつちへは來やしないから、今のうちにはやく逃げやう。

大急ぎで其處らのものを取纏める。牧師は地上で身體を絞つたり、蹠いたりしてゐる。老婆メリイは、牧師を騒がせぬやうにしてゐる。

メリイ（牧師の頭を輕く叩いて）

牧師さん、お騒ぎでないよ。何うしたんだい、そんなに蹠いて？　息がつまるのかね。（袋の中に片手を入れて牧師の口邊を探り、牧師の背中を輕く叩きながら）お前さんは息のつまる振をしてるんだね。なぜつてお前さんの鼻からはまるで四月の東風みたいに、樂に息が出入りしてゐるぢやないかね。（宥めるやうな聲で）さあ〳〵牧師さん、もう安心おしよ。そしてね、少しは利口になり、我慢強くおなりよ。それから可哀さうな罪人の、僅かばかしのお金を奪ふやうな輕浮なことは、二度と再びおしでないよ。（牧師やゝ靜になる）さう、さう。お前さんは大層お利口もんだ。心配おしなさるなよ。決してお前さんに怪我はさせやしないから。あたし達だつて、お前さんを苛めるのは

眞實に嫌なことなんだよ。だがねお前さんは。あたし達が父から子に、子から又その子に、その子から又その子に、母から娘に、娘から又その娘にと長いことやつてきた暮し方を、今更かれこれとおせつかいをやいて何うするんだい。それから教會ぢや、誰も信じられないやうなことを誓つたりする——つて聞いてるが、あたし達は教會へ行つて誓言をする必要は少しもないんだよ。それから又指に指環を篏めたつて、雨が降つて驢馬の足が滑りさうな時、小舍から驢馬を曳き出したり手綱を引つぱつたりすりや、皮を擦剝くのが落だよ。

マイケル(荷物を纏め終り、**サーラ**と共に出で來る)

さあ、片附いた。だが今日のことを巡査に喋られるといけないから、沼ん中へ牧師の奴を投げ込んぢまはう。

サーラ

あゝ、それがいゝよ。

メリイ(嚇すやうに)

サーラ、ケイシイ、牧師さんに亂暴をおしでないよ。日暮にあたし達と一緒に飲んだ仲なんだからね。多分牧師さんは、あたし達を苦しめやしないつて立派に誓ふよ。若しか牧師さんを投げ込んでみな、屹度警察ぢやあたし達の仲間を、男だつて、子供だつて、女だつて、驢馬だつて、一つからげにして、絞罪にしつちまふに定つてゐるよ。

マイケル

あいつあ誓ひなんか何とも思やしめえ。

メリイ

いいや、お前、あいつらは神樣のお怒りが怖しいんだよ。(袋の中の牧師の耳ん所に、自分の口をもつて行く)教父さん、あたし達を許し、そして誰にも告口しないつてお前さんは誓ふかね。(袋の中で牧師うなづく)そうら、袋の猿轡を篏められたなりで、こつくりをしてゐるよ。さあ、袋や猿轡を取つて樂にしておやり。

マイケル(恰も馬にでも物を言ふやうに)

首を上げろ!

袋をとつてやる。髪の毛が逆立ちになつて、**牧師**現はれる。口を自由にしてやる。

メリイ

誓ふまで捕へておいで。

牧師(微かな聲で)

確に誓ふよ。若しも無事にわしを放して呉れるなら。お前たちの告口はおろか、たつた一言だつて

言やあしないよ。さうすりや、神樣も、今日わしがお前たちを構つたことを、お許し下さるだらう。

サーラ(指環を**牧師**の指に嵌める)

そら、指環だよ。牧師さん。死ぬまで誓を忘れぬ爲のだよ。あたしの胸は、お前さんのおどけで燒けつちまつたから、あたしや結婚の話なんかもう當分しまい。

メリイ(靜に立ち上がり、穩かに)

牧師さん、あれはいら〳〵してゐるんだから、構つちやいけないよ。彼女の言ふことは眞實で正しいんだよ。それにあたし達はね、お前さんの力を一寸も借りずに、飲んだり、食つたりすることが出來、又若くつて顏の綺麗なうちは、戀愛も出來るんだよ。

マイケル

さあ、急がう。彼奴あ俺達に、お金を徒費ひさせぬ所が偉いよ。さあ、クラシュの草原の宿なし仲間としこたま飲まう。

彼等は荷物をまとめる。**牧師**立ち上がる。

牧師(片手を擧げて)

わしは今日、お前たちの罪を人に告げて、刑罪を受けさするやうなことはせぬと誓つた。然し全能の神から、天の炎を呼び下ろさぬとは誓はぬぞ。

牧師は大きな、僧侶らしい聲で、ラテン語の呪詛を言ひ始める。

メリイ

この老ぼれの惡黨め。

一同(一緒に)

逃げろ、逃げろ、命懸で逃げろ。

一同駈け出す。**牧師**一人勝つたかたちで舞臺に殘る。

(幕)

西海岸の鬼息子

人物

クリストファア、マホン　老マホン、彼の父、家畜の所有者
マイケル、ジエムス、フラハーテイ、居酒屋の主人
マーガレツト、フラハーテイ（俗稱ペギーン、マイク）マイケルの娘
シヨオン、キヨーウ、年若き百姓、ペギーンの從兄
後家のクイン　三十位の女
フイリイ、カリン
ジミイ、フアーレル　共に小作人
セーラ、タンジイ
スウザン、ブレイデイ
オナ、ブレーク　村の娘達

場所及び時

荒涼たるメイオウの海岸に臨める、或る農村の近傍に起れる出來事。第一幕は或る秋の夜。第二幕及び第三幕はその翌日。

第一幕

大層粗野な、そしてうす汚ない田舍の居酒屋。右手に棚のついた帳場の如きものあり、棚の上には德利やら瓶やらが澤山に載つてゐる。又帳場の近くに空樽がいくつかある。後方、帳場より稍左手に、戸外に通ずる戸口がある。それから、更に左手に脊高長椅子があり、その上に棚がある。そして其上にも瓶が並んでゐる。また窓の上に一脚のテイブルが置いてある。左手には大きな爐があり、中に泥炭が燃えてゐる。又奥に通ずる小さな戸口が其處にある。二十歳位の年格好な、野育ちらしいが然し美しいペギーンが、テイブルの上で何か書いてゐる。普通の百姓娘の服裝をしてゐる。

ペギーン（書きながらゆつくり讀む）黄色い上衣（ガウン）を作る切地を六ヤード。躍（かしら）の高い、眞鍮の紐穴（ひもあな）のついた編上の靴を一足。婚禮の席に相當な帽子と細い齒の櫛を一個。右の品々を黑ビール三樽と共に、ジミイ、ファーレルさんの籃車にて、今度の市の前の晩までに、マイケル、ジエムス、フラハーティ宛にて御送り下さい。宜しく御願ひいたします。マーガレツト、フラハーティより。

ショオン、キヨーウ（肥えた美しい若者、ペギーンか丁度名前を書き終つた時入り來り、娘獨りと見て不作法に見廻す）とつつあんは何處（どこ）へ行つたい。

ペギーン（彼を見向きもしないで）直きに歸つて來るよ。（宛名を書く）カースルバアア。酒商シイマス、ムルロイ樣。

ショオン（不安さうに）路にや見えなかつたよ。

ペギーン なんで見えるもんかね。（切手を舐（な）め、封筒の上に貼る）日が暮れてつからもうかれこれ三十分も經つもの。それにこんな眞暗な晩にさ。

ショオン（再び戸口の方を振り向いて）ペギーン、マイク、俺りやお前に會はずに行き過ぎやうか、それとも會つて行かうかと、暫く外でぐず〳〵しとつたんだよ。（火の側に近寄る）すると、ひつそりかんとした中に、牛の奴等が息をし

たり、溜息をついたりするのが聞えて來たが、橋から此處の家までにや足音一つ聞えなかつたよ。

ペギーン（手紙を封筒に入れながら）

おとつつあんは四つ角の上でフィリィ、カリンに逢ひ、今一組の連中と一緒になつて、ケイト、カシディさんのお通夜に行くつもりなんだよ。

ショオン（驚いて**ペギーン**を見ながら）

なに、こんな眞暗闇に、そんな遠い所に行つたんだつて。

ペギーン（じれつたさうに）

さうだよ。あたしをこんな山の蔭に、たつた一人ぼつちにして行つて仕舞つたんだよ。（立ち上がつて封筒を膳棚の上に載せ、それから時計を卷く）ねえ、ショオン、キョーウ、可哀さうに、女をたつた一人ぼつちにして、夜の明けるまで今かく〳〵と待ちあぐませるなんて、隨分夜は長いもんだよ。

ショオン（ぎごちない心持で）

そんなら近いうち俺達二人が結婚すりやあ、お前もそんな愚痴は言はねえで濟むよ。おらあお通夜だらうが、婚禮だらうが、こんな眞暗な晩にや決して外や出やしねえからな。

ペギーン（人を馬鹿にする程上機嫌で）

お前はあたしがお前の嬶になるもんだと固く信じてゐるんだね。

ショオン

ちやんと固い約束が出來てゐて、俺達あたゞライリィ和尚さんが、僧正樣だか、羅馬法王樣だかのお許を貰つて下さるのを、今日か翌日かと待つてゐるんぢやねえか。

ペギーン（膳棚の側で食後のお仕舞ひをしながら、男をなぶるやうに眺めて）

法王樣がお前みたいな者のことを心配して下さると思ふのかい。呆れ返つちまふねえ。若しもあたしが法王樣なら、あの藪睨のレッド、リナハンだの、跛のバッチーンだの、カリホルニアから逐はれて氣が變になつたムラニィ一家だのしかおらない、こんな所の心配はしやしないよ。聖坐にいらつしやる法王樣に心配して貰ふにしちや、時節がらあたし達あ揃ひも揃つたろくでなし許しさ。

ショオン（憤慨して）

假令俺達がろくでなしな連中にしろ、他所の土地にだつてろくな奴は居やしねえよ。なあ、今の時節が惡けりや、何時だつて惡いんだよ。

ペギーン（馬鹿にして）

おや、さうかい。あの巡査をめつかちにしたダニーン、サリバンだとか、あゝ、あのマアカス、クインのやうに話が上手で、愛蘭の昔噺をしちや婆さん達を泣かせながら、そのくせ牝羊を不具にし